

A young woman with long, straight brown hair is shown in profile, looking towards the left. She is wearing a white jacket over a dark top. The background is a blurred cityscape with buildings and a clear sky. The text "Short Drama Sinario Works" is overlaid in a bright cyan color.

**Short
Drama
Sinario
Works**

はじめに

シナリオ・センター研修科のゼミ課題として製作したショートドラマのシナリオを掲載しています。シナリオ1本を映像化すると約10分のショートドラマになります。

野尻有希はネット上の筆名です。

更新履歴

2014年9月29日：

・新作8本追加。

「戦場の一休宗純（課題30時代劇）」

「三転倒立ライフスタイル（課題29ホームドラマ）」

「君のアドリブパパ（課題28喜劇）」

「ライン上のゴースト（課題27サスペンス）」

「失われた地図を集めて（課題26メロドラマ）」

「BLACK BENGO（課題25弁護士）」

「ワケあり先生とハダカの王子様（課題24教師）」

「君が生きるために大切なことはいつも伝えられなかった（課題23医師）」

・各章のタイトルにシナリオ・センター研修科での課題番号を明記しました。

・「約束のカヌー（課題19：別れの一瞬）」の内容に一部重複があったので、訂正しました。

・「はしるかける（養成講座課題：魅力的な叔父さん）」に人物表の記載が漏れていたので追記しました。

2014年8月31日：久々の更新です。

・章のタイトルにシナリオ・センターでの課題名を記載しました。シナリオ・センター研修科ゼミ生は参考にご利用ください。

・新作6本追加

「再会の脱法ハーブ」刑事ドラマです。課題テーマ「刑事」

「プライバシー・ゼロの国」IT犯罪の記者ものドラマです。課題テーマ「記者」

「約束のカヌー」カヌー競技のスポーツものドラマです。課題テーマ「別れの一瞬」

「10秒チャレンジ」中年サラリーマンのラブコメです。課題テーマ「愛する一瞬」

「ちゃいくら」チャイニーズクラブを舞台にしたコメディです。課題テーマ「憎しみの一瞬」

「論文盛りました？」STAP論文を題材にしたドラマです。課題テーマ「裏切りの一瞬」

2014年3月16日：新作シナリオ3本追加しました。

「一日一善、ときどき変態」大学生の女の子と変態が出てくるコメディです。課題テーマ「男と女」

「ペテン師のレクイエム」バイオリニストが、ゴーストライターを使っていた元作曲家と再会する話です。課題テーマ「再会」

「オレスタイル」冬季オリンピック、スノーボードハーフパイプ日本代表コーチが主人公の話です。課題テーマ「古痕」

2014年2月23日：新作シナリオ「ウォーター・ビジネス」を追加しました。ミネラルウォーターを販売する外資系企業の社長と、工場のある村の住民が対立するビジネスドラマです。課題テーマ「雨」

2014年2月10日：表紙画像を変更しました。

2014年2月6日：表紙画像を変更しました。

2014年2月6日：新作シナリオ「九尾の狐とディープフリーズ日本列島」を追加しました。気象を操作する科学技術者が主人公の近未来SFです。課題テーマ「雪」

2014年1月26日：初回作成。作成日新しい順に並べています。

(初回掲載作品)

「ホームレスのライフノート」ホームレスのお葬式の話です。課題テーマ「葬式」

「18歳以上閲覧できません」携帯ゲーム機のネット通信機能を使ったいじめの話です。課題テーマ「不安」

「アフター・ネグレクト」育児放棄、虐待の話です。課題テーマ「死」

「シンデレラは嘘をつきすぎてる」テーマパークで結婚式を挙げるのだが、新婦のお父さんが式にいない、という話です。課題テーマ「結婚式」

「お父さんもう来ないで」女性刑事の父親が殺人犯で、という刑事ドラマです。課題テーマ「別れ」

「紙袋の女」紙袋をかぶった女が企業の面接にやってきて、という話です。課題テーマ「出会い」

「はしるかける」親戚の娘の運動会に陸上選手の叔父さんがやってきて、という話です。課題テーマ「魅力的な叔父さん」

「戦場の一休宗純」人物表

人 物

一休宗純（いっきゅうそうじゅん）（68）臨濟宗大徳寺派 高僧

森女（しんにょ）（26）旅芸人の女

畠山武房（38）室町幕府管領（かんれい）家

妙界（みょうかい）（42）第48代大徳寺住職

兵士 1

語り

「戦場の一休宗純」 本文

○京都・戦場と化した市街

倒壊した家屋多数。道端には町衆や武士の死体。飢餓に喘ぐ乞食もいる。

遠くで武士が馬に乗り戦う姿も見える。

死体の脇で兵士1、娘を犯している。

一休宗純（68）、お経を唱えつつ、杖をついて歩いて来る。

髪と髭は伸び放題、汚れた衣、杖の頭にドクロがある。

兵士1「坊主め、気が散るわ」

一休、お経を唱え続ける。

兵士1、刀を抜く。一休に斬りかかろうとした瞬間に流れ矢。

兵士1、絶命する。娘、はだけた衣のまま逃げ出す。

語り「15世紀末、数十年に亘る内乱が京の都を壊滅させた。後に言う応仁の乱である」

一休、兵士1の死体にお経を唱える。

○神社・参道入口・鳥居付近

参道の森が燃えている。

森女（26）、鳥居の下で目を瞑り、笛を吹いている。

一休、ドクロの杖をついて歩いて来る。

一休「お主、目が見えぬか？」

森女、笛を吹き続ける。

一休「ここで死ぬつもりか？」

樹齢数百年の大木、森女の方に倒れて来る。

一休、森女の体を抱えて救出。

一休「お主の命、儂に預けよ」

森女がいた場所では大木が燃えている。

○大徳寺・境内

寺院の建物が至る所で倒壊している。

一休、若い坊主と共に建物の修復作業をしている。

森女、瓦礫に座っている。

○同・本坊・座敷

一休、枯山水の庭を見ている。

森女、水墨画が描かれた襖の前に座る。

妙界（42）、廊下からやって来る。

妙界「一休殿、その女は？」

一休「盲目の旅芸人じゃ。森女と呼んでおる」

妙界「また女を囲っていると噂が立ちますぞ」

一休「女好きの坊主など、この大徳寺にも何人もおる。男を好む坊主も多いと聞くしな」

妙界「言葉を慎まれよ」

一休「妙界殿とて、前の住職の寵愛を受け、今の地位を手に入れられたのじゃろう」

妙界「（咳払い）薄汚い衣に髪も髭も伸び放題。一休殿は高僧の位に泥を塗るつもりか？」

一休「外見ばかり取り繕って、中身のない坊主よりよっぽどましよ」

高価な法衣を着た妙界、拳を握る。

妙界「京の都も随分と物騒になった。一休殿も熊野の辺りまで逃れてみては如何か？」

一休「戦に疲れた民は仏を求めている。大徳寺を立て直すまで都を離れることはできん」

妙界「我々には任せておけぬということか？」

一休「戒律を守るだけが仏の道ではあるまい。戦乱の世には、破戒僧も必要じゃ」

一休、奥の襖をちら見。立ち上がって、

一休「ではそろそろ」

一休、よろけて奥の襖に杖を突き刺す。

一休「すまぬ。立派な襖絵であったのに」

一休、森女を連れて座敷を出る。

奥の襖が開く。

畠山武房（38）、身を震わせて、

畠山「あやうく目を潰されるところだったわ」

妙界「己、一休、馬鹿にしおって」

畠山「とんだ生臭坊主でござったな」

妙界「畠山殿、あのご老人にご挨拶を頼む」

と、袖から銭袋を出し、畠山に渡す。

畠山、刀を抜き、剣先を舐める。

○酬恩庵・外観

木々に囲まれた藁ぶき屋根の小さな庵。

○同・中

狭く侘しい室内。一休、森女に膝枕。

一休「森女よ、家族はどこにおる？」

森女「おりませぬ」

一休「戦で失ったか？」

森女「畠山という御侍様に村毎焼かれました」

一休「瞳の光もその時失くしたか？」

森女「左様でございます」

一休「森女。儂はお主の心に仏の光を見たぞ」

森女「仏の光？」

一休「飢餓と疫病が蔓延していると言うに、戦は続き、僧は気取る。仏は姿を隠された」

森女「私の中には真っ暗な闇しかありませぬ」

一休「その暗闇の奥底に儂は光を感じるがな」

庵の中に矢が飛んでくる。驚く一休。

○同・表

畠山と兵士達、庵を囲んでいる。

兵士達、松明を庵に投げる。燃える庵。

一休と森女、中から慌てて出て来る。

一休「何事か？」

畠山「何じゃ。人が住んでおったか」

一休「御侍殿、何のつもりか？」

畠山「問答無用。ここを我々の陣地とする」

兵士達、庵をなぎ倒す。

一休「待たれよ」

畠山「口うるさい坊主だ。切り捨てよ」

兵士達、一休と森女に刀を向ける。

一休「この娘に罪はない。森女、逃げるのだ」

畠山「美しい女ではないか」

森女、畠山の前に連れ出される。

畠山「坊主相手では満足できなからう」

と、森女の上着を勢いよく剥ぎ取る。

畠山「これは見事。天女のごとき白肌よ」

森女、身を縮めて肌を隠す。

一休「貴様、何をする？」

兵士達、一休の体をおさえつける。

畠山「ご老人、幕府管領家の嫡男、畠山武房と知っての物言いか？」

森女「畠山？」

畠山「そうじゃ。女、喜べ。相手をしてやる」

森女「畠山様、どうかご慈悲を。こちらは大徳寺の高僧、一休宗純様でございます」

畠山「貴様が一休か。若い女を囲う生臭坊主という噂は、誠であったな」

一休「匂う匂う。そなたも生臭侍のようじゃ」

畠山「一休はとんちが得意と聞いているが、とんちなどでは世は救えぬ。世を導くのは武家の力だ。力無き者は滅びよ」

畠山、刀を抜く。

畠山「一休、女を助けて欲しくば自害せよ。さもなくばこの娘、殺す」

一休「このおいぼれの命、取りに来たのだな」

畠山「お主は徳の高い高僧と聞いておる。死ねば見事仏になるのだろうか？」

一休「死んで仏になる坊主などいない。人はみな同じ、死ねばただドクロになるだけ」

畠山「救いも何ももたらせぬか。哀れよの」

と、一休に斬りつける。一休、負傷。

森女「おやめください！」

畠山「どけ女」

森女「畠山様、私を殺しなされ」

畠山「何？」

森女「私を殺しなされと申しております」

畠山「坊主の為に命を捧げるつもりか？」

森女「私めの村は畠山様の兵に滅ぼされました。我が命、無きものと思うております」

畠山「その潔さ、気に入ったぞ娘。どうだ皆の者、一晩たっぷり味わってから、こやつを見世物小屋に売り飛ばすことにしようか」

兵士達、にやけ顔を森女の方に向ける。

一休「お主ら、修羅畜生の道に落ちるぞ」

畠山「黙れ一休。女の善意を無駄にする気か」

一休「善が何かも知らぬ阿呆がよく吠えるわ」

畠山、えいやと一休に刀を振り下ろす。

森女、目をかっと開き、一休を突き飛ばす。

森女、代わりに刀で斬られる。

一休「森女！ 目が見えるのか？」

森女、血を流し、一休の脇に倒れる。

畠山「高く売れたのに、傷ものになったか」

畠山、一休の前にかがみ刀を向ける。

畠山「ご老人、少し死期が早まったの」

森女、畠山をにらむ。

一休、畠山に顔をそっと近づけ、穏やかに接吻する。

畠山「何をする？ 気でも狂ったか？」

一休「お主の生きた業、全てもらい受けよう。儂も地獄に落ちる身。ちょうどよい土産だ」

遠くから馬の駈ける音。青いのぼり旗。

畠山「あの旗は敵軍か」

矢が乱れ飛んで来る。畠山達、馬に乗り、

畠山「都には二度と入るな。目障りじゃ」

と去っていく。一休、森女の体を抱き、

一休「無事か？」

森女「一休様こそ」

一休「たばかったな。目が見えるのだろう」

森女「何も見えぬと信じた方が生き易いのです、親も子も全て奪われた私にとっては」

一休「森女よ、これからは信じてくれるか、お前の中にある仏を」

一休、涙を流す。遠くで戦の物音。

○朱雀門（夜）

平安京の入り口にある大きな門。

大雨だ。周辺には死体や瓦礫の山。

一休と森女、雨に打たれ、歩いて来る。

門に着いた二人、身を寄せ合い、座る。

妙界、歩いて来る。付き添いの小僧、朱い傘と提灯を持つ。

後ろには着飾った僧侶の行列。

妙界、一休を見かけて、

妙界「一休殿。そのお怪我、どうされた？」

一休「つまらぬ戦に巻き込まれてな」

妙界「その怪我でどこに行かれるおつもりよ？」

一休「もちろん都だ。仏を伝えねばならぬ」

妙界「待たれよ。連れの女もひどい怪我だ」

一休「妙界殿、畠山武房と言う男、知り合いか？」

妙界「いや、知らぬな」

一休「そうか、ならよい」

妙界、礼をして歩き出す。

雨が上がる。雲が晴れ、満月が浮かぶ。

一休「我らも行こうか。時は人を待たぬ」

森女、目を閉じ、安らかな顔つき。

一休「どうした？ 夢を見ておるのか？」

森女、満月の光を受ける。息はない。

一休、立ち上がり、森女に両手を合わせる。

一休、杖をつき、一人歩き出す。（了）

「三転倒立ライフスタイル」人物表

人 物

蛤 真守(はまぐり まもる) (40) 自称タレント

蛤 凜(りん) (14) 蛤の娘

蛤 鈴(すず) (69) 蛤の母

蛤 環(たまき) (37) 蛤の妻・故人

○蛤書店・表（夕）

駅前商店街にある小さな書店。

サングラスをかけた蛤真守（40）店の脇に座り、ギターでファンキーな演奏。

凜（14）、制服姿で帰って来る。

凜、怪訝な顔で蛤を見つ店に入る。

○同・店内（夕）

鈴（69）、カウンターに座り、小説『原発ブラックアウト』を読んでいる。

凜、帰って来て、

凜「おばば、店の前に変なのいるけど」

鈴「ほっとけほっとけ」

凜、外へ。

○同・表（夕）

凜、ギターを弾く蛤を見つめる。

凜「営業妨害です。他行ってもらえませんか？」

蛤「凜、大きくなったな」

凜「え？ 誰？」

蛤、サングラスを外してにやつく。

凜「お父さん！」

蛤、ギターをジャランと鳴らす。

○同・店内（夕）

鈴、電話の受話器に向けて、

鈴「だからそんな男知らないって。切るよ」

と言って切る。溜息。キセルで煙草を吸い始める。

蛤と凜、店に入って来る。

凜「おばば、さっきの変な奴お父さんだった」

鈴「ああ、知ってるよ」

凜「え？ 知ってたの？」

蛤「ちょっと世話なるぜ母ちゃん」

鈴「よくまあノコノコ帰って来たなバカ息子。凜、塩まいて追い出しな」

蛤「相変わらず頑固な婆さんだな」

鈴「3年間連絡1つもよこさないで突然帰って来やがって。成功するまで帰って来ないんじゃないのか？」

蛤「わかったよ、東京戻ればいいんだろ」

と音楽雑誌の立ち読みを始める。

鈴「お客さん、うちは立ち読み禁止だよ」

蛤「はいはい、すぐ決めますから」

凜、蛤の隣に立ち、

凜「お父さん、小説家なるんじゃないの？」

蛤「おお。今も小説書いてるよ。時間的余裕あるからさ、ファンクの演奏も始めたんだ」

凜「え？ てことは、東京で成功しちゃった？」

蛤「いやそれがさあ、わざわざ東京で成功する必要ないってわかっちゃったんだよね」

凜「やっぱ成功してないじゃん」

蛤「今だとネットあるからさ、福島からでも世界に向けて文章や音楽発表できんだぞ」

凜「負けて帰って来ただけだったか」

鈴、蛤に塩をかける。

鈴「ほら、さっさと帰れ」

蛤「客に塩かける店員何て見たことねえぞ」

鈴、ごほごほ咳こみ、その場に倒れる。

凜「おばば、しっかり」

蛤「凜、救急車呼んでくれ」

と鈴の体を抱き抱える。

○病院・鈴の病室（夜）

鈴、ベッドにいる。蛤が入って来る。

蛤「凜はもう家に帰したよ」

鈴「真守の世話なるなんて私もおしまいだね」

蛤「母ちゃん、これ吸ってみるよ」

とキセルを差し出す。

鈴「煙草は吸うなって言われたんだ」

蛤「煙草じゃない。ハーブだよ」

鈴「ハーブって、もしかして危険ドラッグか？」

蛤「違う。ナチュラルハーブ。喉に効くから」

鈴、キセルでナチュラルハーブを吸う。

蛤「凜の面倒は俺が見るからゆっくり休めよ」

鈴「真守よ、本気でこの街で暮らす気なのか？」

蛤「ああ。本屋の店員も任せてくれ」

鈴「じゃあもう小説家なるとかタレントなるとか夢みたいなこと言うの辞めんだね？」

蛤「いいや。それとこれとは話が別だ」

鈴「半端な気持ちで仕事すんならお断りだよ」

蛤「母ちゃん。時代が違うんだよ。今はな、何歳なっても、どこ住んでても夢追っていいんだよ。そういう時代になったんだよ」

鈴「亡くなった環さんのためにも、ちゃんと生きてみろよ」

鈴、キセルから煙を吐き出す。

○蛤書店・店内（夕）

ファンクミュージックのかかった店内。

蛤、カウンターでガムを噛みつつノートPCを操作。

凜、帰って来る。

凜「お父さん、ちゃんと店番してよ」

蛤「してるって」

凜「何それ？ 小説書いてんの？」

蛤「電子出版するんだ。凜も読む？」

凜「仕事中は副業禁止」

蛤「おばばだって毎日店の本読んでたろ。どうせ客こないし、ファンキーに行こうよ」

凜「ちょっとはお客さん増やす工夫したら？」

蛤「まあそうだな。おばばだっていつぽっくり行っちゃうかわかんないし」

凜「縁起でもないこと言わないでよ」

蛤「でもさ、環のこともあるし」

とカウンターの奥、茶の間にある蛤環（37）の写真をちらと見る。

凜「全然頼りになんないんだから」

と店を飛び出していく。

○太平洋沿岸・蛤家の跡地（夕）

かつて住宅地だった痕跡のある野原。

中央には東日本大震災被災者の慰霊碑。

海岸の先に廃墟となった原発が見える。

凜、慰霊碑の前に座り、風船ガムを膨らませている。

蛤、やって来る。

蛤「やっぱり、ここにいたか」

凜「お父さん……随分変わったでしょここも」

蛤「3年前、俺達の家がここに建ってたとは思えないな。瓦礫もきれいに片付いたし」

凜「原発、まだ復旧作業中だけどね」

蛤「凜、お母さんに手合わそう」

蛤と凜、手を合わせて黙祷。

蛤、目を開く。蛤の家があった辺りに住宅の幻。

玄関に環の幻が立っている。

蛤「環？」

凜「え？」

蛤「今、お母さん見えたぞ」

凜「変なこと言うのやめてよ」

蛤「凜、寂しくなかったか？ お母さんがいなくなって」

凜「もう会えないってわかってるから」

蛤「俺よりよっぽど大人になったな」

凜「それよりさ、お父さんまで夢を追うとか言って突然いなくなるんだもん。いきなり一人にされた私の気持ち考えなかったの？」

蛤「人生燃え尽きるまでやりたいことやろうと思ったんだ。生き残っちまったからな」

凜「で、燃え尽きるまでできた？」

蛤「まだくすぶってる。現実甘くなかったよ」

凜「これからは私のこともちゃんと見てよね」

鈴の声「おいおい店はどうした？」

鈴、キセルを吹きつつ歩いて来る。

蛤「おばばごめん。売上は明日必ず取り戻す」

鈴「真守、東京から帰って来た理由これか？」

と『原発ブラックアウト』を差し出す。

鈴「経産省の現役官僚が匿名で書いたなんて宣伝してるけどよ、作者の久里浜セメルって、真守、お前のことじゃねえのか？」

蛤「おばば、何でわかった？」

凜「え？ マジなの？」

鈴「ちょっと読めば真守の文体だってわかる。アホなのによ、モノ書けば誰に似たんだか理屈っぽい皮肉屋になる。お前の癖だな」

蛤「小説にしたのは俺だけど、元の話をしたのは本当のキャリア官僚様だ。俺は陽のあたらないゴーストライターってとこだな」

鈴「書いたのお前の息子だろ、嘘だらけだ、謝罪しろって家に電話までかかってきたぜ」

蛤「色々こっちも面倒なことに巻き込まれてさ。東京でやってくの難しくなったんだよ」

鈴「それで逃げてきたわけか、情けねえな」

蛤「逃げちゃいない。取り戻しに来たのさ」

凜「取り戻す？」

蛤「震災で全部奪われたって思ったけど、そうじゃなかった。俺が自分で犠牲にしてきたんだ、凜やおばばと過ごす時間をさ」

凜「お父さん」

蛤「いろんなもの犠牲にして成功しても意味はない。そんなの敗北だって気づいた。これからは犠牲にしてきた時間取り戻すよ」

凜「じゃあもう突然どっか行くとか言わない？ 本屋の仕事もちゃんとやる？」

蛤「もちろん本屋の仕事はちゃんとやる。けどな、空き時間に創作活動もがつつりやる」

鈴「また中途半端な野郎だなおい」

蛤「中途半端じゃない。両立つつうんだよ。家庭と本業と副業の両立だ、俺ならできる」

凜「それさ両立じゃなくて三転倒立じゃない？」

蛤「そうだ三転倒立だ。家庭と本業と副業の三転倒立ライフスタイル。ファンキーだぜ」

鈴「能書きはいいよ。けどな、やるならどんな批判されても貫き通せ。魂見せてみろ」

蛤「俺のこと、誰の息子だと思ってやがる？」

と三転倒立を試みる。失敗して転ぶ。

○蛤書店・店内

鈴、キセルを吹きつつレジにいる。

凜、風船ガムを膨らませつつ、『原発ブラックアウト』を立ち読み。

蛤、店内で三転倒立の練習をしている。

鈴「真守、三転倒立は外でやれ。凜は立ち読み禁止だからな」

真守「凜、どうだ？ お父さんの書いた本」

凜「お父さん、私も小説家目指していい？」

真守「おお、いいぞどんどんどんやれ」

鈴「たく、しょうもない連中だな。夢ばかり見てんじゃねえよ」

真守「現実は厳しいからな、夢だけ見てるようじゃうまくいかない。バランスが大事なんだぞ。

凜、お父さんに続け。三転倒立だ」

と三転倒立する。（了）

「君のアドリブパパ」人物表

人 物

梶 篤志(かじ あつし) (40) 俳優

立花 操(みさお) (17) 女子高生

木戸 翔(しょう) (30) ドラマスタッフ

小津 明 (35) 買春客

操の母

「君のアドリブパパ」 本文

○東京ひとつ星ホテル・外観

○同・ドラマ出演者オーディション受付

『新ドラマ『アンとパパの殺人事件』主要キャストオーディション』とある。

梶篤志（40）、木戸翔（30）の前へ。

木戸「梶さんじゃない。受けに来たんだ」

梶「木戸ちゃんお疲れ。また受付やってんの？」

木戸「今日即興演技のオーディションだって」

梶「即興だと？ アドリブの達人なめんなよ」

木戸「設定言うよ。あなたはホテルにいます。別れた妻に育てられた娘と10年ぶりに再会する父親演じて下さいだって」

梶「わかった、ヒロインのアンの父親役だろ」

木戸「これ娘役の女の子がいる部屋の番号」

とメモを渡す。905号室とある。

梶「この役、悪いけど俺がもらってくぞ」

と、メモをスーツのポケットにしまう。

○同・廊下

梶、廊下で側転を決める。ポケットからメモが落ちる。

梶は気づいていない。

○同・九階

エレベーターが到着。梶が出て来る。

梶、ポケットに手を入れる。

梶「あれ？ ないぞ」

梶、ポケットをひっくり返す。

梶「なくしたか。えっと何号室だったっけ？」

と905号室と906号室の前で迷う。

○同・906号室

立花操（16）、病院の診療明細書を見ている。

スマホを取り、ラインを開く。『906号室だよ。4で交渉成立ね。』と入力して送信。

溜息をつく。

ノックの音。操、慌てて診療明細書を鞆に入れる。扉の前に移動。

操「もう着いたの？」

梶の声「ああ、俺だ」

操、扉を開く。梶がいる。梶、微笑む。

操「何してんの。早く入って」

梶「おお、悪いな」

梶と操、部屋の中に入る。

梶「あれ？ 他の人は？」

操「私しかいないけど」

梶「え？ 君が審査するの？」

操「は？」

梶「（小声）カメラどっかに隠してあるのか？」

と、部屋を見回す。

○同・905号室

少女、窓の外の落葉を見ている。

監督、手に小型カメラを持ちつつ貧乏ゆすり。

○同・906号室

操、ベッドに座る。梶、椅子に座って、

梶「久しぶりだな」

操「初めてじゃん会うの」

梶「お前、覚えてないかもしれないけど」

操「先にシャワー浴びてくるね」

梶「シャワーだと？」

操、制服を脱ぎ始める。

梶「シャワーって、汗かいたのか？」

操「一緒に入る？」

梶「もうお風呂一緒に入る歳じゃないだろ」

操「私先入るね」

梶「待てよアン」

操「アン？ 操だよ私。ラインしたじゃん」

梶「え？ 操なの。ごめん勘違いしてた」

操、浴室の方へ。

シャワーの音。梶、浴室の前に立つ。

梶「操、聞こえるか？」

操の声「何？ よく聞こえない」

梶「お母さん最近どうだ？ 元気か？」

操の声「え？ お母さんの知り合いなの？」

梶「お母さん一人でお前育てて大変だったろ」

操の声「うちお父さんいますけど」

梶「そうか。あいつ、男できたんだ」

操、浴室からバスローブ姿で出てくる。

操「おじさんもシャワー入んなよ」

梶「おじさんって、そんな呼び方あるかよ」

操「じゃあ何て呼べばいい？」

梶「……パパって呼んでくれるか」

操「じゃあパパ、シャワー浴びて」

梶「いいよ俺は。今汗かいてないし」

操「じゃ、先にホ別で4ちょうだい」

梶「ホ別で4？ 何のことだ？」

操「ホテル代と別に4万円。約束したじゃん」

梶「4万？ 今日来たのは金目的だったのか？」

操「当たり前じゃん。ただで会うわけないし」

梶「何に使う気だ？」

操「そんなのパパに関係ないし」

梶「軽蔑する。俺は軽蔑するよ、娘でも」

と財布を手に取り、お札を渡す演技をする。

実際にお札はつかんでいない。

梶「ほら、大切に使い」

操「え？ 何やってんの？」

梶「渡しただろ。4万」

操「冗談やめて。早くちょうだいよ」

と、梶の財布を奪い、お札を取る。

操「何だ。これしか持ってないんだ」

梶「ちょっと待て。お前本気で金取る気か？」

操「誘って来たのそっちでしょ」

操のスマホが振動。操、スマホを見る。

画面に『ホテル着いたよ』とある。

操「え？ どういうこと？」

梶、お札をそっと財布に戻す。

操「おじさん、一体誰？」

梶「何度も言ってるだろ。パパだよ」

操「私が約束してたの、別の人だったけど」

と、梶にラインのトーク画面を見せる。

梶「操、お前これ、援助交際やってるのか？」

操「サポートしてもらってんの。悪い？」

梶「この先な、50歳、60歳になっても忘れられない嫌な思い出になる。それでいいのか？」

操「説教する気？」

梶「操、お母さん呼ぼう」

操「は？」

梶、操のスマホを奪って、

梶「お母さんと三人で話し合おう。な？」

操「返してよ」

梶「もしもしお前か。ああ俺だ、久しぶりだな。操のことで相談したいことがあるんだ。今すぐ会えるか。そうか。ああ、来てくれ」

梶、操にスマホを返す。

梶「お母さん、すぐ来るって」

操「何？ パパってお母さんの知り合い？」

梶「知り合いなんかじゃないさ」

操、スマホの通話履歴を確認する。

操「あれ？ お母さんに電話してないじゃん」

梶「え？」

操「通話履歴ないよね。ふざけないでよ」

梶「お前な、それが演技ってもんだろ」

扉をノックする音。

操、入口に向かい、ゆっくり扉を開く。

操「ごめん、今ちょっと立て込んでて」

小津明（35）、強引に入って来る。

小津「何だ。もう一人いるんじゃない」

梶「お前か？ 操を買おうとしたのは」

小津「は？ 誰こいつ？」

操「わかんない。警察かも」

梶「この子の父親だよ」

操「え？」

小津「お父さんもどう？ 一緒に楽しんでく？」

梶「少なくともお前と楽しむつもりはないね」

小津「なんだと？」

梶「俺の娘を愛してないなら消えろ、屑が」

小津、梶にパンチ。梶、痛がる。

梶「本気で打つバカいるか。手加減しろよ」

小津「ふざけんなよ」

とパンチ。梶、側転して交わす。

小津のパンチは操に当たってしまう。

梶「大根役者が。俺も本気で行くぞ」

と小津を背負い投げし、羽交い絞め。

梶「警察呼ぼうか。それとも骨折ろうか？」

梶、小津を押さえつつ、周囲を見る。

梶「どこだカメラは？ こっちか？」

小津、隙を見て部屋から逃げ出す。

梶「操、怪我なかったか？」

操「ありがと。父親だなんて嘘までついて」

梶「嘘じゃない。パパな、本当にお前の……」

操「もう帰るね」

と、バスローブを脱いで着替え始める。

梶、慌てて背中を向ける。

梶「待てよ、もうすぐ母さん来るから」

操「電話してないんだから来るわけないでしょ。それに、お母さん入院してるし」

梶「え？ 入院？」

操「お父さん浮気しててほとんど家いないしさ。お母さんの分も私が稼がないと」

梶「操、それでこんなこと」

操「今日が最初だったんだ」

梶「え？」

操「もう辞めるね。今日で最後にする」

梶「ああ、わかった。パパと約束だぞ」

操「パパ、もういいよ」

梶、制服に着替えた操の方を振り返る。

梶「若い頃の母さんに似て来たな」

操「さっきから何それ？ パパってさ、お母さんの昔の恋人か何かなの？」

梶「あいつ、お前に何も言ってないのか」

操「じゃあねパパ」

と部屋を出る。

梶「ヒロインの父親は俺だな。ですよ監督？」

と周囲を見回す。窓の外で落葉が舞う。

○病院・操の母の病室（夜）

窓の外に枯れ木。雪が降っている。

操の母、ベッドに寝てテレビを視聴。

『アンとパパの殺人事件』1話開始。

操、パジャマの着替えを持って来る。

操「お母さん、着替えここおいとくね」

テレビ画面にホテルの映像。

チンピラ姿の梶、客室に倒れている。死体だ。

操「あ？ これパパだ。え？ 役者だったの？」

テレビでは少女とその父らしき男が梶の死体を発見。

梶の顔がアップになる。

操「お母さん、この死体役の人知ってる？」

操の母、首を振る。操、怪訝な顔。（了）

「STAP2号対ドロチ～北半球最後の戦い～」人物表

人 物

隼 出（はやぶさ いづる）（20）理科学特捜隊隊員

九条 燕（つばめ）（29）同隊長

隼 玄（げん）（48）出の父・博士

ドロチ（6550万）怪獣

自衛隊長

放送

「STAP2号対ドロチ～北半球最後の戦い～」本文

○太平洋（夜）

大嵐。響き渡る稲妻の音。

雷の落ちた場所が盛り上がる。

ドロチ（6550万）、雄叫びを上げつつ、海の中から現れる。

口から天に向けて青い炎を吐く。

○神戸ポートアイランド

神戸港内に浮かぶ人工の島。

理研の研究施設やビルが並んでいる。

ドロチ、ゆっくり歩いて来る。

サイレンの音。人々、逃げていく。

ドロチ、口から炎を吐く。街が燃える。

ドロチ、理研の建物をなぎ倒して絶叫。

○ノーチラス2号・外観

淡路島上空を飛ぶ空中戦艦である。

○同・中央作戦司令室

隼出（20）、九条燕（29）、ドロチが暴れる映像をスクリーンで見ている。

隼「ドロチめ、研究所を破壊しやがって」

燕「ドロチのDNA鑑定結果が出たわ、推定年齢6550万歳ですって」

出「ろ！ 6550万歳？」

燕「海の底に沈んでいた巨大恐竜が、汚染水に刺激されて復活したんだわ」

出「汚染水ってもしかして？」

燕「徳島第一原発から出たあの汚染水よ！」

出「に、西日本大震災で被災したあの原発の！」

燕「汚染水に含まれるストロンチウムを取り込んで、異常発達した状態で蘇生したのよ」

出「燕隊長、我々はどうすれば？」

燕「ドロチの進行方向をよく見なさい！」

スクリーンの画面が日本地図に変わる。

ドロチの進行方向に徳島第一原発。

燕「ドロチは徳島第一に向かっているわ」

出「そんな！ 何故ですか？」

燕「ドロチの体の中には高濃度のストロンチウムが何万トンと溜まっているわ。放射性物質に呼ばれているのでしょうね」

出「原発を破壊されたら日本は終わりだ！」

燕「日本だけじゃないわ。高濃度の放射能が北半球にばらまかれて、地球の北半分は生物の住めない世界になるでしょうね」

出「そ、そんなバカな。燕隊長、どうすれば！」

燕「出君、自分の頭で考えなさい！」

と出が立っている床に鞭を打つ。

出「米軍か国連軍の協力を仰げばいいかと」

燕「集中砲火してドロチを倒したら、あいつの体内の放射性物質がばらまかれるでしょ。北半球は守れても日本の国土が終わるのよ」

出「そんな。どん詰まりじゃないですか！」

燕「我々理科学特捜隊の力で倒すしかないわ」

出「研究所も破壊されたのに、どうすれば？」

燕「あるでしょう、日本製の最終兵器が！」

と出の顔を指さす。出、首をひねる。

○同・S T A P 2号特別実験室

出、液体の中に入っている。

燕、起動装置の前にいる。

壁には隼玄（48）の写真がある。

燕「出君、貴方のお父様、隼博士が開発したS T A P 2号を発動する日が遂に来たわね」

出「嫌です、僕は化け物になりたくない！」

燕「北半球の未来がかかっているのよ！」

出「僕を怪物にするつもりですか？」

燕「確かに細胞改変装置S T A P 2号はまだ実験段階だわ。けれど、細胞改変後も理性を保ちさえすれば、人間に戻れるわよ」

出「嫌だ！ 父さんは化け物になったまま、戻ってこなかったでしょ！」

燕「隼博士は細胞改変中に行方不明になっただけ。今はどこかで人間の姿に戻ってるかもしれないでしょ」

出「嘘だ！ 化け物のまま殺されたんだ！」

放送「ドロチ、徳島第一原発まで後10キロ」

燕「時間がないのよ、出君！」

出「嫌だ！ 俺を化け物にする気か」

燕「おだまり。S T A P 2号、細胞改変発動！」

燕、スイッチを押す。出の体に電流が走る。

出の細胞、急増殖して巨大化。

○淡路島上空

出、ノーチラス2号を破壊しつつ巨大化。雄叫びを上げて淡路島に着地。

燕、パラシュートで落下しつつ、

燕「出君、いえ、STAP2号、聞こえる？」

出、燕を発見。涎を垂らして舌を舐めずり、燕を食べたような様子。

燕「STAP2号、理性を失ったら、人間に戻れなくなるわよ。それでもいいの？」

出、グルルルルとうなる。

燕「さあ、徳島に向けてダッシュよ！」

出、雄叫びを上げ、全速力で疾走。

○徳島第一原発・周辺

瀬戸内海沿岸部。

地震と津波で破損した原子力発電所と使用済燃料棒の貯蔵プールがある。

自衛隊の戦車、整列している。

サイレンの音。海の中からドロチ出現。雄叫びを上げつつ、原発に近づく。

自衛隊長「撃て！ 原発から遠ざけろ！」

戦車、ドロチに発砲。

ドロチ雄叫びを上げて、炎を吐く。

戦車、燃え上がる。自衛隊長、重傷。

ドロチ、燃料棒の貯蔵プールに近づく。

自衛隊長「だめだ、燃料棒のプールから離せ。北半球が破滅するぞ！」

地平線の向こうから巨人となった出、陸上選手のごとく猛ダッシュで登場。

そのままジャンプしてドロチにドロップキック。ドロチ、吹っ飛ぶ。

自衛隊長「何だ、あの巨人は！」

燕の声「巨人じゃありませんことよ！」

自衛隊長、振り返ると高速戦闘機。

戦闘機から燕が顔を出す。

燕「行け、細胞改変生物兵器STAP2号！」

出、ドロチに馬乗りになり、空手チョップ連発。顔からよだれが垂れている。

燕「2号！ だめよ、理性を保ちなさい！」

出、連打の手を止めない。

燕「殺しては駄目。ドロチを海に帰しなさい」

出、連打の手を止める。

ドロチ、出の顔に炎を浴びせる。

苦しむ出。

隼の声「お前、誰かと思ったら出か」

出「その声は、まさか？」

隼の声「お前の親父だ」

ドロチ、尻尾を振って出を吹き飛ばす。

出「父さん、行方不明になったんじゃ」

隼の声「ドロチと細胞融合したのさ」

出「な、何だって？」

燕の戦闘機、出に近づく。

燕「出君何してるの？ こびっとやりなさい」

隼の声「あのバカには俺達の声は聞こえない」

出「父さん、何で原発にやって来たんだ？」

隼の声「日本は俺が救う。邪魔するな出」

ドロチ、原発の建物に向かう。

出「何言ってるんだ父さん。北半球を破滅させる気か？」

とドロチに高速ストレートパンチ。

ドロチ、貯蔵プールの側に倒れる。

隼の声「止めるなと言っている」

出「父さん何する気だ？」

隼の声「残留放射性物質を全て吸収して、太平洋の奥底に潜る。そして世界を救うのだ」

出「自分一人で英雄になるつもりか」

出とドロチ、取っ組み合う。

出「じゃあ何でポートアイランド破壊した？」

隼の声「.....時々、人の心を失う時がある」

出「そんな状態で、人類の未来決めるような仕事できるわけないだろ。父さん、何もわかっちゃいないんだ」

隼の声「わかっていないのはお前だ」

ドロチ、燃料棒を口に入れようとする。

出「何でも一人で勝手に決めんなよ」

とドロチの後頭部に延髄斬りキック。

ドロチ、吹っ飛んで転倒。

立ち上がったドロチ、様子が変わる。

背びれが青く光る。続いて口から大量の青い炎を放射。出、苦しむ。

ドロチ、雄叫びを上げて出に突撃。

出、吹っ飛ぶ。ドロチ、また雄叫び。

出「父さん、もしかして理性を失ったのか？」

出の胸の間から、赤く点滅するタイマーが出て来る。ピコンピコンと鳴る。

燕「STAP 2号の細胞改変力は後30秒しか持たないわ。30秒で決めんのよ！」

出、よれよれになりつつ立ち上がる。

ドロチ、原発の建物を破壊し始める。

燕「2号、何してるの？ さっき光った背びれを狙いなさい！ きっとあそこが弱点よ」

出「父さん、聞こえないのか。父さん」

出、雄叫びを上げてジャンプ。

空中で三回転後、ドロチにダイビング・アタック。

倒れたドロチの背中に乗り、背びれをもぎ取る。ドロチ、苦しむ。

出、嗚咽の声を上げつつ、背びれを一枚ずつもいでいく。

ドロチ、意識を失う。出の体、縮小する。

○太平洋海上（夕）

意識を失ったドロチ、ヘリで運ばれる。

○ヘリ内部・作戦指令室（夕）

燕と出がいる。出は包帯を巻いている。

燕「ドロチをここに沈める。うち方、用意！」

出「やめてくれ、ドロチは父さんなんだ！」

燕「何言ってるの。ドロチはだたの怪獣よ」

出「違う、ドロチは父さんなんだ、地球を救うためにやってきたんだ！」

ドロチをつなぐワイヤーが解除される。

燕「出君、少し疲れたんじゃない？ しばらく休みなさい」

窓の外のドロチ、太平洋に沈んでいく。

出「……父さん、わかったよ。怪獣なんていない。怪獣のような人間しかいないんだ」

出、沈むドロチを見つめる。（了）

「ライン上のゴースト」人物表

人 物

向(むかい) 直樹 (17) 東都高校二年生

米(よね) 慎一 (17) 白樺高校二年生

緒川 蛍(ほたる) (15) 故人

緒川 桜 (15) 蛍の妹・中学三年生

生徒 1

刑事

「ライン上のゴースト」本文

○東都高校・剣道部道場（夕）

向直樹（17）、剣道の練習をしている。

向「小手！」

と対戦相手に小手を決める。

○同・剣道部部室（夕）

向と剣道部の生徒達、着替えている。

向、スマホを手に取る。画面にラインのメッセージが表示されている。

蛍『今時間あるかな？ ちょっとお願いしたいことがあるんだけど』とある。

向「蛍？」

向、緒川蛍（15）のプロフィール写真を見る。中学の制服を着ている写真だ。

生徒1「どうした？」

向「中学ん時の同級生からライン来たんだけど、詐欺っぽいんだよ」

生徒1「ID乗っ取られたんじゃない？」

向、笑いながらスマホを鞆に入れる。

○向の家・外観（夜）

郊外の住宅地にある一軒家である。

○同・向の部屋（夜）

向、スマホでゲームをしていると、ラインのメッセージを受信。蛍からだ。

『向君、お願いしたいことがあるの』とある。

向、蛍の番号にラインから電話をかける。電話はつながらない。

向、蛍とのトーク画面を開く。『電話出れる？』と入力してメッセージ送信。

蛍からメッセージ。

『ごめん。電話出れない場所にいるんだ』とある。

向『お願いって何？』と送信。

蛍から『助けて欲しいの』と受信。

向「ID乗っ取られたなあいつ」

とスマホの電源を切る。明かりを消し、ベッドに入る。

カーテンの閉まった窓をノックする音。

向、ノックに気づくが、布団をかぶる。

またノックする音。次第に強まる。

向、おそるおそるカーテンを開ける。

ベランダに制服姿の蛍が立っている。

蛍の顔、溶けて骸骨に変わっていく。

向「うわ！」

と言って、カーテンをさっと戻す。

肩で息をする向。カーテンをほんの少しだけ開く。

ベランダに蛍の姿はない。

○東都商店街（夕）

向、剣道用具を持って歩いている。

向、スマホを取り出し電話をかける。

向「向だけど、米か。久しぶり。うん、あのさ、最近、蛍ってどう？ 知ってる？」

○白樺町・駅前（夕）

歩道に白樺が並んでいるリゾート地。

米慎一（17）、スマホを持って、

米「蛍なら中学卒業した後、行方不明だけど。え？ 知らなかったっけ？ ごめん、向、転校してからずっと連絡くれないから」

○東都商店街（夕）

向、歩みを止めて、

向「行方不明？ 本当に？ そうか。うん。うん。ああ。また連絡する。じゃあね」

向、ベンチに座る。スマホが振動。

ラインからの通知だ。『蛍さんが動画を送信しました』とある。

向「誰なんだよ、こいつ」

向、ラインの画面を開き、動画ファイルの再生ボタンをタップする。

○霧が立ち込める白樺の森

蛍の声「向君お願い。ここに来て」

霧の中から古いログハウスが現れる。

○商店街（夕）

向のスマホにはログハウスが出ている。

向「本物の蛍の声だ」

向『本当に蛍？』と送信。

蛍から『そう』と受信。

向『修学旅行楽しかったよね』と送信。

蛍から『向君転校したから一緒に行けなかったでしょ』と受信。

向、スマホをしまい、頭を抱える。

○新宿駅前・高速バス乗り場（夜）

向、白樺高原行きのバスに乗る。

○白樺町・国道沿いの歩道

向、リュックを持って歩いている。

米、自転車に乗って走って来る。

米「あれ、向？」

向「米」

米「やっぱ向じゃん。何？ 来たのこっち？」

米、自転車を停める。

向「蛍からライン来たんだ」

米「は？ 蛍から？ だって蛍は」

向「これ見て」

と蛍からの動画ファイルを再生する。

○白樺の森

向と米、霧のたち込める森を歩く。

米「でもさ、やっぱ誰かの悪戯じゃね？」

向「米も聞いただけ。蛍の声だよあれは」

米「蛍の番号なんてもう使われてないし」

向「携帯なくしてもラインのIDは残るよ」

米「じゃあ誰かが蛍のID使ってたよ」

霧の向こうに古いログハウスが見える。

向、スマホの画面にログハウスを表示。

向「あそこだ。ほら、同じログハウス」

米「ライン送って来た奴に襲われるかもよ」

向、足を止めて、スマホを握りしめる。

米「そういえば向、蛍と仲良かったよな。付き合ってたの？」

向「けんかばっかしてただろ」

米「俺もう帰るから」

向「ちょっとだけ、行ってみる」

と、米をおいてログハウスに向かう。

緒川桜（15）、木陰に身を隠して向を見ている。蛍とそっくりだ。

○ログハウス・一階

半分廃墟と化したログハウス。

奥に煙突つきの鉄製の暖炉。玄関の扉が開く。

向、クモの巣をかきわけ入って来る。

向、『着いたよ、ログハウス』とラインで蛍にメッセージ送信。

蛍から『暖炉見て』とメッセージ受信。

向、暖炉に向かう。

途中、鼠が走り回る音。

向、驚いて転ぶ。床には薪の束がある。

向、立ち上がり、暖炉にたどり着く。

暖炉の中には炭と灰が積もっている。

向、スマホの画面をライト代わりにして、暖炉の中を照らす。

向『見た』と蛍にラインで送信。

蛍から『ちゃんと見た？』と受信。

向、炭と灰を手でかきわける。

中から人の骨が出てくる。

米の声「見たのか？」

向、振り返ると入口に米がいる。

向「米。ここにあるのって、もしかして？」

米「（半笑い）蛍だよ、それ」

向「お前、まさか、蛍を？」

米、手に斧を構える。

米「蛍からライン来たとか変なこと言って、どうしてわかったんだよ、ここにいるって」

米、斧で向に襲いかかる。

向、薪をつかんで、

向「小手！」

と米の手に小手。米、斧を落とす。

向の手の薪も崩れ落ちる。米、涙目で、

米「信じてくれ。蛍を殺す気なんてなかった」

向「米、どうして？」

米「俺ずっと蛍のことが好きだった。卒業式の時コクったら、他に好きな奴がいるとか言い出して、蛍の奴断りやがって！」

向「それで燃やしたのか？ 蛍のこと」

米、向の首を締め上げる。

米「向、黙っててくれよ。蛍は行方不明なんだ。誰も俺がやったって知らないんだ。な？」

向、暴れて抵抗。暖炉の煙突、壊れて、米の上に落ちる。

向、米を押さえる。

○同・表（夜）

手錠をかけられた米、警察に連行される。

向、霧の向こうに桜の姿を発見。

向「蛍？」

桜、霧の彼方に走って行く。向、走る。

○白樺の森（夜）

向、走って来る。桜が立っている。

向「蛍待ってくれ。中学の時ちゃんと言えなかったけど、俺、蛍のこと好きだったんだ」

桜「違います。私、姉さんじゃありません」

向「え？」

桜「妹の桜です」

向「妹？ 蛍にそっくりだ」

桜「ライン送ってたの私です」

向「君はここに蛍の遺体があるって知って」

桜「危ない目に合わせてしまっただごめんなさい。でも本当にありがとうございました。お姉ちゃんも天国で喜んでると思います」

向「蛍……」

森の中、蛍の光が舞う。

○白樺町警察署・外観

○同・面会室

向、刑事と向き合っている。

刑事「彼は2年前の春に蛍さんを殺害したと証言しているが、一つ奇妙な事があってね」

向「奇妙な事？」

刑事「ラインというソフトで、蛍さんのIDの利用記録が、逮捕当日まであるんだよ」

向「誰かがID乗っ取ったんじゃないですか。最近ID乗っ取り流行ってるみたいですし」

向、微笑む。（了）

「失われた地図を集めて」人物表

人 物

曲 奏(まがり かなで) (32) 主婦

新 佑(しん たすく) (29) 失業者

曲 修一 (35) 奏の夫・バイオリン演奏家

男 1

主婦

「失われた地図を集めて」本文

○湾岸タワーマンション・外観（夕）

○同・曲家の食卓（夕）

東京湾岸の景色が広がる高層階。

高級オーディオから弦楽四重奏の演奏音。

曲奏（32）、子羊のローストを食べる。曲修一（35）、楽譜を読んでいる。

奏「修一さん、食べないの？」

曲「ごめん、いいよ」

奏「外で食べてきた？」

曲「演奏会の準備で忙しいんだ」

奏「ごめんなさい。片づけるね」

曲「そのままでもいい」

曲、料理を皿ごと床に落とす。

皿が割れ、ラム肉が床に散らばる。

曲「ほら、テーブルきれいになった」

奏、割れた皿を拾う。途中で指を切る。

○同・曲家の寝室（夜）

曲、バスローブ姿でバイオリンの練習。

風呂上りの奏、バスローブ姿で入室。

曲「どうしたの？ そんな恰好して」

奏「え？」

曲「この前買ってきてあげたでしょ」

奏「え？ あれ？ 本当に着るの？」

曲「早く着てよ。楽しみにしてたのに」

と、幼稚園の制服コスチュームを出す。

奏「嫌だよ、幼稚園なんて」

曲「早く着てよ」

奏「今日はやめよ」

曲、制服を奏に投げつける。

曲「何その態度？」

奏、幼稚園の制服を握りしめる。

○同・入口（夜）

バスローブ姿の奏、涙を拭きつつ走る。

○暗い小道（夜）

奏、バスローブ姿で早歩き。脇から男1の足が出る。

奏、転倒。

奏「痛」

男1「姉ちゃんどこの店？ いくらよ？」

奏「違います。そういうのじゃありません」

男1、奏の体に嫌らしい手つきで触る。

奏「やめてください」

新佑（29）、現れ、男1の腕をつかむ。

新「嫌がってるでしょう。やめなさい」

新、男1の腕をひねる。痛がる男1。

男1、その場を走り去る。

奏「ありがとうございました」

新「手当しましょう、脚出して」

奏「え？」

新、鞆から救急道具を取り出す。

新「僕医者やってましてね。ちょっと失礼」

新、奏の脚の擦り傷に応急手当をする。

新「よし終わりと。あ、ここにも」

と奏の腕を手取る。腕には痣がある。

奏、さっと腕を引っ込める。

新「どうしたんですか？ 腕の痣」

奏「色々ありがとうございました」

新「お家まで送りましょう」

奏「結構です。一人で帰れますから」

新「その恰好じゃ危ないですよ」

奏、バスローブの胸元を正す。

新「さあ、乗って」

奏「え？」

新、しゃがみこみ、奏に背中を向ける。

○湾岸タワーマンション・入口（夜）

新、奏を背負って歩いて来る。

奏「もう下ろして下さい。着きました」

新「え？ 奏さんちここなの？ すごいな」

奏「全然ですよ、本当に全然」

新、奏を下ろすとメモ帳を取り出し、地図を描く。

奏、手書きの地図を見て、

奏「きれい。わかりやすい地図ですね」

新「ちょっと遠いですけど、ここ僕の家です」

と、地図に『新クリニック』と書く。

新「調子悪くなったらぜひお越し下さい」

と地図を渡し歩き出す。奏、手を振る。

曲の声「誰？ あの人」

奏、はっとして振り返ると後ろに曲。

曲「心配して待ってたのに男と会ってたんだ」

奏「違うの。あの人はずだ」

曲、奏の手から手書きの地図を奪う。

曲「今時手書きって、何だよあいつ」

と、地図をびりびり破り捨てる。

曲「さ、おうち帰って反省会しよ」

奏、散り行く地図の破片を見つめる。

○同・曲家・リビング（夜）

無人の暗い室内にハープの独奏曲がかかっている。

寝室のドアからかすかな光。

寝室から奏の悲鳴。

叩く音。壊れる物音。

奏の手がドアから伸びるが引き戻される。ドア、バタンとしまる。

○同・入口（朝）

奏、ゴミ袋を持ってゴミ捨て場へ。

地面に地図の破片が散らばっている。

奏、地図の破片を一枚一枚拾い集める。

○同・曲家・リビング

奏、テープで修復した地図を見つめる。

奏「何夢見てんだろ私」

と地図をごみ箱に捨てる。溜息。

○新のアパート・付近の住宅街

奏、テープでつなげた手書きの地図を見つつ、歩いて来る。

周囲を見回す奏。主婦に声をかける。

奏「この辺に新クリニックってありません？」

主婦「お医者様はこの辺ございませんことよ」

奏、古いアパートを見つめる。

○商店街（夕）

疲れた顔の奏、買い物かごを持って歩く。新が歩いて来る。

奏「新さん」

新「奏さんじゃないですか」

奏、テープでつなげた地図を見せる。

新「え？ 本当に行かれたんですか？」

奏「嘘つき」

新「その地図、一度破りました？」

奏、慌てて地図を隠す。

○喫茶店・店内（夕）

奏、紅茶にマドレードを浸して食べる。

向かいの席の新、頭を下げて、

新「ごめんなさい、つかっこつけちゃって」

奏「クリニックとか言って、ぼろアパート」

新「医者って言うのは嘘で、本当は薬品工場で働いてるんです」

奏「薬品工場でどんな仕事してるの？」

新「肉体労働ですよ。薬の原液かき混ぜたり。音楽家の奥様とは無縁の世界ですね」

奏「才能のない音楽家よ。神経質だし」

新、奏の首筋にある痣を見つめて、

新「そこ、昨夜は怪我してなかったんじゃ」

奏「え？ どこ？」

新「ほら、ここ」

と奏の首筋に手を伸ばす。

曲の声「あれ？ 奏？」

奏、はっとして振り返ると曲がいる。

奏「修一さん、今日は遅くなるんじゃ」

曲「予定が変わってね。こちらは？」

奏「新さん。お医者様の」

曲「ああ、昨日言った人ね。昨日は妻がお世話になりました、助けて頂いたようで」

新「旦那さん、奏さんの怪我、ご存じですか」

曲「奏、一緒に帰ろっか？」

奏「そ、そうだね」

と席を立つ。眩暈でくらくらする。

奏「ごめんなさい。ちょっと疲れたみたい」

新「奏さん、大丈夫ですか？」

曲「奏、早く帰っておうちで休も。な？」

と奏の手を引いて出口に向かう。

○湾岸タワーマンション・曲家の食卓（夜）

ヴァイオリンソナタが流れている。

奏、曲のグラスに赤ワインを注ぐ。

曲、鴨肉の丸焼きにフォークを突き刺す。

曲「会いに行ったの？ あの貧乏臭い男に」

奏「買い物してたら偶然会っただけ」

曲「嘘つきは嫌いだよ僕。知ってるでしょ」

奏「本当に、偶然会っただけだから」

曲、鴨肉を皿ごと床に放り投げる。

奏、割れた皿を拾い、床を手早く掃除。

曲「掃除、うまくなったよね」

曲、ワインボトルをさかさにする。

床に赤ワインがどくどくとかぼれる。

曲「また汚れた」

奏、床を拭く手を止める。

奏「食事を粗末にするなって教わらなかった？」

曲「お説教？ 何様のつもりだよ」

奏、雑巾を曲の顔に投げつける。曲は動じない。

奏、鞆と上着を手取る。

曲「あいつのどこ行くのか？」

奏「ちょっと外出るだけ。気持ち悪くなっちゃったの。変態のせいで」

曲、ワインボトルをオーディオ機器に投げつける。

ボトルは割れ、音楽が止まる。奏、手書きの地図を鞆に入れる。

曲、背後から奏の体に抱きつく。

奏「離して、もう離してよ！」

と絶叫し、曲を振り払う。

転んだ曲の頭にワインボトルの破片が刺さる。

奏、口に手を当て悲鳴を抑える。

○新のアパート・表（夜）

新、コンビニの袋を持って歩いて来る。

アパートの前に奏が立っている。

新「奏さん」

奏「よかった、会えて」

と新に抱きつく。

新「また旦那さんにやられたの？」

奏「違うの、やったの、やっちゃったの」

奏、新の胸に顔をうずめる。（了）

「BLACK BENGO」キャラクター表

響遍吾（ひびきべんご）（37）は、勝率99%を誇る敏腕弁護士。高知県出身。遍吾という名は同じく弁護士だった父につけられた。

どんな依頼でも冷徹な論理を駆使して勝利に持ち込む。唯一裁判で負けた検事の新田冴（37）と結婚したが、多額の慰謝料を払って離婚。泥沼となった離婚裁判の末に、娘の愛珂（6）の親権を勝ち取った。現在は溺愛している愛珂と二人で虎の門ヒルズ内のマンションに暮らしている。

特技は弁論術、策謀。ソクラテスが否定した古代ギリシアの弁論術を愛読している。他の愛読書はマキャベリの『君主論』、孫子の『兵法』、クラウゼヴィッツの『戦争論』、「目には目を、歯には歯を」の『ハンムラビ法典』等。

勝つためには嘘をつくことも厭わない性格の為、敵を作ることが多いが、復讐するのも得意である。護身術としてムエタイを習っている。ピンチの時は、百発百中の弁護士バッチを敵の急所めがけて投げつける。

「BLACK BENGO」人物表

人 物

響 遍吾（ひびきべんご）弁護士

新田 冴（37）検事・響の妻

泉 貢（44）被告

城 莞爾（じょう かんじ）（27）誘拐犯

響 愛珂（あいか）（6）響の娘

裁判長

「BLACK BENGO」本文

○遊園地・中

響遍吾（37）、響愛珂（6）と手をつないで歩いている。

愛珂「お父さんトイレ」

響「愛珂、一人でいけるか？」

愛珂「あのさ、何歳だと思ってんの？」

響「そっか。ここで待ってるから」

とベンチに座る。愛珂はトイレへ。

○同・女子トイレ

愛珂、入って来る。

城莞爾（27）、愛珂の背後に現れ、愛珂の唇を塞ぐ。

○同・ベンチ

響、ベンチにいる。スマホに着信。

響「もしもし」

城の声「愛珂ちゃんかわいい脚してるね」

響「誰だ？」

城の声「愛珂ちゃん返してほしい？ 響先生」

響「俺が弁護士だと知ってるのか？」

城の声「お願いがあるんだ。泉貢って知ってる？ 彼を弁護してさ、無罪釈放にしてよ」

響「泉貢？ 裁判は確か一週間後じゃないか？」

城の声「そう。一週間で釈放してよ。できなきゃ愛珂ちゃん、殺るよ」

響「バカ言え。あんな殺人犯無罪にできるか」

スマホから愛珂の泣き声。

響「愛珂、そこにいるのか？ 愛珂」

城の声「検事や他の人に言ったら即ゲームオーバーだよ。先生は監視されてんだから」

電話が切れる。

○東京拘置所・外観

○同・面会室

響、資料を見ている。

ガラスの向こう、ドアが開き泉貢（42）が入って来る。

響「貴方の担当になった弁護士の響です」

泉「帰れや。どうせあんたも役立たずだが」

響「私の経歴を知らないようだな。一審の死刑判決を覆して無罪釈放にしてみせるよ」

泉「死刑なんてクソだ。自首したんだぞ俺は」

響「財務省事務次官の娘と妻を殺しといて、よくそんなことが言えるな」

泉「こんなはずじゃなかった。約束と違うべ」

響「約束？ とにかく、お前が本当に人殺しかどうかはどうでもいい。私に任せろ」

泉「あんた、誰かに金もらってんのか？」

響「金のためなんかじゃない。だが必ず勝つ」

○高等裁判所・入口前

響が歩いている。新田冴（37）が来る。

冴「ちょっと遍吾」

響「久しぶり。冴がこの事件の検事だとはな」

冴「辞めなさいよ、こんな事件の弁護」

響のスマホが振動。響、物陰に進む。

冴「愛珂は元気？ ちゃんにご飯食べてる？」

響「お前はもう親権失ってる。関係ないだろ」

冴、建物内に入る。響、スマホに出る。

城の声「今日の法廷、勝てるのかなあ？」

響「愛珂は無事か？」

城の声「今日負けたらなぶり殺しちゃうから」

電話が切れる。

○同・刑事法廷

被告席に響と泉。原告席に冴。壇上に裁判長。

傍聴席には城が笑顔でいる。

響「被告人は財務省事務次官の桂雅彦さん宅に宅配業者を装い侵入。出迎えた桂南ちゃん7歳を包丁で刺殺したと証言しています」

泉「ああ。何回もめった刺しにしたわ」

響「その後、台所に侵入し、南ちゃんの母親、桂美香さん40歳も包丁で刺殺しました」

冴「残酷極まりない。憎むべき殺人行為です」

響「外出中だった桂さんは心的外傷を負い財務省を退官、現在療養中です。被告人は、桂さんが官僚とは知らなかったそうですね？」

泉「知らねえよ。もう何度も言ってんだろ」

響「侵入の目的は南ちゃんの誘拐。激しい抵抗にあい、母親まで呼ぼうとしたから二人一緒に殺した。この証言は事実ですか？」

泉「認めてやる。事実だよ」

響「OK。もう嘘つかなくてもいいですよ」

泉「何だと？」

響「彼が嘘つきだという証拠を見せましょう」

と熟女、人妻AVのDVDを並べる。

響「これは被告人の自宅から押収したDVDです。熟女と人妻ものしかありません。被告人に少女趣味があるとは到底思えません」

冴「異議あり。証拠不十分です」

響「熟女の人妻好きなら、むしろ母親の美香さん狙いで家宅侵入したと言うはずだ。貴方は誰かをかばう為、嘘をついていますね」

泉「実行犯は俺だよ。弁護士先生、あんたは減刑だけしてくれればいいんだよ」

響「そうですか。では失礼して」

と泉にムエタイキック。

泉、左手で防御。

裁判長「辩护人、何ですか今のは？」

響「被告人は先程左手で防御しました。鑑定の結果、実行犯は右利きと出ていますね」

冴「泉被告は凶器の包丁を持って麻布署に出頭したはずですよ。彼が実行犯でないとすれば、包丁はどこから入手したって言うの？」

響「もらい受けたんだろう、真犯人から」

冴「戯言よ。じゃあ真犯人はどこにいるのよ？」

響「この事件は計画的知能犯による犯行だよ」

泉、被告席から立ち上がる。

泉「おい裁判長。こいつ弁護士から外せ。こいつ、無理矢理俺を助けようとしてる」

裁判長「被告人の主張を認めます」

響「裁判長待って下さい。真犯人は私です」

冴・泉「は？」

響「私が二人を殺害したんです。泉被告は、真犯人の私をかばう為自首した替え玉です！」

傍聴席ざわつく。城、笑っている。

○東京拘留所・面会室

冴、資料を見ている。ガラスの向こう、ドアが開き、響が入って来る。

冴「何なのもう。あることないこと証言して」

響「冴、頼みがある。愛珂と3人で最後に行った遊園地があるだろ。そこに行ってくれ」

冴「え？ 何で？」

響「よく聴け。冴にしか頼めない話がある」

冴、ガラスに耳を寄せる。響、囁く。

○遊園地・中

ゴミ捨て場に大きな段ボール箱がある。

冴、箱を開ける。中に死体の如き愛珂。

冴「愛珂！ お母さんだよ！ 大丈夫？」

と愛珂を抱きしめる。愛珂は無反応だ。

○高等裁判所・刑事法廷

被告席に響。原告席に冴。檀上に裁判長。

傍聴席には笑顔の城がいる。

響、縄をつけられたまま証言台に立つ。

冴「響被告に質問します。犯行の動機は？」

響「裁判長、私は真犯人ではありません」

裁判長「え？ 法廷で偽証したのですか？」

響「泉さんを弁護して無罪釈放するようある人物に脅迫されました。やむを得ず真犯人だと偽った事、正義の女神にお詫びします」

裁判長「脅迫？ 一体どういうことですか？」

響「昨夜、仮釈放された泉はビルから転落死したそうです。この事件には深い闇がある」
ざわつく傍聴席。

響「皆様ご安心を。真犯人の証拠があります」

冴が合図、ステレオセットが運ばれる。

響「南ちゃん殺害前、宅配業者を装って玄関に現れた真犯人の声が、警備会社の防犯カメラに記録されていました。これです」

城の声「こんばんわー。宅配便で一す」

響「何故か映像は消去されていましたが、警備会社のサーバーに音声が残っていました。続いてこちらの音声をお聞きください」

城の声「今日負けたらなぶり殺しちゃうから」

響「今のは私が脅迫された時の電話の声です」

冴「鑑定の結果、2つの音声は同一人物の声だと判定されました」

響「そして泉貢の声紋とは違う若い男の声だ」

傍聴席ざわつく。

響「愛珂、出ておいで」

愛珂、法廷に入って来る。

響「人質として誘拐された私の娘です。愛珂、この中にいるんだよな、誘拐犯が」

愛珂、頷いて傍聴席をゆっくり見回す。

愛珂「あのお兄さん」

と、震えながら城を指さす。

冴「ありがとう。恐かったね」

城、拍手しつつ立つ。響、弁護士バッチを投げる。

城、右手でバッチを払う。

響「右利き、実行犯の鑑定結果と同じだな」

城「二人を殺した後、犯人は包丁を持って家中を徘徊した」

響「桂事務次官を探し回ったんだろお前」

城「南ちゃんにプレゼント買うからって、聞いてた予定より帰宅が遅れたんだよね」

響「桂さんは、復興予算の政治家横流し問題で国会に証人喚問されていた。口封じか？」

城「事件が起きて証人喚問は中止になっちゃったよね。極秘プロジェクト成功ってわけ」

響「替え玉を立てて身を隠したお前が、何故泉貢を釈放しろなんて俺に頼んだ？」

城「響先生なら闇を全部暴いてくれると思ったからさ。駒になって動くの嫌だったんだ」

響「釈放後の泉を殺しといて、よく言うよ」

城「あいつ消されたんだよ。僕達はね、明るい場所に出ることを最も嫌うんだ」

響「お前、名前何だ？」

城「名前？ 今の名前は城莞爾だったかな」

響「裁判長、城莞爾を殺人罪及び誘拐罪で起訴します」

○同・廊下

城、役人に手錠をつながれ歩いている。

役人、拳銃を取り出し、城の背中に向ける。

響、物陰から現れ、拳銃を掴む。

響「何してる？ こいつを裁く場所は法廷だ」

響、役人を睨む。役人、拳銃をしまう。（了）

「君が生きるために大切なことはいつも伝えられなかった」キャラクター表

相原勇孝（ゆたか）（25）は、東京男子医科大学病院の研修医。出身は兵庫県姫路市。実家は小さな開業医である。一年浪人後、滑り止めで受験した東京男子医科大学に合格。卒業後、同大学病院の研修医となる。

東京男子医科大学は十五年前から共学になったが、OBの意向により、名称を東京男子医科大学のままとしている。都内の私立医大としてはCクラス。同大学病院は過去に医療ミスで訴訟沙汰の事件を起こしているが、今でも古い慣習、権威主義、縦割り組織の弊害が残っている。

正義感が強く、間違っただけに対しては間違っているとはっきり言う性格の相原は、研修期間中、各科の指導医と対立してきた。

患者が納得するまで説明する姿勢は、患者に評判がよい。腕も決して悪くないが、知識不足と連日の激務が原因で時折ミスを犯す。好きでもないのに眠気覚ましに1日3本以上コーヒーを飲む習慣を持つ。

「君が生きるために大切なことはいつも伝えられなかった」人物表

人 物

相原 勇孝（ゆたか）（25）研修医

森田 護（まもる）（40）指導医

水谷 光（ひかり）（29）薬剤師

小出 翔（しょう）（2）患者

小出 律（32）翔の母

○東京男子医大病院・ICU

水谷光（29）、患者にチューブで投与されている薬剤を交換している。

相原勇孝（25）、森田護（39）に連れられ、ICUに入って来る。

森田「光ちゃん紹介するよ、今日からICU配属になった研修医の」

相原「相原です。よろしくお願いします」

光「水谷です。邪魔だけはしないで下さいね」

森田「光ちゃん薬剤師だから。相原先生には、ああ、あの子担当してもらおうかな」

奥に透明のケースで覆われ、無数の医療機器が繋がれた小児用ベッド。

小出翔（2）、目をつむり人工呼吸。

森田「小出翔君だ。ICU入りは確か昨日だったか。あれ？ カルテないな、どこだ？」

相原「森田先生、僕小児科の経験ないですが」

森田「大丈夫だよ。首の腫瘍取る手術成功して、術後の回復待ちだって聞いているから」

相原「でもICUに来ているお子さんでしょ。僕なんかに任せて大丈夫なんですか？」

森田「相原先生、君は医師法上立派な医師だ。自信持てよ。人手も足りないんだから」

相原「こういう時だけ立派な医師扱いですか」

森田「この子は、ああバクファミル投与中ね」

相原「バクファミル？ 人工呼吸中の幼児への使用は、禁忌指定の麻酔薬ですよ」

森田「長期の場合だけだよ。翔君はすぐここ出るし。杓子定規に考えなくていいから」

光「森田先生、製薬会社の営業来てますけど」

森田「じゃ相原先生、後はよろしく頼むよ」

と入口に向かう。

○同・医局（夜）

相原、席に座り、うたた寝。机の上には缶コーヒー多数。

光が来て肩を叩く。

光「先輩に見つかったら大変ですよ相原先生」

相原「あ、ありがとうございます」

光「先生達はみんなお気に入りのナース乗せて、外車で帰っちゃったけどね」

相原「水谷さん、翔君のことなんですけど」

光「ああ、あの子」

相原「バクファミル投与されてますけど」

光「辞めた方がいいでしょうね」

相原「え？」

光「まともな病院なら子供には投与しないわ」

相原「そう思ってるなら、何で辞めさせないんですか？」

光「私も何度も言った。他に治療法がないだの、実際は安全だの、色々おっしゃられて」

相原「薬剤師には医師から独立した薬剤の選択権が認められてましたよね？」

光「教科書の話でしょ。ここは病院よ。医師と薬剤師の間には超えられない壁があるの」

相原「そんな習慣、変えてきましょうよ」

光「頼もしい研修医さん。でもあんまり目立ち過ぎない方がいいわよ、研修期間中はね」
と言って立ち去る。

○同・ICU

相原、透明のビニールバッグに入った翔の尿を見つめている。

森田が来る。

森田「宿直明けか？ 元気だね相原先生」

相原「翔君の尿の色、おかしくないですか？」

森田「あれ？ この子まだICU出ないのか？」

相原「え？ いつ出るか知らないんですか？」

森田「私もICUの当番回ってきたの昨日だから。カルテどこだ？」

相原「ベッドの下に落ちてましたよ」

と翔のカルテを森田に差し出す。

相原「ICUに来て今日で4日目みたいです」

森田「4日目か……くそ、もうそんなに」

相原「バクファミルの投与は辞めましょう。心拍数も低下してます」

森田「いや待て。今ここで辞めたら容体が急変するリスクがある。投与は続けよう」

相原「昨日だけで96ミリも投与してますよ」

森田「総投与量は何ミリだ？」

相原「それがカルテに書いてないんですよ。翔君の主治医はどこですか？」

森田「耳鼻科の先生だ。今日は確か学会で、院長と一緒に京都行ってるな」

相原「そんな。森田先生、どう対処すれば？」

森田「とりあえず経過観察して。耳鼻科に連絡取ってみるから」

と外に出る。相原、目を瞑り人工呼吸している翔を見る。

光が入って来る。

相原「水谷さん！ 翔君の心拍数が」

光「心電図見せて。ちょっと、やばいよ」

相原「え？」

光「バクファミルを投与した子はみんな同じ。心拍数が乱れた後、極度に低下してくの」

相原「水谷さん、どうすれば？」

光「血管作動薬の投与。輸血も急いで。後は翔君の回復力に賭けるしか……」

相原「翔君、頑張れよ」

心電図上下に激しく振れた後、水平線。

相原「え？ これって？」

光「心肺停止9時33分。カルテに記録して」

相原、カルテを床に落とす。

○T『君が生きるために大切なことはいつも 伝えられなかった』

○東京男子医大病院・ICU前の廊下（夜）

相原と森田が立っている。

森田「いいか、絶対に謝罪するな。謝った瞬間に私達の責任になるぞ」

相原「そんな」

森田「研修医はだまって。ほら来た」

小出律（32）がやって来る。

森田「翔君、急性の循環器不全でした」

律「どういうことなんですか？ 手術は成功したって伺いましたけど」

森田「何らかの合併症が起こったかと」

律「手術担当された先生はどちらですか？」

森田「生憎、別の患者様の手術がありまして」

律「やっと腫瘍が治ったって安心してたのに」

相原「翔君にバクファミルという薬を投与していたこと、御存じでしたか？」

律「いえ、初めて伺いましたけど」

森田「相原君」

と、相原の背中を引っ張る。

相原「バクファミルの使用で、病状が悪化したり、副作用が起こりやすくなるんです」

律「副作用があるような薬、私に説明なく使うなんて、どういうことですか？」

森田「お母様、この件については経緯を詳細に調べた上で、説明の機会を設けますので」

森田、相原の足を靴で踏む。

○同・小会議室（夜）

森田と相原、にらみ合っている。

森田「お子さん亡くされた直後なんだから、相手を動揺させるようなことしゃべるなよ」

相原「事実を伝えなきゃいけないでしょう、事実を。隠すつもりですか？」

森田「隠す？ 何をだよ？」

相原「バクファミルですよ。副作用」

森田「因果関係なんてそんな簡単に証明できないんだよ。断言は慎め」

相原「お母さんにも薬の説明なしって、どういうことですか？」

森田「私だって誰か説明してると思ってたさ。とにかく君はこれ以上この問題に関わるな」

相原「納得できません」

森田「ICUに来る子供なんて半分死んでるようなもんだ。バクファミルなしでも死亡確率は50%以上あるんだぞ」

相原、森田を見つめる。

森田「副作用を認める認めないは研修医が口突っ込む問題じゃない。病院経営の問題だ」

相原「僕は経営なんてわかりませんが、翔君のお母さんが困っていることはわかります」

森田「副作用なら君の過失になるんだぞ」

相原「え？ 僕の責任ですか？」

森田「当たり前だろ。担当医は君なんだから。何でバクファミルの投与やめなかった？」

相原「それは……」

森田「カルテの整理でもしてなさい」

と言って去る。

○同・廊下（夜）

相原、ベンチに座りうなだれている。

光、缶コーヒーを差し出す。

光「もしかして初めて？ 自分の担当した患者さんが亡くなるのは？ ……辛いよね」

相原「僕が、助かるはずの命をあやめてしまったんでしょうか？」

光「聞いたよ。翔君のお母さんに伝えたんだってね、バクファミルのこと」

相原「すみません。投与が公になったら、水谷さんも責任問題になるかもしれないのに」

光「人殺しの薬剤師はクビになっても、病院様はしぶとく生き残るんでしょ」

相原「僕は、薬剤師さんとかスタッフのみんなが病気になったら、入院したいって思える病院で働きたかった。でもここは……」

光「こんな病院でも遺族が本気で動いたら、変わっていくかもね」

相原「家族はいつか遺族になるんですね」

光「お母さん、さっきまだロビーにいたよ。伝えるなら今だよ。相原先生」

相原、立ち上がり、走り出す。

○同・病院付近の歩道（夜）

歩く律。猛ダッシュで相原が追いつく。

相原「待ってください」

律「あなたは」

相原「お力になれず本当にすみませんでした」

と深くお辞儀をする。

律「翔の顔見ましたよ。眠ってるみたいで、まだ信じられません、亡くなったなんて」

相原「これカルテ開示申請書です。他にも知りたいことがあったらおっしゃって下さい」

と、律に開示申請書を差し出す。

律「何があったのか本当のこと教えて欲しいんです、2歳で亡くなった翔の為にも。先生のごとは、信じてもいいんですよね？」

相原、律の目を真っ直ぐ見て頷く。（了）

「ワケあり先生とハダカの王子様」キャラクター表

桜木超（さくらぎこゆる）（35）は私立応徳学院大学付属中学校2年2組産休代替教員。専攻は理科。

都内国立大学の教育学部卒業後、中学校教諭免許状取得。都内の私立中学で教諭になる。出世コースを歩んでいたが、28歳の時、初担任になったクラスで、いじめ、モンスターペアレント、学級崩壊の三重苦に見舞われる。うつ病を発症して休職。復帰後は非常勤講師として都内各地の中学校を渡り歩いている。

非常勤講師となった後は、保護者、生徒、先輩教師のご機嫌取りを辞めた。クレームを恐れず、子供達の将来のために直言する桜木の姿勢は、時に反発を呼び、何度も保護者や学校と対立した。桜木のことを慕う生徒もいるが、多くの場合、桜木の発言と行動は問題になり、半年に一度の契約更新前に契約切れになっている。

教師間でのあだ名は訳あり先生。生徒には超さん、桜木町などと呼ばれる。趣味は化学実験、理科の実験器具でコーヒーを作ること。

「ワケあり先生とハダカの王子様」人物表

人 物

桜木 超（さくらぎこゆる）（35）私立応徳学院大学附属中学校・2年2組産休代替教員

冷泉穂高（れいぜいほだか）（14）同・2年2組生徒

成瀬薫子（42）同・教務主任・英語教師

早川 凜（14）同・2年2組生徒

男子A

男子B

「ワケあり先生とハダカの王子様」本文

○浜松町・駅前（朝）

桜木超（35）、学生達に混じって歩く。

○応徳学院大学付属中学校・外観（朝）

美術館のような現代建築の校舎。

○同・2年2組教室（朝）

早川凜（14）他生徒達はしゃいでいる。

桜木と成瀬薫子（42）、教室に入る。

薫子「ビー・クワイエット！」

生徒達、教壇の桜木を見つめる。

薫子「三上先生が産休の間、このクラスの担任になります、桜木先生です」

桜木、黒板に桜木超と書く。

桜木「桜木こゆるって読むからな。よろしく」

男子A「桜木町」

凜他生徒達、笑う。

男子B「ここは浜松町だよ。横浜帰ったら？」

桜木、ほくそ笑む。

○同・校門（朝）

高級リムジンが到着する。

冷泉穂高（14）、車から降りてくる。

清掃中の用務員、冷泉におじぎする。

○同・2年2組教室（朝）

桜木、黒板に元素記号を書いている。

凜、机の下に隠してスマホを操作。

冷泉、後ろのドアから入って来る。

桜木「君は、冷泉君かな？」

冷泉、返事をせず席に座る。

桜木「遅刻だろ。挨拶は？」

冷泉「おっさん誰？」

男子A「桜木町」

桜木「三上先生が産休の間、担任の桜木超だ」

冷泉「三上のおばさん、もう帰って来ないと思うけど」

桜木「あ？」

冷泉「少なくともこのクラスにはね」

冷泉、英語の教科書と辞書を広げる。

桜木「おい。今は理科の授業中だぞ」

冷泉「知ってるよ。好きにやんなよ」

桜木「お前何か間違えてないか？」

冷泉、英語の辞書をめくる。

桜木「誰にも愛されて来なかったようだな」

と、冷泉の教科書を取り上げる。

○同・図書館

凜、本棚の奥に座り込み、スマホを操作。

画面には薫子と中年の男が夜の街を歩く写真が写っている。

桜木、影から現れスマホを取り上げる。

桜木「スマホ利用禁止だったよな、ここ」

凜「返してよ」

桜木「お、これ成瀬先生じゃないか。盗撮か？」

凜「薫子様のお相手誰だと思う？ 冷泉君のお父さんだよ」

桜木「は？ 何でまた？」

凜「桜木町まだ知らないんだ。冷泉君のお父さん、応徳学院の理事長なんですけど」

桜木「親子そろって不良だな、これじゃ」

と、スマホをポケットにしまう。

凜「ちょっと、返してよ」

桜木「静かに。ホームルームの後、返すから」

冷泉、二人の様子を遠くから見ている。

○同・職員室（夕）

桜木、自席で事務作業をしている。

薫子がやってくる。

薫子「桜木先生、冷泉君の英語の辞書、取り上げたでしょう？」

桜木「何で知ってんですか？」

薫子「お母様から苦情の電話が来たそうよ」

桜木「理科の授業中に英語の勉強しようとしたんだ。取り上げて当然でしょう」

薫子「あなたね、産休穴埋めの非常勤講師なんだから、問題起こさないでください」

桜木「薫子様はあいつの味方する気ですか？」

凜が走って来る。

凜「桜木町！」

桜木「どうした？」

凜「冷泉君がやばい。とにかく来てよ」

桜木、立ち上がる。

○同・グラウンド（夕）

冷泉、倒れている。頭に血。生徒達、冷泉を囲んでいる。

桜木と凜が来る。

桜木、冷泉を抱き上げ、ハンカチで冷泉の血を拭う。

桜木「大丈夫か？ 保健室の先生は？」

冷泉「いいよ。うちで医者に診てもらおうから」

桜木「何があった？」

冷泉「いじめられた」

桜木「何？ 誰にやられた？」

冷泉「わかんないけど誰かに突き飛ばされた」

桜木「誰がやった？ 見た奴いるか？」

生徒達、おそろおそろその場を離れる。

○同・会議室（夜）

桜木と薫子、広い会議室に2人である。

薫子「放課後遊んでいたら、誰かに押されて頭を打ったと。そうですね？ 桜木先生」

桜木「さあ。どうでしょうか」

薫子「冷泉君はそう言ってたんでしょう？」

桜木「見た人誰もいませんからね」

薫子「嘘ついてるって言うの？ 何のため？」

桜木「教師を困らせたいんじゃないですか」

薫子「推測でものを言うのは辞めなさい。いじめがあったら桜木先生の責任ですからね」

桜木「僕は今日赴任したばかりですよ」

薫子「図書館で女子生徒といちゃついていたって、匿名の報告もありましたけど」

桜木「え？ いちゃついていた？」

薫子「ワケあり先生って噂、本当だったみたいね。なんで理事長はあなたみたいな人、雇ったのかしら？ ソー・クレイジー」

桜木「今度会ったら聞いてみたらどうですか？」

薫子「とにかく犯人を捜しなさい」

○同・理科準備室

桜木、アルコールランプでピーカーを温め、凜にコーヒーを出す。

桜木「誰もやってないんだよな？」

凜「さあね。先生みんなあいつの言いなりだから。みんなも面倒だから近づかないし」

桜木、顕微鏡にデジカメを接続する。

凜「もうさ、あいつ怒らせない方がいいよ。三上先生みたいになっちゃうよ」

桜木「三上先生、産休じゃなかったっけ？」

柿野「冷泉君の担任なんてさ、小学校の時から何人も替えられてるんだから」

桜木「最高だな。だがこっちも準備万端だ」

と、顕微鏡のレンズにカメラを当てる。

○同・室内プール

冷泉、一人壁際に座り、英語の勉強中。

桜木、入って来る。

桜木「そんなに英語好きか？ それとも薫子様の英語の授業なんて受けたくないか」

冷泉「チクってもいいよ。問題ならないから」

桜木「やりたい放題の王子様か」

冷泉「早く犯人見つけてよ。そいつ退学になっちゃうかもしれないけどね」

桜木「はい。ここで王子様にクイズです」

冷泉「は？」

桜木、血球の拡大写真を3枚出す。

桜木「写真が3枚あります。1つだけ本物の血の拡大写真です。さあどれでしょう？」

冷泉「バカにするなよ。一番左に決まってる」

桜木「ピンポン。正解です。はずれの2枚そっくりですね。うち1つは冷泉君の血、もう1つは食用の赤い色素の拡大写真でした」

冷泉「だから何？」

桜木「いじめられたなんて嘘だな」

冷泉「桜木町の言うことと僕の言うこと、みんなどっちを信じるだろうね？」

桜木「お前は学院の理事長の息子、ここじゃいわば王子様だ。教師も生徒も王子様のご機嫌取りに忙しい。俺はやらねえけどな」

冷泉「文句あるならここ辞めたら？ すぐ追い出してやるよ」

桜木「分かってるか？ みんながご機嫌取るのはお前がすごいからじゃないって」

冷泉「何言いたいわけ？」

桜木「裸のお前は何者でもない。親がすごいだけだ。このままだとお前は常識を知らないまま、外の世界に出ることになるぞ」

冷泉「あのさ、俺は将来この学園継ぐこと決まってるの。このままで何も問題ないの」

桜木「すごいですね立派ですねって本当は裸なのに言われ続ける人生、寂しくないか？ 友達だっと思える奴、ここにいるのかよ」

桜木、上着を脱ぎ始める。

桜木「俺はな、一度全部ぶっ壊れた。最初に担任したクラスが崩壊して、自信なくしてさ。全部捨ててみた。そしたら楽になったよ」

冷泉「服着ろよ、おっさん」

桜木「裸の王子様よ。自分は裸だ、何も持ってないって気づいてみる。楽になるぞ」

桜木、プールに飛び込む。

桜木「冷房のきいた室内プールにいたら飼育殺される。冷泉、このままでいたくないのはお前自身だろ」

冷泉「……男の裸には興味ないね」

冷泉、立ち上がり、出口に向かう。

○同・職員室

薫子、事務作業。濡れた桜木が入室。

薫子「桜木先生、どうしたのその恰好？」

桜木「ああこれ？ 理科の実験演習です」

薫子「冷泉君、自分で躓いて転んだだけだったって、さっき職員室に謝りに来たそうよ」

桜木「はあ。ようやくわかったか（くしゃみ）」

薫子「はあじゃないわよはあじゃ。それに突然ロンドンに留学したいとか言い出して」

桜木、微笑む。

○同・理科準備室・校門の見える窓辺（夕）

桜木、コーヒーを飲みつつ、夕日を受けて一人歩いて帰る冷泉を見ている。（了）

「再会の脱法ハーブ」キャラクター表

芝大和（33）は警視庁組織対策第五課所属の捜査官。役職は警部補。主に麻薬、脱法ハーブなど薬物捜査を担当している。

7歳の時、父の営む雑貨店が経営破綻し、母は離婚。父は自殺した。身よりのない芝は闇金融の上部組織に当たる暴力団に拉致され、大麻製造の下働きの仕事を毎晩させられた。

芝が10歳の時、組織は警察によって殲滅。現在芝の上司である本城悟郎（当時34・現在57）が芝を拾い、以後の面倒を見た。自分をどん底の状況から救ってくれた本城のような刑事になりたいと思い、芝は刑事になる。

特技は匂いを嗅いだだけで違法薬物を当てること。警視庁内部では事情があるとはいえ、元犯罪組織の構成員だった芝を軽蔑する者も多い。芝は実績を積み、現在は新人捜査官百瀬菫（ももせあやめ）（24）の教育係も任されている。

少年時代、一緒に大麻を製造していた柊優示（ひいらぎゆうじ）（33）とは、刑事になった後連絡を取っていない。

「再会の脱法ハーブ」人物表

人 物

芝大和（しば やまと）（33）警視庁組織犯罪対策第五課捜査官・警部補

百瀬菖（ももせ あやめ）（24）同捜査官・巡査

本城悟郎（ほんじょう ごろう）（57）同管理官・警部

柊優示（ひいらぎ ゆうじ）（33）脱法ハーブ販売組織『アガルタ』リーダー・芝の幼馴染

テツ（27）売人

若者 1

「再会の脱法ハーブ」 本文

○渋谷・スクランブル交差点

サッカー日本代表のユニフォームを着た若者が大勢はしゃいでいる。
交通整理をする警察官達。遠くで救急車の音。

○同・道玄坂の脇道

脱法ハーブをパイプで吸引し、酩酊している若者達。
意識不明の女性を救急隊員が運ぶ。

百瀬菖（24）、警察手帳を見せ、若者1のパイプを取り上げる。

若者1「何すんだよ」

菖「これ、煙草じゃないよね？」

若者1「合法ハーブだよ。何か問題あんの？」

若者1、菖につかみかかる。

芝大和（33）、若者1の腕を掴む。

芝「公務執行妨害で逮捕されたいか？」

芝、ハーブのパイプに鼻を近づける。

芝「スパイシー・ダイヤモンドじゃないか」

若者1「いい香りすんだろ。吸ってみる？」

芝「残念だな。日本じゃ合法だけど、東京じゃ薬物防止条例にひっかかるぞ」

若者1「マジかよ」

芝「どこで買った？ アガルタからか？」

と、涎をたらす若者1の肩を揺する。

○警視庁・外観（夜）

○同・組織犯罪対策第五課・会議室（夜）

薬物犯罪防止のポスターあり。

芝、菖、本城悟郎（57）、机の地図を見ている。

芝「明日、百瀬とアガルタに探り入れます」

本城「芝、アガルタの捜査から外れろ」

芝「本城さん、冗談はやめてくださいよ」

本城「これ見ろ」

と柗優示（33）の写真を出す。

本城「何回も取引現場で目撃されてる。売人はハデスと呼んでたとよ」

菖「ハデスってアガルタのリーダーですよ」

芝「そんな？ でも、こいつ、まさか」

本城「芝、こいつが誰か思い出したか？」

菖「え？ 芝さんハデスの知り合いですか？」

本城「ハデスは柊優示だ。そうだな？ 芝」

菖「柊優示って？」

本城「芝の昔の知り合いだよ」

芝「なんでユウの奴、こんなこと」

本城「芝警部補、今回の捜査からは外れろ」

芝「やらせてください。これは俺のヤマです」

本城「柊相手に冷静に行動できるのか？」

芝「相手が誰でも必ずホシをあげます」

本城「命令だ。明日は百瀬だけで行け」

芝、本城を見つめる。

○脱法ハーブ密売組織『アガルタ』店舗前

ショーウィンドウにハーブが並ぶ。

私服姿の菖が歩いて来る。

私服姿の芝、店脇の影から現れる。

芝「百瀬、それで変装したつもりか」

菖「芝さん。職務命令違反ですよ」

芝「お前は危ないから帰れ」

菖「私だけであげてみせます」

芝「俺は偶然居合わせた。行くぞ」

芝、店のドアを開ける。

○同・店内

テツ（26）、カウンターに立つ。

芝と菖、脱法ハーブの袋を見ている。

テツ「見ない顔だねあんたら」

芝「すぐ飛べる草おいてない？」

テツ「うちはお香しかおいてないかんさ。吸引用が欲しんなら他ん店行ってよ」

芝「これ、スパイシーダイヤモンドか？」

と、無記名のハーブの袋を取る。

テツ「スパイシーなら一か月前に売るのが辞めたよ。違法薬物に指定されたっしょあれ」

菖「店にあるのは合法ものだけってことね」

テツ「こっちもビジネスなんでね」

芝と菖、袋を次々手に取る。

テツ「小便臭いガキ連れて帰ってもらえる？」

芝「匂うな、こっちだ」

と、店の奥に進む。扉がある。

テツ「おいおい、そっち立ち入り禁止だよ」

芝「ハデスは奥にいるのか？」

テツ「ハデス？ 何のことだ？」

芝「ハデスいるんだろここに。会わせろ」

テツ「やっぱサツだろお前ら」

と、芝の腕をつかむ。芝、テツを背負い投げ後、間接技。テツ、気絶する。

菖「さっきのガキって私のことですか？」

芝「急ぐぞガキ」

と奥の扉を開ける。

○同・地下のハーブ栽培所

強いライトの下にハーブの鉢が並ぶ。芝と菖が階段を下りて来る。

芝、葉を一枚取り、匂いを嗅ぐ。

芝「これ、鑑識に回せ」

と、葉を菖に渡す。

菖「匂いだけでわかるんですね」

芝「訓練のおかげだよ」

菖、葉をしまう途中、首に麻醉銃を撃たれ、倒れる。

芝は気づかず奥に進む。

芝「合成カンノビナイドの粉がどこかにあるはずだ。探すぞ」

芝、振り返るが菖の姿はない。

芝「おい百瀬、どこ行った？」

芝の首に麻醉銃の弾が刺さる。

芝、倒れ込み、もたえる。

柊の声「訓練のおかげじゃないだろう」

柊、気絶した菖を抱えて現れる。

柊「まさか大和がやってくるとはね」

芝「その声は？ ユウか？」

柊「意識は完全に飛ばなかったみたいだね」

芝「ユウ、お前がハデスなのか？」

菖「う、うう」

柊「かわいい後輩まで目を覚ましそうだ」

柊、菖を抱えて芝の近くの椅子に座る。

柊「ねえ、聞こえる？」

と菖の頬を撫でる。

柊「知ってた？ 君の先輩はさ、子供の頃、僕と一緒に大麻作ってたんだよ」

芝「やめろ。百瀬にさわるな」

柊「今は拾ってもらった刑事の犬になったけどね」

芝、胸に潜めていた拳銃を取り出す。

柊、拳銃を取り上げる。

柊「セーフ。お嬢さんの銃ももらっちゃうね」

と菖の体を探る。

柊「ラッキー、こっちは持ってないみたい」

芝「やめろ、百瀬から手を離せ」

柊「チンピラに脅されながら毎日粉詰めてたガキが、刑事なんておかしいでしょ」

芝「俺は抜け出したんだ」

柊「僕達はこっちの世界の人間だ。一步足を入れたら、二度と抜け出せないんだよ」

芝「お前だって、薬何て触りたくもないって言ってたじゃないか」

柊「大和にさ、刑事なんて似合わないよ」

芝「俺は刑事だ。お前だってこんな仕事……」

柊「ふう、しょうがないな。じゃあ取引しよう。僕の犬にならない？」

芝「何だと？」

柊「警察の情報流してよ。悪いようにはしないから。報酬も出すよ」

芝「誰がそんな話に乗るか」

柊「よく吠える犬だなあ。君の可愛い後輩を薬漬けにすることもできるんだけど」

と、注射器を取り出す。

芝「やめろ」

柊「致死量ぎりぎりまでこの子の体にリキッドを入れることもできる。薬の怖さは大和が一番よく知ってるよね？」

柊、注射器の針を菖の首筋にあてる。

柊「簡単な取引だよ。さ、僕の犬になってよ」

芝「わかった。わかったから手を放せ」

柊「いい犬だ。約束だよ。わんわん」

と、菖の体を芝の方に投げ捨てる。

芝「百瀬、しっかりしろ。動けるか？」

柊「口約束だけじゃさすがに不安だな。行動で証明してもらおうか」

と、芝の手元に注射器を転がす。

柊「彼女にさ、針打ってよ」

芝「は？ 何言ってる？」

柊「向こうの世界に飛ばしちゃいなよ」

芝「お前」

柊「誓いの言葉は嘘だったの？ 僕の忠実な飼い犬になったんでしょ。忠誠心見せてよ」

芝「ふざけんなよ」

柊「大和の弱点は彼女だ。一目でわかったよ。人は弱さを断ち切ったら、強くなれる。早く弱さつぶして、こっちの世界に来なよ」

芝「弱さを守るために俺は刑事やってんだよ」

と注射器を柊の方に投げつける。

注射器は地面に力なく落ちて刺さる。

柊「大和、僕の店にはたくさん客が来る。社会から見捨てられた人が集まって来るんだ。残念だけど君は何も守ってなんかいない」

芝「お前のやってることよく見てみる。ただの犯罪だよ。屁理屈は法廷で言うんだな」

柊、芝の腕に銃を撃つ。うめく芝。

柊「だまれよ、犬のくせに」

と芝に近づき、芝の首に銃口を当てる。

柊「再会でできて嬉しかったのに。さよならだ」

菖、突然起き上がり、柊を羽交い絞めにする。

芝の手元に銃が転がる。

柊「お前、動けるのか。くそ、離せ！」

暴れる柊を菖が必死におさえる。

菖「芝さん！ 撃ってください！」

柊、菖の首をしめる。抵抗する菖。

芝、銃を拾い、柊と菖に向けて構える。

芝の腕から血。手元は震えている。

芝、銃を撃つ。響き渡る銃声。

○同・表（夜）

パトカーが何台も集まっている。

本城、重傷を負った柊を連行する。

負傷した芝と菖、壁際にいる。

菖「さっきの、全部聞いてましたよ」

芝「軽蔑するなら軽蔑しろ」

菖「芝さん、刑事課全員に軽蔑されてますよ」

菖、芝の腕に布で包帯を巻く。（了）

「プライバシー・ゼロの国」人物表

人 物

飛田勢至（とびたせいじ）（40）フリーライター

新条冴子（40）月刊『リベルテ』副編集長

雪原此方（こなた）（28）警備局総合情報分析室技術職

「プライバシー・ゼロの国」キャラクター表

飛田勢至（40）は名古屋出身。フリーのジャーナリスト。大手新聞社の社会部記者時代は、調査報道で数々の賞を受賞。原発事故を契機に新聞社の報道方針とそりがあわず退社。現在は主に総合雑誌『リベルテ』等に寄稿。

住まい兼事務所は雑居ビル屋上のプレハブ小屋。趣味は喫煙。睡眠不足のストレスを煙草で補うヘビースモーカーである。

飛田のモットーは、体制や社会権力におもねることなく真実の報道を貫くこと。3ヶ月に1回は特ダネをあげる。言動はぶっきらぼうで攻撃的だが、緻密で粘り強い取材に基づいた飛田の文章にはファンも多い。

但し、己の信念に従って行動しすぎる面があり、周囲との摩擦が絶えない。大手マスコミには彼を忌み嫌う者も大勢いる。

最近、『リベルテ』の副編集長で大学時代同級生だった新条冴子（40）との仕事が多い。気心の知れた仲だが、冴子は飛田の自由奔放な姿勢と人気に嫉妬している。

「プライバシー・ゼロの国」本文

○飛田の家・外観（朝）

都心の雑居ビル屋上のプレハブ小屋。
新条冴子（40）、小屋の扉を開ける。

○同・室内（朝）

本が乱雑に積まれている。
飛田勢至（40）、PCに向かい遠隔操作ウィルス事件の記事を入力。
冴子が来る。

冴子「おはよう飛田君。朝から仕事？」

飛田「徹夜だよ」

冴子「ちょっと話したいことがあるんだけど」

飛田「手短にな」

冴子「パソコンの電源切ってもらえる？」

飛田「は？」

冴子「携帯の電源もお願い」

飛田「冴子、どうした？」

冴子「他に聞かれちゃまずい話なの」

飛田、PCの電源を落とし煙草を吸う。

飛田「『リベルテ』の副編集長様に頼まれたんじゃ仕方ないな」

冴子「珍しく素直じゃない」

飛田「突然電源落とされたら困るだけだよ」

冴子、鞆から書類を出す。

冴子「これ読んでみて。匿名の情報提供」

飛田「日本国政府が行っている無差別スパイ活動に関する告発？」

冴子「最初は私も鼻で笑ったわ」

飛田「普通に考えれば、悪戯か罠だろ」

冴子「2通目はこれ。添付ファイルつき」

冴子、書類の束を出す。

飛田「公安の機密文書じゃないか。こんなに」

冴子「パスワード解除するまで丸一日かかったんだから。それでもごく一部だって」

飛田「一般市民の通話履歴、インターネットのアクセスログの無差別大量収集。これが事実だとしたら、大変なことになるぞ」

冴子「飛田君、今日、時間ある？」

飛田「暇なら徹夜で書いてないぜ」

冴子「この情報提供者と面会の約束があるの」

飛田「何だ？ 2人で初デートか？」

冴子「残念。飛田君もご指名よ」

飛田「趣味が悪いな、そいつは」

飛田、ジャケットを羽織る。

○ホテル・外観

外資系の高級三ツ星ホテル。

○同・レストラン・店内

飛田、煙草を吸っている。冴子はコーヒー。飛田の灰皿は吸殻だらけだ。

飛田「おい、もう1時間は待ってるぞ」

冴子「向こうも慎重でしょ」

雪原此方（28）、数独のパズル雑誌を持って、店内をゆっくり歩いてくる。

冴子「彼じゃない？」

飛田「まさか、あんな若い奴が？」

冴子「だってほら、目印のパズル雑誌」

飛田「こっち来るぞ、合言葉」

冴子「ホテルのお食事はいかがでした？」

雪原「……最悪です」

雪原、飛田と冴子を見つめる。

雪原「では、僕についてきてください」

飛田と冴子、席を立つ。

○同・雪原の部屋

衣服や皿が散らかった部屋。飛田と冴子、椅子に座る。

雪原はベッドに座る。

冴子「お名前は雪原此方さんでいいのね？」

雪原「携帯電話持ってますか？」

飛田「ああ」

雪原「バッテリー抜いてもらえます？」

飛田、携帯のバッテリーを抜く。

冴子、バッテリーが中々抜けない。

雪原「バッテリー抜けないなら、電源を切って奥の冷蔵庫に入れて下さい」

冴子「冷蔵庫？」

雪原「会話が聞き取り辛くなります」

冴子、冷蔵庫に携帯を入れる。

飛田「すごい警戒ぶりだな」

雪原「遠隔地から携帯を操作して、盗聴器にすることなんて簡単ですからね」

冴子、席に戻り、録音機を出す。

冴子「話、録るけど大丈夫？」

雪原「僕の話の記事にする時はネットに一度もつないでいないパソコンを使って下さい」

飛田「それもセキュリティ対策か？」

雪原「ネットにつないでいないパソコンに侵入するのは、僕らプロでも難しいんです」

冴子「いいでしょう。飛田君、質問お願い」

飛田「まず職歴について確認したい。警備局の総合情報分析室勤務というのは本当か？」

雪原「表向きは民間企業のSEですけどね」

飛田「何故機密情報にアクセスできた？」

雪原「僕は警備局のサーバの保守を任されてるんです。保守のために与えられたアクセス権限で、多くの秘密を見てきました」

飛田「機密文書をうちに流した目的は？」

雪原「これ以上非合法的な諜報活動を見過ごすわけにはいかなかった。僕自身それに加担していることにも耐えられませんでした」

飛田「本当にそれだけの理由で命を危険にさらすような真似するか？」

雪原「集めた情報を利用して、時には無実の人を罪に陥れたり、人の人生をぐちゃぐちゃにかき回す様子も見てきました」

飛田「よくあるよな、不審な事故死や自殺は」

雪原「しかも工作人員達は、自分が起こした事件や事故を手柄のように自慢するんです」

飛田「組織の中で感覚が麻痺するのはよくあることだ。けど君の行動は命取りになるぞ」

雪原「倫理的一線を越えていると何度か上司に訴えました。そんな判断をするのはお前の仕事じゃないと毎回一蹴されましたが」

飛田「いい上司だ。模範解答じゃないか」

雪原「この国に個人のプライバシーなんてない。誰かが公表する勇気を持たない限り、情報収集と監視の仕組みは膨張し続けます」

飛田「我が身を犠牲にしても構わないと？」

雪原「誰かを恐れたまま、納得できない仕事をし続けるのは嫌だった。僕は恐怖より、良心に基づいて行動することを選びました」

飛田「青い。けど本物の青さだ。応援するよ」

冴子「一人で公表しようとは思わなかったの？」

雪原「発表したら人の身に危険の及ぶ情報はどれか、僕にはわかりません。プロの目で情報を選別し、記事に変えて欲しいんです」

飛田「俺なんてマスコミの中じゃ不良だぞ」

雪原「僕『リベルテ』の愛読者なんです」

冴子「そうなの、嬉しいわ」

雪原「特に飛田さん、あなたのファンでした。メールの返信はもらえませんでした」

飛田「持ち上げても英雄にはしないぜ」

雪原「裏切者と罵倒されるなら光栄です」

飛田「雪原、お前を刑務所には絶対入れない。約束だ、情報は必ず記事にする」

冴子、不満げな顔で録音機をしまう。

○飛田の家・中（夜）

飛田、新品のノートPCで記事を入力。冴子、ボトルの水を飲みつつ現れる。

冴子「おつかれ。あの日からずっと仕事？」

飛田「毎日一時間しか眠れないよ」

冴子、灰皿に積もった吸い殻を見て、

冴子「重労働ね。煙草、控えたらどう？」

飛田「それより、記事の掲載許可は下りたか？」

冴子「まだよ。警備局に裏取り中」

飛田「記事が出る前に告発の事実がばれたら雪原の身が危ない。急かしてくれ」

冴子「急がせてるわよ。弁護士の内容チェックもあるし、もうちょっと待ってよ」

飛田「一流雑誌の編集部は毎度色々大変だな」

冴子「あとね飛田君、悪いんだけど、編集部から記者が一人加わることになったの」

飛田「何だそれ」

冴子「牧野さん。知ってるでしょ」

飛田「ああ。愛想がいいだけの三流記者だろ」

冴子「うちの社内でも揉めてるんだから。上に通すにはベテラン記者の参加が必要な」

飛田「雪原は俺と冴子を信頼して情報提供してくれたんだ。今の状況で雪原が知らない第三者が入るのはまずいって」

冴子「彼には私から話をつけておくから」

冴子、記事の用紙を集める。

飛田「おい、何のつもりだ？」

冴子「記事は一旦うちの編集部で預かるから。飛田君、後は私達に任せて、休んだらどう？」

飛田「記事の権利は契約で守られてるはずだ」

冴子「パソコンもちょっと借りたいんだけど」

飛田「だめだ。データはそこにしかないんだ」

冴子「引き継ぎよ引き継ぎ」

と、PCを引っ張る。飛田と取り合い。冴子のボトルの水がPCにかかる。

冴子「あ、ごめん、データ大丈夫？」

飛田、PCを操作するが反応しない。

冴子「ほんとごめん。後で弁償するわ」

飛田、胸ポケットから煙草を取り出す。

飛田「冴子には冴子の事情があるのはわかるよ。ただ今回は危ない山だ。俺も一歩踏み出して、自分が正しいと思うことをする」

と、煙草の箱の中からUSBを出す。

冴子「それ、もしかして？」

飛田「バックアップ取ってないわけないだろ」

と、USBメモリを指で回転させる。

飛田「この記事は俺が書く。雪原との約束だ。『リベルテ』で記事にできないなら、他の出版社に持っていく」

冴子「それはだめ。卑怯じゃない」

飛田「先に卑怯なまねしたのはどっちだ？ 後3時間待つ。頼む、上の承認取ってくれ」

冴子、早足で部屋を立ち去る。

○喫茶店・店内（朝）

飛田、モーニングを食べている。

帽子を目深にかぶった雪原、隣に座り、タブレットを差し出す。

『リベルテ』電子版だ。

『プライバシー・ゼロの国 無差別大量情報収集の真実』とある。

雪原「モーニングセットおいしいですか？」

飛田「最悪だな。ただ少しはましになった」

飛田、煙草に火をつける。（了）

「約束のカヌー」人物表

人 物

早瀬 波（なみ）（19・25）カヌー選手・バイト生活者

嶋 流次（30・36）波のコーチ・日本カヌー協会所属

靱（うつぼ） 雄三（53・59）日本カヌー協会スタッフ

選手A

○神奈川県カヌー競技場・ゴール前

川辺に『カヌーワイルドウォーター ジャパンカップ2014』の横断幕。

早瀬波（19）、カヤックに乗り、先頭を進む。

嶋流次（30）、ストップウォッチを持って波を見ている。

波、ゴール前の急流で体勢を崩し、選手Aに抜かれる。

○同・川辺（夕）

波、川辺に座っている。選手Aが握手を求めに来る。

波、そっぽを向く。立ち去る選手A。

嶋が来る。

嶋「波、気持ちはわかるけどさ」

波「嶋さん、明日から猛特訓しようよ」

嶋「え？」

波「来年は絶対に優勝する。オリンピックに行くのが2人の夢でしょ」

嶋「さぼり魔がようやく本気になったか」

波と嶋、ハイタッチする。2人の腕には同じ模様のみサンガが巻かれている。

○日本カヌー協会神奈川県支部・表

『日本カヌー教会』の看板がある丸太小屋。

周囲は森。近くに川。晴天だ。

波と嶋、川辺にカヤックを2台持ってくる。

靱雄三（53）、小屋から出てくる。

靱「おい何してる？ 今日練習中止だってよ」

波「知ってます、でも、今日しかないんです、私達には」

靱「まだ晴れてっけどよお、強風波浪注意報出てんべ」

嶋「靱さんすいません、こいつ次のレースに勝負かけてるんで、やらせてください」

靱「嶋君、元国体選手のあんたが、川の怖さ知らんはずないだろ」

嶋「雲行き怪しくなったら、すぐ練習中止しますから」

波、川にカヤックを入れて漕ぎ出す。

靱「たく、何が起きても俺知らねえかな」

嶋「ご心配なく、私がついてますから」

嶋、川にカヤックを入れて波を追う。

○川・中

波、パドルを漕ぐ。後ろに嶋が続く。

嶋「重心右に寄ってるぞ。バランス取れ」

波、進む。嶋、腕時計を確認。

嶋「ペース落ちてる。もっと下半身使って」

川の流が早まる。波の前に岩場。

嶋「スweepだ。ブレード軸にして回れ」

波のカヤック、転覆しそうになる。

嶋「どうした？ そんなんじゃいつまで立ってもバイトのアマチュア選手だぞ」

波「わかってるって」

波、体勢を立て直して漕ぎ始める。

嶋「またペースダウン、漕げ漕げ、うまくなるには漕ぐしかないんだよ」

波「やかましいコーチだな」

嶋「調子出て来たじゃないか。ほらもっと下半身使って漕げよ。どこ目指してるか、わかってんのか？」

波「わかってるよパワハラコーチ」

嶋「愛してるぜ三流選手」

波、漕ぎ出す。上空に淀んだ雲。

○日本カヌー協会神奈川県支部・表の川

靱、銚を川に突き刺し、川魚を獲っている。

小雨が降り始める。

○川・中

雨。増水している。流れも早い。

波、パドルを漕ぐ。嶋が続く。

嶋「波、お前はまだ三流だけど、やり続ければ一流になる素質がある。漕ぎ続けろ」

波「言われなくても漕いでるよ」

嶋「無駄口叩いてないでパドリングだよ」

波のカヤック、岩にぶつかり転覆。

嶋「ロールだ！ パドルセット！」

波、起き上がり、パドリングを再開。

波「まだまだ」

遠くで雷が落ちる。

嶋「波、そろそろ……」

波「限界超えるまで行こうよ」

嶋「……練習嫌いがようやく直ったか」

波と嶋、急流を漕ぎ続ける。

○日本カヌー協会神奈川県支部・室内（夕）

靱、焼き魚を食べつつ、外の豪雨を眺める。

電話が鳴る。靱、電話に出る。

靱「はい、ああ、大丈夫、練習中止したわ。ああ、問題ないっしょ。こんな日に川に出るバカいねえよ。じゃあな」

靱、電話を切り、窓の外を見つめる。

○川・中（夕）

波と嶋、大雨の中を漕いでいる。

波のカヤック、風に煽られて転覆。

嶋「ロール！ ロールだ！」

波の体は浮き上がって来ない。

嶋「波！ 大丈夫か！」

と、波のカヤックに近づくが、自分も横転しそうになる。

嶋「くそ！ 波、返事しろ！」

水面に波の体が浮かび上がる。

波の意識はない。

嶋「おい、目覚ませ」

波のカヤックに近づく嶋。

二人はカヤック毎激流に流される。

嶋、波の体をかばって岩に激突。

波、衝撃で目を覚ます。

嶋は体を岩に挟まれ、流血している。

波「嶋さん！」

嶋「生きてたかバカ野郎」

波「血出てる！ 大丈夫？」

嶋「早く岸に上がれ」

波「一緒に登ろうよ」

波、嶋に手を差し出す。

嶋「俺は無理だ。脚挟まれた」

波「大丈夫、私の手つかんで」

嶋「ばか。お前も死にたいのか」

と、波の手を振り払う。

嶋「お前はオリンピックに行け、約束だぞ」

波「何言ってるの？ 2人の夢でしょう？」

嶋「ああそうだ、2人の夢だ。だから早く行けっつってんだよ」

波「必ず助けに戻るから」

波、陸に這い上がる。

嶋「いいか波、これから何言われようがカヌー一辞めるな、漕ぎ続けろ」

波「嶋さん」

嶋「お前はきっとトップに立てる。俺を超えた選手になれ。それまで絶対やめんなよ」

波、頷き、駆け出す。

激流が嶋とカヤックを襲う。

砕けるカヤック。

岩場につかまり、踏ん張る嶋。

○岸辺の森（夜）

雨が降っている。靱、雨合羽を着込み、ライトを持って歩く。

波が走って来る。

靱「お前、生きてたんか」

波「早く、来て」

靱「あ？」

波「いいから、早く！」

波、靱の手を引いて走り出す。

○岸辺（夜）

雨。岩の上に嶋のほどけたミサンガがある。

波と靱、走って来る。

波「嶋さん！ 嶋さん！」

靱「本当にここか？」

波「これ、嶋さんのミサンガ」

と、岩場のミサンガを拾う。

靱「バカ、川に近づくなって」

波「早く、早く探さなきゃ」

靱「無理だ、諦めろって」

靱、暴れる波の腕をつかむ。

○海（夜）

カヤックの破片が荒波に揉まれている。その上空を海鳥が舞う。
海面に血が広がる。ヘリが近づく音。

○日本カヌー協会神奈川県支部・室内（深夜）

波、毛布を巻いて床に座っている。

靱が部屋に入って来る。

靱「たく、こんな日に勝手に練習して、死にてえのかおめえは」

波、嶋のミサングを握りしめる。

靱「今回の件は全部選手個人の責任だぞ。おめえみたいな無鉄砲な奴、もうカヌー乗る資格ねえ
かな」

波「続けます、何言われても絶対辞めません、約束したんですから」

電話が鳴る。靱が出る。

靱「はい、はい、ああ、そうですか。どうも」

波「何て？ 嶋さんは？」

靱「海で見つかったって。残念だけどな……」

大きな雷が落ちる音。

○カヌー競技場・スタート地点（朝）

『カヌースラロームジャパンカップ2020東京五輪代表選考会』の横断幕。

波（25）、カヤック脇に立ち両腕にミサングを巻いている。

靱（59）が来る。

嶋「よお五輪代表候補。覚えてっか俺のこと」

波「靱さん、その節はお世話になりました」

嶋「あんだけの事故起こして、よくこのクラスまで戻って来たな。6年もよく続けたよ」

波「まだスタート地点にも立ってませんよ」

嶋「見に来てんよ、あんたの元コーチさん」

と観客席を指さす。車椅子に乗った嶋（36）がいる。両足はない。

嶋「挨拶行かなくていいんか？」

波「優勝したら行きますよ」

嶋「不器用だねあんたら」

波「レースが終わったら、絶対行きますから」

と、ミサングを巻いた両腕を嶋の方に掲げる。（了）

「10秒チャレンジ」人物表

人 物

遠藤 保 (35) 会社員

茅ヶ崎恵介 (39) 遠藤の上司

かりん (23) バー店員

りさりさ (24) バー店員

「10秒チャレンジ」 本文

○(株) ITシステム・オフィス内

パソコンとデスクが並ぶオフィス。

遠藤保（35）、奥の席の茅ヶ崎恵介（38）に書類を持ってくる。

遠藤「これ、承認お願いします」

茅ヶ崎「遠藤、人事発令見た？」

遠藤「え？ 人事発令？」

茅ヶ崎「さっき社内システムに出てたぞ」

と、キーボードを操作する。

『遠藤保、スペシャリストからエキスパートに降格』と画面に表示される。

遠藤「え？ 降格？」

茅ヶ崎「気落とすなよ。俺はお前のこと評価したけど、アホ部長の判断だから」

遠藤「部長か。昨日も意味不明に怒られたし、ちぎしょう」

遠藤「どうだ、今日飲みに行くか？」

遠藤「いや、今日はそんな気分じゃ」

茅ヶ崎「俺はお前のこと評価してるよ」

遠藤「茅ヶ崎さん……一杯だけなら」

茅ヶ崎「よし、最近いい店見つけたんだよね」

遠藤「高い店だめですよ、給料下がるんだし」

茅ヶ崎、にやつく。

○新宿御苑・駅前（夜）

雨である。遠藤、地下鉄の階段から出てくる。

傘を差しつつ、スマホの画面を確認。茅ヶ崎から『早く来い』のメッセージ。

○バー『ウイスキーボックス』・表（夜）

ガラス張りの店。店内の様子が見える。

遠藤、周囲を見回しながら歩いて来る。

○同・店内（夜）

店内中央にはウイスキーボトルが並ぶ長いカウンター席。左右にテーブル席。

茅ヶ崎、カウンター席の端に座り、ハイボールのメガジョッキを持つ。

りさりさ（23）、ストップウォッチを持って、茅ヶ崎を見詰めている。

りさりさ「10秒チャレンジ、用意スタート！」

茅ヶ崎、勢いよく飲み始めると、遠藤が店に入って来る。

茅ヶ崎「ちょっとタイム。遠藤こっちこっち」

りさりさ「タイムなーし。残り5秒」

茅ヶ崎「まじかよ」

茅ヶ崎、ジョッキをがぶ飲みする。

りさりさ「3、2、1、終了ー」

茅ヶ崎、メガジョッキを飲み続ける。

りさりさ「だめだめ、アウトですよ！」

茅ヶ崎「そんなあ、いいじゃん」

りさりさ「だめー、アウトー！」

遠藤、茅ヶ崎の隣におそるおそる座る。

遠藤「茅ヶ崎さん何してんすか」

茅ヶ崎「お前のせいだぞ、遠藤」

遠藤「何ですか、いきなりキレちゃって」

りさりさ「いらっしやいませ、りさりさです」

遠藤「りさりさ？ それ名前なの？」

りさりさ「みんなからりさりさって呼ばれてるんで、名前にしてみました」

遠藤「ああ、そうなの。よろしく」

りさりさ「何にしますか？」

遠藤「とりあえずハイボールで」

茅ヶ崎「ノリ悪いよ。10秒チャレンジ行けよ」

遠藤「それって、さっきやってたのですか？」

りさりさ「メガハイボール10秒以内に飲まれますと、一杯無料でサービスしますよ」

遠藤「僕そういうのいいですから」

茅ヶ崎「さっきの責任取って飲めよ」

遠藤「まだしらふですよ」

りさりさ「ハイボール2つにしときますね」

と言って、カウンター奥の厨房に行く。

茅ヶ崎「いいだろこの店。カウンターだと、ガールズバーじゃないのに女の子ついてくれるんだよねえ」

遠藤「あんま女の子かわいくないすけど」

茅ヶ崎「贅沢言うなよ、そういう店じゃないんだから」

りさりさ、ハイボールとポップコーンを持って来る。

りさりさ「はい、ポップコーンサービスです」

茅ヶ崎「いいねいいね。じゃ、遠藤の降格祝ってことで乾杯！」

遠藤「降格祝って」

と愚痴りつつ、グラスを重ねる。

りさりさ「降格祝？ 合格祝じゃなくて？」

茅ヶ崎「こいつさアホ部長のせいで、スペシャリストからエキスパートに降格したのよ」

りさりさ「え？ それどっちが偉いんですか？」

茅ヶ崎「よくわかんないでしょ。俺もどっちが偉いかわかんねー」

と高笑い。

かりん（22）、向かいのカウンターに立つ。

遠藤、男性客に微笑むかりんを見て、手にしたポップコーンを落とす。

茅ヶ崎「何だよ遠藤、行儀悪いな」

遠藤「すみません」

茅ヶ崎「やっぱりショックか？ まあ飲めよ」

遠藤、かりんを見つつ、ポップコーンを食べる。口からコーンが零れ落ちる。

茅ヶ崎「きたな！ きたないよお前！」

遠藤「茅ヶ崎さん、向かい側の子、いい感じですね」

茅ヶ崎「ん？ あの子？ りさりさちゃん、あの子名前なんだったっけ？」

りさりさ「え？ かりんですか？」

茅ヶ崎「そうだそうだ、かりんちゃん。そっか、遠藤はかりんちゃんがタイプか」

りさりさ「何か分かる気がするー」

遠藤「いや、いい感じだなと思っただけで」

茅ヶ崎「この歳で照れんなよおっさん」

りさりさ「ごめんなさいね。うち指名とかそういうシステムないんで」

遠藤、肩を落としハイボールを飲む。

茅ヶ崎「わかった。遠藤が10秒チャレンジ成功したら、かりんちゃん呼んでもらおう」

遠藤「そんなシステムないでしょう」

茅ヶ崎「どうよ？ りさりさ」

りさりさ「いいですよー」

遠藤「え？ いいの？」

茅ヶ崎「行け遠藤、降格祝だ」

遠藤「じゃあ一回だけ、お願いします」

りさりさ「チャレンジ頂きましたー」

りさりさ、メガジョッキを持ってきて、ストップウォッチを構える。

りさりさ「成功したら一杯サービスですよー」

遠藤「あとかりんちゃんこっちね」

りさりさ「そうでしたね、忘れてました」

茅ヶ崎「遠藤よく見ろ、ジョッキの中はほとんど氷だ。かりんちゃんのために飲み干せ」

遠藤、ジョッキを見つめ唾を飲み込む。

りさりさ「3、2、1、スタート！」

遠藤、メガジョッキを飲む。ぼろぼろと口から酒がこぼれ落ちる。

茅ヶ崎「おい、こぼれてんぞ！」

りさりさ「3、2、1、ストップ！」

遠藤、ジョッキを置く。スーツとワイシャツは酒で濡れている。

茅ヶ崎「どうなの？ どうなの？ これ？」

りさりさ「うーん、判定タイム入りまーす」

遠藤「ごめんなさい、トイレ」

と、口をおさえ、トイレに駆け出す。

○同・トイレ（夜）

遠藤、吐き終わって、水を流す。

○同・店内（夜）

遠藤、ふらふらトイレから出てくると、かりんがおしぼりを持って立っている。

かりん「よかったらどうぞ」

遠藤「あ、ありがとう」

と、姿勢を正しておしぼりを受け取る。

遠藤、手を拭いた後、おしぼりを返す。

かりん「あ、ここ染みになっちゃいますよ」

と、床に膝をついて、遠藤のスーツについた染みをおしぼりで拭き取る。

遠藤「ああ、悪いね、ありがとう」

かりん「クリーニング出してくださいね」

遠藤、席に戻る。茅ヶ崎は酔っている。

カウンターにかりんが立ち、伝票確認。

茅ヶ崎「よかったな、判定オッケーだって」

遠藤「茅ヶ崎さん、ここ普通のバーですよ」

茅ヶ崎「見つけたの俺だからね」

遠藤、カウンター下で茅ヶ崎と握手。

かりん「初めまして、かりんです。遠藤さんって、茅ヶ崎さんの会社の方ですか？」

茅ヶ崎「俺の部下なんだけどさ、今日アホ部長のせいで、スペシャリストからエキスパートになっちゃって」

かりん「すごーい、おめでとうございます」

茅ヶ崎「いやいや、かりんちゃんね」

遠藤、咳払いしつつ、カウンター下で茅ヶ崎の横腹を小突く。

遠藤「ありがとう、今日はお祝いなんだ」

かりん「次、何飲まれますか？ 一杯無料で行けますよ」

と、遠藤にメニュー表を差し出す。

遠藤「じゃあ、山崎のロックで」

茅ヶ崎「お前ロックなんて飲むんだっけ？」

かりん「ごめんなさい、山崎のロックは無料対象じゃないんですよ」

遠藤「そうなんだ。じゃあ角ハイボールで」

かりん「他にご注文は？」

茅ヶ崎「どうなんだ遠藤？」

遠藤「とりあえず、いいかな」

かりん「あの、もしよかったらなんですけど」

遠藤「何？」

かりん「私も一杯いただいていいですか？」

茅ヶ崎「遠藤、聞ってるぞ。いいのか？」

遠藤「もちろん。好きなの飲んでいいよ」

かりん「ありがとうございます。じゃあ私も角ハイいただきます。すぐ戻ってきますね」

と、奥のカウンターに向かう。

茅ヶ崎「どうだ遠藤？ いいだろこの店」

遠藤「悪くないですね。明日も来ましょう」

茅ヶ崎「今日俺のおごりじゃないからな」

遠藤「え？ まさかの割り勘ですか？」

かりんが酒を持って戻って来る。

遠藤、姿勢を正す。茅ヶ崎、にやつく。（了）

「ちゃいくら」人物表

人 物

坂上一郎 (29) 会社員

鈴木次郎 (35) 坂上の上司

ティナ (22) キャバ嬢

リア (21) キャバ嬢

戸塚シン (27) 呼込

呼込

ボーイ

キャバ嬢 1

キャバ嬢 2

○歌舞伎町・ガールズ居酒屋前（深夜）

通行人や呼込がたくさんいる店前。

ガールズ居酒屋の看板には、美人の店員の写真が多数写っている。

坂上一郎（29）と鈴木次郎（35）、会社の同僚達が店から出てくる。

坂上「それじゃ、おつかれさまでしたー」

一同「おつかれー」

同僚達、ぱらぱらと歩き始める。

坂上と鈴木、皆の帰りを見送る。

坂上「すーさん、もう終電ないっす」

鈴木「じゃ、もう一軒行こっか」

坂上「うす」

坂上と鈴木、皆と逆方向に歩き出す。

呼込1、2人にすり寄る。

呼込1「何系お探しですか？ キャバですか？ もみですか？」

坂上と鈴木、無視して歩き続ける。

鈴木「坂上、どこ行きたい？」

坂上「もう金1万しかないんすよね」

呼込が何人も坂上達に近寄る。

二人は呼込を無視して歩いていく。

鈴木「コンビニで金おろしてく？」

坂上「今日は安く済ませましょうよ」

鈴木「じゃあキャバか」

坂上「ガールズバーにしません？」

鈴木「俺はキャバの方がいいんだけど」

坂上「じゃあすーさん安い店見つけてくださいよ」

鈴木「坂上探してよ」

戸塚シン（27）が寄って来る。

戸塚「今日はどちらに？」

坂上と鈴木、歩き続ける。

戸塚、追いかけてくる。

戸塚「何系お探しですか？ もう時間も遅いんで、お安くご紹介できますよ」

坂上「キャバで安いとこ探してるんだけど」

戸塚「キャバですか」

坂上「時間潰したいんで、2時間とかいけたらいいなあと思ってんだけど」

戸塚「2時間焼酎つきで8千円でどうですか？」

坂上「すーさん」

鈴木「うーん、もう一声」

戸塚、スマホを取り出し、電話でこそこそ話す。

鈴木「2時間だったら安い店でも、なんだかんだで1万くらいすぐ行っちゃうからね」

戸塚「確認とれました。今なら120分お1人様7千円ですぐ入れます」

鈴木「女の子マンツーツでつくの？」

戸塚「女の子最初からお2人につけます」

坂上「悪くないんじゃないですか？」

鈴木「行くか」

戸塚「では、ご案内します」

坂上と鈴木、戸塚についていく。

○エレミア・入口前（深夜）

雑居ビルの三階。ボーイが立っている。

エレベーターのドアが開く。

坂上と鈴木、エレベーターを降りる。

戸塚、エレベーター内に残り、

戸塚「ごゆっくりどうぞー」

エレベーターのドアが閉まる。

ボーイ「前金になります。おひとり様7千円です」

鈴木「え？ 前金なのここ？」

ボーイ「はい。特別にお安くしてますんで」

坂上と鈴木、財布からお札を出す。

ボーイ、お金を確認し、

ボーイ「ご案内します」

と、二人を店の中に連れていく。

○同・店内（深夜）

暗い照明の店内。

客は多く、店は賑わっている。

坂上と鈴木、ボーイの先導で、一番手前の席に案内される。

坂上と鈴木、座ると、ティナとキャバ嬢1がやってくる。

ティナ「どうもー、ティナでーす」

ティナ、坂上の隣に座り、焼酎の水割りを作り始める。

ティナ「（以下外国訛り）お兄さん私もいい？」

坂上「え？」

ティナ「お酒、一杯だけいいでしょ」

坂上「いくらなの？」

ティナ「千円だけ」

坂上「ごめん、今日はもう金ないから」

ティナ「ええ、いいじゃん」

坂上「いや本当にごめん」

ティナ「みんな飲んでるよ、ほら」

ボーイ、鈴木の席にカクテルを持ってくる。

坂上「え？ すーさんまじすか？」

鈴木「くれくれってうるさいからさ」

ティナ「いいなー、私も飲みたいな」

坂上「しょうがないな」

ティナ「ありがとー」

ティナ、ボーイに向けて手を振る。

ティナ「お金、千円」

坂上「え？ 今払うの？」

ティナ「うん」

坂上、不満げな顔で千円札をティナに渡す。ボーイ、カクテルを持ってくる。

ティナ、グラスを取って、

ティナ「かんぱーい」

坂上とティナ、グラスをかわす。

坂上「どこ出身？」

ティナ「私？」

坂上「中国かどっか？」

ティナ「台湾だよ」

坂上「ああそうなんだ。そっちの子も？」

ティナ「うん、みんなだいたい台湾」

ティナ、坂上の膝に手を乗せて、

ティナ「お兄さん、ホテルいこ」

坂上「ホテル？」

ティナ「うん、近くにあるよ」

坂上「どうせ金かかるんでしょ」

ティナ「安いよ」

坂上「いくらなの？」

ティナ「3万」

坂上「たけえな」

ティナ「3万で楽しいこと何でもできるよ」

坂上「いいよ、俺今日酒飲みたいから」

ティナ「行こうよ。楽しいことしようよ」

坂上「いいって」

ティナ「みんな行ってるよ」

と、坂上の体に抱きつく。

坂上「行かないから。ここで飲もうよ」

ティナ、むすっとした顔で席を立つ。

キャバ嬢1も席を立つ。

坂上「ちょっとスーさん」

鈴木「坂上、やっちゃったな。チャイクラだぞ、ここ」

坂上「チャイクラって？」

鈴木「チャイニーズクラブ。略してチャイクラだ」

坂上「え？ ぼったくりですかここ？」

鈴木「ぼったくりと言われれば、ぼったくりのような、でもぼったくりでないような」

坂上「出ましようよ、金ないっすよ僕」

鈴木「そうするか」

リア（21）とキャバ嬢2がやってくる。

リア、坂上の隣に座る。ティナより美人である。

リア「こんばんわー、リアで一す」

坂上「ごめん、俺達もう帰るわ」

リア「ええ？ 一緒に飲もうよ」

坂上「出るから。ボーイさん呼んでよ」

ボーイが来る。

リア、中国語でボーイに何やら話す。

ボーイ「すみません、今店の外でけんかがありまして」

坂上「けんか？」

ボーイ「けんかが終わるまで、お待ちいただけますか？」

鈴木「けんか終わったら出られるんだね」

ボーイ「はい」

と、ボーイが去る。

リア「一緒に飲みたかったなあ」

坂上「もう金ないから」

リア「この後一緒にホテル行かない？」

坂上「は？」

リア「行こうよホテル」

坂上「行きたくないし」

リア「えー、やだ、行こうよ」

坂上「いくらなの？」

リア「3万」

坂上「行かない」

リア「すぐ近くにホテルあるよ」

リア、坂上のひざを撫でる。

坂上「だいたいさ、けんかしてるから、外出られないでしょ」

リア「けんか終わったらホテル行こ」

坂上「帰るっつってんだろ」

ボーイが来る。

ボーイ「お待たせしました」

坂上と鈴木、立ち上がる。

○歌舞伎町・交差点（深夜）

客と呼びこみで賑わっている。

坂上と鈴木、とぼとぼ歩いている。

戸塚、交差点の向こう側で男性客に声をかけている。

坂上、戸塚を見て、

坂上「あいつ」

鈴木「ん？」

坂上「文句言ってやる」

坂上、走り出そうとすると、鈴木に肩をつかまれる。

坂上「何すんすか」

鈴木「坂上、やめとけ」

坂上「何ですか？」

鈴木「文句言っても言い逃れされるだけだ」

坂上「あいつが今声かけてる人も、チャイクラ連れてかれるかもしれないんすよ」

鈴木「絶対やばい人バックにいるし、下手に絡んだら、こっちが痛い目あうよ」

戸塚、男性客を連れて歩き出す。

坂上、その様子をにらんでいる。（了）

「論文盛りました？」人物表

人 物

遠山金太郎 (35) ブロガー／細胞生物学研究者

緒形 遥 (29) 細胞生物学博士

轟 渉 (とどろき わたる) (50) 再生科学研究所所長

「論文盛りました？」 本文

○プリンセスマンション・外観

入口に当山金太郎（35）がいる。

遠山、般若の面をつける。

○同・居間

緒形遥（29）、培養液の入ったシャーレにスポイトで液体を垂らしている。

インターフォンが鳴る。

遥、インターフォンを取って、

遥「どちら様ですか？」

遠山の声「郵便です」

遥「ポストに入れておいて下さい」

遠山の声「すみません、書留なんで、ハンコもらえますか？」

遥、受話器を置く。

○同・玄関・中

遥、玄関のドアを開ける。

般若の能面をつけた遠山が立っている。

遥、はっと驚き、ドアを閉める。

ドアを何度も叩く音。

遥「警察呼びますよ」

遠山の声「開けてくださいよ」

遥「何の用ですか？」

遠山の声「僕、キンです」

遥「キン？」

遠山「キンの科学日記書いてるキンですよ」

遥「キンの科学日記って、あのブログの？」

遠山「あなたの論文の画像流用、最初に指摘してあげたよね」

遥、そっと玄関のドアを開ける。

遠山、般若の面を手で整える。

遠山「緒形遥さん、多機能分化細胞、本当に作製できたのかな？」

遥「私からはお話できません。帰って下さい」

と、ドアを閉めようとする。

遠山、体を乗り出し抵抗する。

遠山「開けてよ、誰かに口止めされてるの？」

遥、力づくでドアを閉め、鍵をかける。

何度もドアを叩く音。遙、座り込む。

○再生科学研究所・外観

○同・所長室

轟 渉（50）、書類を読んでいる。

遥、部屋に入って来る。

轟「何してるんだ、外出禁止って言っただろ」

遥「轟所長、私もう耐えられません」

轟「マスコミに見られてないだろうな？」

遥、うなづく。

遥「反論しちゃだめなんですか？」

轟「3月12日まで待てば補助金がおりの。君はSTEP細胞の作製に尽力しなさい」

遥「嫌です。表に出させてください」

轟「まだわからないのか。君は目立ち過ぎた。君が何か言えばマスコミもみんな叩く」

遥、押し黙る。

轟「後は私達で何とかするから。帰りなさい」

遥、部屋を出る。

○同・歩道

遥、歩いていると、茂みから般若の面をつけた遠山が現れる。

遥、小さな悲鳴を上げる。

遥「何なんですか？」

遠山「今日は何しにこちらへ？ 記者会見の打合せでもしてたのかな？」

遥、早足で進む。遠山、追いかける。

遥「質問には答えられません。研究所の公式発表まで待ってください」

遠山「補助金もらえるまで黙るつもり？」

遥「え？」

遠山「12日だったよね、特定国立研究法人の承認降りるの。九百億の補助金なんて、どの研究所も欲しいだろうな」

遥「お金の為に研究してるんじゃないんです。病気で困っているたくさんの人のために研究してるんです」

遠山「さすが。アピール上手」

遥、早足で歩き去る。

○プリンセスマンション・遥の部屋・居間

テレビには本日3月10日の天気の表示。

遥、コーヒーを飲みつつPCで『キンの科学日記』を見る。

『緒形博士の博士論文に大量コピペ疑惑』とある。

テレビのニュース画面に轟が現れる。

轟の声「STEP細胞の論文に不適切な箇所があるという多数のご指摘を踏まえまして、現在論文の取り下げを検討しております」

遥、コーヒーをPCにこぼす。

○再生科学研究所・所長室（夕）

轟、座っている。遥、やってきて、

遥「記者会見やるなんて聞いてませんよ」

轟「論文は取り下げることになった」

遥「なった？ 論文のリーダーは私です。取り下げの意志はありません」

轟「緒形君、もう決まったんだ。これだけ騒がれば折り合いつけなきゃいけないだろ」

遥「所長、何をおっしゃりたいんですか？」

轟「正式発表は14日にする。君のポストは研究所に残すから、取り下げ承認してくれ」

遥「そんな」

轟「論文に色々手違いはあったが、STEP細胞ができたことに嘘はない。そうだろ？」

遥、拳を握って、震わせる。

○プリンセスマンション・表（夜）

遥、歩いて来ると、壁の裏から般若の面をつけた遠山が現れる。

遥、はっと驚いて、

遥「しつこいですよもう。ストーカーですか？」

遠山「再生研の記者会見見た？」

遥「帰って下さい」

遠山「ブログには書かないから、話だけでも聞かせてよ」

遥「私は一研究者ですからお答えできません」

遠山「所長の命令に従順に従うわけだ」

遥「そろそろ本当に警察呼びますけど」

遠山、論文のコピーを取り出す。

遠山「左のがあなたの博士論文、こっちが他の人の研究論文、そっくりだよこれ」

遥「見ましたよ、ブログにも書きましたよね」

遠山「おかげさまでアクセス倍増」

遥「論文のコピペなんてみんなやってるんじゃないですか？」

遠山「そうだよ。みんなやってる。けど学者やマスコミに持ち上げられたあなたが、そんなことしちゃだめだったんだ」

遥、押し黙る。

遠山「あなたの研究仲間、今頃あなただけ斬ろうとしてるかもしれませんよ」

遥「え？」

遠山「全部あなたが未熟なせいと言われるかもね。審査したのは彼らなのに」

遥「私、もう研究できなくなるのかな」

遠山「続ける方法が一つだけある」

遥「一つだけ？」

遠山「真実を話すんだ。間違いは間違いだと、素直に認めるんだ」

遥「見てほしいものがあります」

遥、遠山を連れて建物内に入る。

○同・遥の家・居間（夜）

遥と遠山、PCのメール画面を見る。

遥「所長から研究者宛のメールです」

遠山「ネイチャーに論文が掲載されれば特定法人の承認に有利だ。実験をうまく見せるように最善を尽くせ、と」

遥「私達はベストを尽くしたんです」

遠山「待った。実験をうまく見せるようにって何？ 盛ったってことですか？」

遥「論文にはしっかりした論理と構成が必要です。説得力のある写真も」

遠山「はっきり言うと、捏造したのかな？」

遥「論文が捏造だとしても、STEP細胞は実在します。本当に作製可能なんです」

遠山「論文の捏造は認めた、でいいのかな？」

遥「私が言ったとは書かないでもらえますか？」

遠山「最初の約束通り、書きはしませんけど」

遥「けど？」

遠山、般若の角からマイクロカメラを取り出す。

遥「え？ 何それ？」

遠山「ちょっと失礼」

遠山、カメラのケーブルをPCにつなぐ。

PCを操作。先程遥が話している映像が画面に表示される。

遥「ちょっと、どういうことですか？」

遠山「ブログに書かないとは言ったけど、撮影しないとは言ってないよね？」

遥「ずっと盗撮してたなんて、卑怯ですよ」

遠山「緒形さん、今あなたが感じてるのが、裏切られた人の気持ちです。わかりますか？」

遥「何なんですかあなた？ 私にどうしろと？」

遠山「これをネットにばらされなくなかったら、ちゃんと認めて欲しい、あなた自身で」

遥、肩を落としてうなだれる。

遠山「研究が真実だと言うなら、続けたらいい。将来を選ぶのは、あなただよ」

遠山、遥の肩を叩く。

○再生科学研究所・表

遠山、般若の面を脱ぐ。

○同・所長室

遥、轟に頭を下げている。

遥「長い間お世話になりました」

轟「君もこれから色々大変だと思うが、しっかりな」

遥、うつむいたまま、部屋を出る。

入れ替わりで遠山が入って来る。

遠山「本日から新人で入りました遠山です。宜しくお願いします」

轟「ああ君か。色々STEP細胞の対応で忙しくてね。後始末、よろしく頼むよ」

遠山「任せてください。研究チームは僕が立て直しますから」

遠山、ほくそ笑む。（了）

「一日一善、ときどき変態」人物表

人 物

汐留帆奈（しおどめはんな）（21）大学生

島袋 繁（しまぶくろしげる）（40）フリーター

三杉一花（みすぎいちか）（21）帆奈の友人

店員

○歩道橋・橋の上（夜）

島袋繁（40）、道路を見つめている。

汐留帆奈（21）、スマホを見ながら歩いてくる。通り過ぎようとする、

島袋「すみません。ちょっといいですか？」

帆奈「あ、はい」

島袋「一緒に死んでもらえないでしょうか？」

帆奈「はい？」

島袋「一人で死ぬの、やっぱり怖いんです。できたら一緒に」

帆奈「自殺？ ですか？」

島袋、押し黙って道路を見つめる。

島袋「止めないでください」

帆奈「やめといた方がいいと思いますよ。私もまだ死にたくないですし」

島袋「ごめんなさい、突然変なこと頼んで。若い女の子道連れにするのはよくないな」

島袋、胸ポケットから手紙を取り出す。

島袋「代わりにお願いがあります。これ、ポストに入れてもらえませんか？」

帆奈「手紙って、遺書ですか？」

島袋「妻宛の手紙です」

帆奈「奥さんいるのに自殺とかよくないです」

島袋「妻なんて形だけです、あんなやつ」

帆奈「そう言わずに」

島袋「いい、死ぬんだ！」

と暴れる。帆奈、島袋の体をおさえる。

島袋「離せ、離してくれ！」

帆奈「だめですって！」

島袋、暴れた後、抵抗するのをやめる。

島袋「ありがとう」

帆奈「え？」

島袋「ありがとう。止めてくれて」

と、泣き出す。

島袋「こんな僕のことでも、気にかけてくれる人がいるんですね」

帆奈「そんな、たいしたことしてないです」

島袋「ありがとう。もう一度、生きてみます」

島袋、帆奈の胸に顔をうずめて泣く。

帆奈、照れつつ、島袋の顔を胸から離そうとする。

○大学・表の通り（夕）

帆奈と三杉一花（21）、歩いている。

帆奈「すごいでしょ。一日一善って感じ？」

一花「帆奈それさ、悪戯されたんじゃないの？」

帆奈「違うよ、私が助けたの」

一花「どうだろね？ じゃ、また明日ね」

帆奈、不満げな顔で一花を見送る。

○コンビニ・店内（夕）

両手に包帯を巻いた島袋、店に入ってくる。

島袋、女性の店員に声をかける。

島袋「すみません、トイレ貸してもらえます？」

店員「どうぞ。奥です」

島袋「あの、もう一つお願いがあって」

店員「何でしょう？」

島袋「トイレでジッパー下ろして欲しんです」

店員「はい？」

島袋「いつもは面倒見てくれる妻がいるんですが、さっきはぐれてしまって」

と、包帯を見せる。

帆奈、店に入る。

帆奈「あれ？ あ、どうも。お久しぶりです」

島袋「ん？」

帆奈「ほら、歩道橋で」

島袋「人違いじゃないですか」

帆奈「手、どうしたんですか？ 今度はリストカットしちゃったんですか？」

店員「もしかして、お知り合いの方ですか？」

島袋「知らないなこんな子は」

帆奈「え？ 命の恩人的な感じで喜んでたじゃないですか」

店員「先程のトイレの件、もしよかったら」

帆奈「ん？ トイレ？」

店員「トイレの補助が必要なそうなんです。奥さんとはぐれてしまったそうで」

帆奈「奥さんとまだうまくってないんですか？」

島袋、押し黙っている。

○同・トイレ（夕）

夕日のさす個室に帆奈と島袋がいる。

帆奈「じゃ、下げますよ」

と、島袋のジッパーを下ろす。

島袋「すいません、ペニスを出してください」

帆奈「え？」

島袋「お願いできますか？ 漏れそうなんです」

帆奈「自分じゃあ、できないんですか？」

島袋「情けない話ですが、この手じゃもう」

帆奈、トイレ掃除のゴム手袋をはめる。

島袋「え？ それ使うの？ それはちょっと」

帆奈「失礼します！」

と、島袋の股間に勢いよく手を入れる。

島袋「いたっ」

帆奈「ごめんなさい！」

と手を離す。島袋、ジッパーを上げる。

島袋「邪魔。どいて」

と、トイレを出て行く。

帆奈「あれ？ 今、手使った？」

○住宅街・路上（朝）

車椅子に乗った島袋、道路の隅にいる。

車椅子の車輪は溝にはまっている。

一花、歩いてくる。

島袋「すいません。車輪が溝にはまっちゃって。押してもらえませんか？」

一花「ごめんなさい、私、急いでるんで」

島袋「お願いできませんか？ 妻とはぐれてしまって」

一花、渋々車椅子を押す。

一花「うーん、中々抜けませんね」

島袋「うわ、危ない」

車椅子が揺れる。島袋、一花に密着。

一花「すいません。もうちょっとですから」

帆奈、歩いて来る。

帆奈「一花、おはよう」

一花「帆奈、手伝って。中々抜けなくて」

帆奈「いいよ」

帆奈と島袋、目が合う。

帆奈「あ！ こいつ」

島袋「またお前か」

一花「何？ 2人知り合い？」

帆奈「ほら、この前言った」

一花「え？ この人なの？」

一花、島袋から体を離す。

一花「やだもう。さっき触られたし」

島袋、溝から車輪をはがす。

島袋「じゃ、私はこれで」

帆奈、島袋の車椅子をつかむ。

帆奈「今度は足怪我されたんですか？ て言うと思ったか、この変態詐欺師」

島袋「離せよ」

帆奈「人の善意につけこんで、こんなことしてて、恥ずかしくないんですか？」

島袋「ださまれるお前らが悪いんだろ」

帆奈・一花「は？」

車椅子からモーター音が鳴り始める。

島袋「弱い人間の前にじゃ善人ぶるくせに。今のお前らの方が、本当のお前らだろ。2度と俺の前に現れるな。偽善者共め！」

島袋の車椅子、時速10キロで走り出す。

一花、追いかけてしようとするが、帆奈が引き止める。

一花「何で？ 追いかけてようよ」

帆奈「待って。私に考えがあるから」

帆奈、不敵に笑う。

○歩道橋・橋の上（夜）

島袋、道路を見つめている。

帆奈、かつらとサングラスをつけて歩いてくる。通り過ぎようとする、

島袋「すみません。ちょっといいですか？」

帆奈、立ち止まる。

島袋「一緒に……いえ、何でもありません」

帆奈「せっかくお話できると思ったのに」

島袋「え？」

帆奈「別の駅でも歩道橋に立ってましたよね？」

島袋「ああ、落ち着くんです、こういう場所」

帆奈「気になってたんです。一人で寂しそうに立ってるあなたの様子見て」

島袋「恥ずかしいな、そんな風に言われると」

帆奈「ごめんなさい、急にこんなことぺらぺら喋っちゃって。私キモいですよね？」

島袋「そんなことないですよ。あなたとは何か不思議な縁を感じるな」

帆奈「そういえばさっき、一緒になって」

島袋「一緒に死んでもらえないでしょうか？」

帆奈「え？」

島袋「一人で死ぬの、やっぱり怖いんです。よかったら一緒に」

帆奈「いいですよ。死にましょうか」

帆奈、島袋の体をつかむ。

島袋「危ない！ やめて！」

帆奈「嬉しいな。ちょうど私も死にたいと思ってたところなんです。一緒に死にましょ」

帆奈、島袋の体を持ち上げる。

島袋「ふざけんなよ」

と体を入れ替え、帆奈の体を拘束する。

帆奈「はなせ、変態」

島袋、帆奈のかつらとグラスサンを取る。

島袋「やっぱりお前か。下手な芝居して」

島袋、帆奈を道路に落とそうとする。

帆奈「みんな、来てー！」

一花他女性達が階段を登ってくる。

島袋「くそ」

と言って、逃げようとする、反対の階段からコンビニ店員他女性達に来る。

島袋、囲まれる。帆奈、正面に立つ。

帆奈「みなさん、彼ですか？」

女性達、うなづく。

帆奈「調べましたよ。島袋繁さんですよ？ どんだけ人だましてきたんですか？」

一花「奥さんだっていないでしょ」

帆奈「人の愛し方知らないんじゃないですか？」

島袋「お前らに俺の何がわかんだよ！」

島袋、道路に飛び降りる。

帆奈、目をつぶる。

島袋、トラックの荷台に着地、トラックの上で高笑いする。

帆奈「あいつ、絶対捕まえてやる！」

帆奈、走り去るトラックを見つめる。（了）

「ペテン師のレクイエム」人物表

人 物

越水悠乃（こしみずゆの）（15・24）バイオリニスト

南桂鷹留（みなみかつらたかる）（55）元作曲家

新山譲（にいやまじょう）（48）作曲家

浅井新平（38）（38）芸能記者

バーテン

「ペテン師のレクイエム」本文

○宮城県女川町の海岸

岸辺に震災の瓦礫が広がる海岸。

越水悠乃（15）、砂浜に立ち、バイオリンを弾いている。

○コンサートホール・ホール内

クラシックの大きなコンサートホール。

ステージの大型液晶に先程の映像。

越水悠乃（24）、ステージでバイオリンを弾いている。

新山譲（48）、オーケストラを指揮。

横断幕に『震災10周年記念コンサート

新山譲作曲バイオリン協奏曲第3・11番震災レクイエム』とある。

液晶画面に津波、倒壊した家の映像。

演奏が終わると会場からスタンディングオベーション。

悠乃の新山、笑顔で礼をする。

南桂鷹留（55）、ホール入り口のドア前に立ち、腕を組んでいる。

○ホテル・スカイラウンジ（夜）

悠乃と新山、東京湾の夜景を一望できる席に座り、酒を飲んでいる。

遠くのカウンター席に南桂がいる。

新山「今日も盛況だったね」

悠乃「新山さんの曲がいいもん。何年経っても、人々の心に残るんだと思う」

バーテン、カクテルを二人分持ってくる。

悠乃「ん？ 頼んでないですけど？」

バーテン「あちらのお客様からです」

と、南桂の席を示す。

新山「もしかして」

悠乃「南桂さん？」

南桂、手を挙げて、やって来る。

南桂「どうも。コンサートすばらしかったね」

悠乃「お久しぶりです」

南桂「私の着想が生きていた。悠乃、名演奏だったよ」

南桂、悠乃の隣に座る。

悠乃「聴きに来て下さったんですか？」

南桂「せっかく久々に会うんだから、ちょっと話そうじゃないか」

新山「悠乃、そろそろ出ようか」

南桂「まあ。ちょっとくらいいいじゃないか」

新山「南桂さん、何しに来たんですか？」

南桂「海岸の映像、私もいたのにカットするなんてひどいじゃないか」

新山「あなたの映像をコンサート中に流すことはできませんよ」

南桂「私の曲だよあれは」

悠乃「それは違います。震災レクイエムは、新山さんの曲です」

南桂「少なくともアイデアを出したのは私だ。君達ばかり儲けておかしいと思わないか？」

新山「すいませんが、コンサートが終わって私達も疲れています。日を改めましょう」

南桂「新山、お前があんな記者会見しなけりゃ、私は……」

悠乃「新山さんは悪いことしてません」

南桂「ゴーストライターなんていくらでもいる。正義ぶりやがって」

新山「南桂さん、何が目的ですか？」

南桂「全部ばらすぞ」

新山「ばらす？ 何を？」

南桂「俺が曲作りできないことも、耳が聞こえていることも知ったうえで、お前らは俺の作った台本通りに動いてた」

新山「今更そんなこと言って、誰が興味を」

南桂「震災で家が流されたバイオリニストの少女だって言って、売り出してやったの誰だと思ってる？」

新山「南桂さん、何が言いたいんですか？」

南桂「たいした腕もないくせに」

新山「金ですか？」

南桂「一億円要求する」

新山「一億？」

南桂「不愉快なんだよ私は。お前らがいけしゃあしゃあと感動の演奏を続けてることが」

新山「意味がわかりません。悠乃、帰ろう」

悠乃と新山、席を立つ。

南桂「同じ目にあわせてやるぞ」

○ホテル・廊下（夜）

悠乃と新山、歩いている。

悠乃「何なんですか、今頃出てきて」

新山「私達の仕事ぶりに嫉妬してるだけだろ。気にすることないさ」

○インタビュー室

浅井新平（38）、南桂の話をメモしている。

南桂「そうです。彼女は全部知ってたんです、私が作曲できないことも、耳聞こえてることも」

浅井「南桂さんのことがばれた時、悠乃ちゃん、すごいショックそうな様子だったのに」

南桂「音楽業界で生き残るために必死の演技だったんじゃないですかね」

浅井「でもねえ、南桂さん、あなたがやった罪は変わりありませんよ」

南桂「悠乃とは肉体関係もありましたけどね」

浅井「え？ そうなんですか？」

南桂「もちろん私は少女趣味なんてないですけどね。彼女から言い寄ってきたんですよ」

浅井「うーん、これ書けるかなあ」

南桂「ぜひ使ってください。読まれますよ」

南桂、ほくそ笑む。

○コンサートホール・外観

入口に『震災10周年記念コンサート』の横断幕がある。

○同・控室

悠乃、バイオリンの練習をしている。テーブルに週刊誌が置かれている。

新山、部屋に入ってくる。

新山「だめだ。オーケストラ演奏できないって」

悠乃、練習を続ける。

新山「今日も中止か」

悠乃、練習を続ける。

新山「震災レクイエムを演奏するのに、あの記事じゃな」

悠乃、練習をやめる。

新山「悠乃すまない、また巻き込んでしまっ」

悠乃「新山さん、コンサートやりましょう」

新山「え？ オーケストラもないのに」

悠乃「聴きに来てくれる人がまだ少しでもいるなら、やりましょうよ」

新山「けど、こんな状況で」

悠乃「もうこの曲弾けなくなるかもしれないでしょう？ お願いします。弾かせてください」

悠乃、新山の手を取る。

○同・ホール内

小さなホール。悠乃、ステージに立つ。

新山、ピアノの前に座っている。

客席はまばら。中央の席に南桂がいる。

悠乃「今日はオーケストラのメンバーが揃いませんでした。ピアノとバイオリンのソナタ形式で震災レクイエムを演奏します」

悠乃、バイオリンに手をそえる。

南桂「やめろやめろ演奏会なんかやめちまえ」

まばらな観客、南桂の方を向く。

南桂「震災レクイエムはバイオリン協奏曲だ。ソナタ向きの曲じゃない」

悠乃「ソナタ形式でやることは、作曲者の了承を得ています」

南桂「皆さん、彼女は私が作った曲じゃないって知ってたんですよ、最初からね」

警備員達、南桂の方に進む。

悠乃「おっしゃる通りです。この人に震災レクイエムは書けないと思っていました」

南桂「ほらみなさん、こいつは知ってたんだ」

悠乃「耳が聞こえていることも薄々気づいていました。知らないふりをしていたことは、本当にごめんなさい。心からお詫びします」

悠乃、深々と頭を下げる。

悠乃「この曲を演奏するのは、今日で最後にします」

南桂「お前らに音楽続ける権利なんてないよ」

悠乃「南桂さん、あなたは曲を作らかった。私も曲は作れません。けれど、バイオリンを弾くのは大好きなんです」

南桂、警備員に抵抗する。

悠乃「私は新山さんが作ったこの曲を弾きたかった。多くの人に知ってもらいたいと思って、演奏してきました」

南桂「嘘つけ。お前も有名になりたかっただけだろ」

悠乃「もう言い訳はしません。最後の演奏を聞いてください」

悠乃、演奏を始める。

新山、ピアノで伴奏。

南桂「へたくそ。間違えてるぞ！」

警備員達、南桂をホールの外に連れ出す。悠乃と新山、演奏を続ける。

○同・外の廊下

南桂、警備員を振り払いベンチに座る。

南桂「聴かせろ」

南桂、目を閉じて演奏を聞く。

○同・ホール

演奏が終わる。客席からまばらな拍手。

悠乃と新山、頭を深々と下げる。

悠乃「仙台に帰ります。さよならですね」

新山「私も音楽から手を引くよ。やっぱり私はやるべきじゃなかったんだ」

悠乃「新山さんは作曲を続けてください」

新山「悠乃は？」

悠乃「誰か聴きたいと思ってくれる人が見つかったら、最初からやり直します。それまで、お別れです」

とバイオリンをステージに置く。（了）

「オレスタイル」人物表

人 物

国分和仁(こくぶんかずひと) (24) スノーボード日本チーム技術コーチ

日野走流(ひのはしる) (15) ハーフパイプ日本代表

梶原雄基(かじわらゆうき) (45) 全日本スキー連盟ソチ五輪対策部長

レオ・スカイ (27) ハーフパイプアメリカ代表

ユーリ・レイコフ (22) 同・スウェーデン代表

司会

○雪山・斜面

アメリカ北西部の雪山である。

国分和仁（24）、岩や木に囲まれた斜面をスノーボードで滑っている。

時々ジャンプ。空中で回転。

梶原雄基（45）、山の麓で見ている。

国分、梶原の前に来て急ブレーキ。

舞い上がった雪が梶原にかかる。

国分「梶原さんすか？」

梶原、雪を払って、

梶原「相変わらずいい滑りしてんな」

国分「代表の話なら、もう断りましたよね？ 俺、やる気ないすから」

梶原「国分、代表の技術コーチやらないか？」

国分「コーチ？」

○国分の家・外観

雪山に囲まれた別荘風のログハウス。

○同・居間

暖炉の火が燃えている丸太の部屋。

国分、梶原にコーヒーを出す。

国分「コーチなんて、梶原さんやればいいじゃないすか」

梶原「新しい技が毎年どんどん生まれてる。お前みたいな現役に指導して欲しいんだ」

国分「（溜息）オリンピックか」

梶原「やっぱり、五輪は嫌か？」

国分「そうじゃないす。俺の中ではもう終わったことなんで」

梶原「じゃあ技術コーチ頼むよ」

国分「俺なんかがコーチして大丈夫すか？」

梶原「問題ないだろ？」

国分「またマスコミにバッシングされますよ」

梶原「アメリカで連覇した実績がある。文句は出ないさ」

国分「代表、誰なんすか？」

梶原「未来のお前だよ」

梶原、DVDディスクを取り出す。

国分、ディスクをテレビに入れる。

日野走流（15）のノーボードハーフパイプ大会の映像がテレビに映る。

梶原「日野走流、まだ中学生だ」

国分「この子まだまだ伸びますね」

梶原「お前の技、教えてやってくれないか？」

国分「梶原さん、やるなら本気でやりますよ」

梶原「じゃあ、引き受けてくれるんだな？」

国分「教えません」

梶原「は？」

国分「この子が持ってんの引っ張り出します」

○ハーフパイプ練習場

円筒を半分にして、横に倒した形状の競技場である。

国分、ヒップホップの曲にノリつつ、日野の練習を見ている。

日野、滑りを終えて、

日野「どうでした？ 国分さん」

国分「ああ、これからはカズでいいよ」

日野「じゃあカズさん」

国分「さんとか俺苦手だから」

日野「じゃあカズ君？」

国分「ちょっと見ててくれる？」

国分、滑り出しジャンプ、回転。

国分「何感じた？」

日野「やっぱカズ君すげえなって。僕カズ君憧れなんですよ。DVDみんな持ってます」

国分「リスペクトするのはいいけどさ、尊敬してたら俺に勝てないよ」

日野「え？」

国分「走流の滑りさ、何かこうカクカクってかたいんだよね、真面目すぎるっていうか」

日野「かたくて、真面目過ぎ？」

国分「自分のスタイルで滑りなよ」

日野「自分のスタイル？……って何ですか？」

国分「走流の体に一番合った滑り方かな」

国分、滑り出す。

国分「他の誰の真似でもない走流が一番輝くスタイルさ、ゆっくりでいいから見つけよ」

日野、ぎこちなく滑り出す。

日野「でも、ソチまですぐですし」

国分「オリンピックだって大したことないし」

日野「え？」

国分「周りをごちゃごちゃ騒いでるだけさ」

国分、パイプの頂上で停止する。

国分「俺達はスノーボードに集中してこ」

国分、滑り出しジャンプ。日野も続く。

○日本スキー連盟ビル・外観

○同・会議室

壁にバンクーバー五輪の日本選手の写真が多数貼られている。

国分と梶原、面会している。

梶原「日野の成績下がってるじゃないか」

国分「今は走流に一番はまるスタイル探してるところです。これからっすよ」

梶原「もしだめなら」

国分「そんな時は技術コーチの俺の責任でしょ」

梶原「国分」

国分「そういうことですよね。少なくともマスコミは俺狙ってくるだろうし」

国分、後ろの壁に目をやる。

日本選手団の制服姿の国分の写真がある。

ネクタイを緩め、シャツを出し、パンツを腰まで下げている写真である。

梶原「お前ももう大人になっただろ」

国分「僕は変わってませんよ。自分のスタイル最後まで貫くだけです」

梶原「技術指導はお前のやり方に任せたんだ。結果出してくれよ」

国分「走流の将来のためにも入賞はしますよ」

梶原「入賞じゃだめだ。メダルだよ」

国分、舌打ちしそうになる。

梶原「日本スノーボード史上初のメダルの期待がかかってんだ。頼むぞ」

梶原、国分の肩を叩き部屋を出る。

○ソチオリンピック会場・全景

○同・選手控室

日本代表、獲得メダル数ゼロの張り紙。

国分、日野の腰に冷却スプレーを噴射。

国分「まだ痛い？」

日野「少し」

国分、日野の腰に湿布を張る。

日野「カズ君ごめん、オリンピックなのに」

国分「走流さ、俺の為とかみんなの為とか、そういう気持ち強すぎんのもよくないから」

日野「カズ君も怪我して試合出たことってありました？」

国分「トップはみんな怪我隠して滑ってるよ」

国分、日野の服を元に戻す。

国分「みんなの前に出る時は、未来のスーパースターの顔で出てこ。な？」

日野、微笑み、国分とハイタッチ。

○同・ハーフパイプ競技場

国分と日野、レオ・スカイ（27）の競技を見ている。

レオ、空中で回転。

日野「すげえな、やっぱレオですよレオ」

国分「スーパースターのレオと同じ場所でやるんだからさ、走流も自信持ちなよ」

レオ、最後のジャンプで着地に失敗。

腰をおさえてうめく。会場どよめく。

日野「あのレオでもミスすんのか」

国分、会場の雪を手取る。

国分「このバッド・コンディションじゃな」

電光掲示板のトップにレオ・スカイ、得点89. 0の表示。現在1位である。

国分「俺達東洋人はさ、2倍大きく、2倍高く飛んで、ようやく同じ評価だから」

日野「カズ君プレッシャーですよ今の」

司会「スウェーデン、ユーリ・レイコフ」

ユーリ・レイコフ（22）、滑り始める。

国分「なんかあいつのってんね」

レイコフ、最後に空中で4回転し着地。

得点95. 5の表示。1位になる。

レイコフ、観客席の声援に答える。

国分「まあさ、敵は他の選手じゃないし」

日野「え？」

国分「敵は今までの走流自身だから」

日野、腰に手を当ててストレッチ。

国分「今の走流ができる最高の滑りやってさ、走流のスタイル見せつけてやんなよ」

日野、うなづく。

司会「ジャパン、ハシル・ヒノ」

歓声の中、日野、滑り出す。

日野、レオやレイコフより大きく高く飛ぶ。ラスト、空中で3回転半し着地。

大歓声。日野、笑顔で大きく手を振る。

得点95.0の表示。2位である。

観客席の盛り上がり、一瞬収まる。

レイコフ、ガッツポーズで雄叫び。

日野、苦笑いしつつ小さく手を振る。

国分のもとに梶原が走って来る。

梶原「おい！ 審判団に抗議行くぞ」

国分「行かなくていいんじゃないすか」

梶原「何言ってんだ？ こっちの方が」

国分「いいんですって」

梶原「こんな不公平な判定」

日野、国分の方に滑ってくる。

国分「おめでと。メダルすげえよ」

梶原「ほら、みんなで抗議行くぞ」

日野「いいです。向こうの方が上です」

梶原「お前まで」

日野「向こうは4回転の大技決めた。僕は3回転半、悔しいけどフェアな判定ですよ」

国分、頷き、日野をハグする。

国分「観客の心に響いたのは走流の方だよ」

日野「（微笑）めっちゃ嬉しいです」

国分「これからは走流もプロだね」

○ハーフパイプ競技場（夜）

ライトアップされた競技場。

国分と日野、スノーボードで滑っている。客席から歓声。

日野、ジャンプし回転。胸にかけている銀メダル、ライトを反射して輝く。

国分もジャンプ。4回転して着地。

国分と日野、2人で手をかけ、歓声に答える。（了）

「ウォーター・ビジネス」人物表

人物

高桐 尊（たかぎり たける）（41）（株）ブランバツハ日本支社代表

堀井文彦（55）縁楠（へりくす）村住民代表・教師

伴 保（63）縁楠村住民・林業職

ヒルダ・キュンメル（29）高桐の部下

「ウォーター・ビジネス」本文

○縁楠湖・全景

森林の中に大きな湖がある。

立入禁止の立札と柵。

やや離れた場所に工場。

湖から流れ出る川に沿って、ヘリコプターが飛んでいる。

○ヘリコプター・後部座席

高桐尊（41）、ヒルダ・キュンメル（29）、窓から景色を見ている。

高桐「世界中に売るぞ」

ヒルダ「世界中に？」

高桐「そうだ。あの水を世界中に売るんだ」

○縁楠村小学校・外観

古い木造校舎の小さな小学校である。

○同・教室

堀井文彦（55）、教団に立つ。

学年がばらばらの生徒数名。

生徒「今年は縁楠湖行けないんですか？」

堀井「ごめんな」

生徒達、不満の声をあげる。

○縁楠村公民館・外観

田舎の公民館。駐車場にヘリが着陸。

○同・多目的ホール・中

壇上に『第三回公聴会』の立て札。

壇上に高桐とヒルダ。傍聴席に堀井、伴保（63）。

各テーブルにフェリクスと書かれたミネラルウォーターがある。。

堀井「柵を取り払って頂きたい」

高桐「縁楠湖の所有権は私達にあります。不審者が侵入しないよう柵を張ることは、法的に何の問題もありません」

伴「また出たよ、法的法的って」

堀井「柵があったんじゃ遠足にも行けません」

高桐「堀井さんが勤める小学校は、廃校予定と聞いていますが」

伴「おいおい、今の話には関係ないだろう」

高桐「伴さんのやっておられる林業も後継者がいないんでしょう？ 村の発展の為にも、我々の工場が必要じゃないんですか？」

伴「地盤沈下の件はどうなったんだ？」

と、窓の外を指さす。

山の斜面に堀井の家がある。

伴「床傾いたり、堀井さん家大変なんだから」

高桐「前回発表の通り、地下水の汲み上げを原因とした地盤沈下は起きていません」

堀井「信頼のおける調査結果か疑問ですが」

高桐「堀井さんのご自宅に生じた問題は、建物の老朽化が原因ではないでしょうか？」

伴「これだから都会の人間は」

伴、フェリクスボトルを手取る。

伴「これはな、フェリクスなんかじゃない。縁楠湖の水だ」

高桐「縁楠湖の水と言って、売れますかね？」

伴「何だその言い方」

高桐「我々はアジア、アフリカなど世界中に日本の水を売ろうとしてるんです」

堀井「住民の意見を無視していいんですか？」

高桐「ご意見は伺いました。地盤沈下は科学的根拠に乏しいというのが我々の回答です」

窓の外で雨が降り出す。

○同・玄関前の屋根下

高桐、雨を見上げている。堀井が来る。

堀井「うちの村だけじゃない。日本中の水源地を買い占めてるって噂聞きましたけど」

高桐「私はね、日本の水を世界中に届けたいんです。日本の水にはそれだけの価値がある。ブランディングできていないだけだ」

堀井「でもドイツの会社が日本の水売っても」

高桐「販売力を利用してるだけです。そのうち、ドイツの本社を買収してやりますよ」

ヒルダ、やって来る。堀井、立ち去る。

○ブランバツハ日本支社・外観（夜）

○同・屋上のプール（夜）

高桐、泳いでいると、ヒルダが現れる。

高桐「どうした？ ヒルダ」

ヒルダ「縁楠村に大雨洪水警報が」

高桐「何？」

○縁楠湖・全景（夜）

豪雨と暴風。湖の水が溢れている。

立札と柵、濁流に押し流される。

○縁楠村・全景（夜）

豪雨と暴風。川の水が氾濫。

住宅が水に浸かっている。

○縁楠村公民館・多目的ホール（夜）

堀井、伴ら住民達、集まっている。

伴「崩れるぞ！」

と、堀井の家の方を指さす。

○縁楠村・堀井の家付近（夜）

山の斜面、崩れ落ちる。

堀井の住宅、土砂に流され倒壊する。

○縁楠村公民館・多目的ホール（夜）

茫然とする堀井。伴、堀井の肩を抱く。

○ブランバツハ縁楠湖工場・表

やや強い雨。壊れた柵が散乱している。

水で削り取られた土地にヘリが到着。

○同・工場内

高桐とヒルダ、倒れた機械類を見る。

ヒルダ「復旧費用すごそうですね」

高桐「村の人たちは？」

ヒルダ「避難所、確か公民館じゃ」

○縁楠村公民館・多目的ホール

伴と村人達、座っている。高桐とヒルダ、フェリクスの箱を持って来る。

高桐「お配りします」

伴「いらないよ。あんたらが来たからこんななったんだ」

高桐「自然災害です。私達のせいだとは」

伴「今はあんた達の相手する気分じゃないんだ。帰ってくれ」

高桐「水道が使えないと聞いています。必要な方は後でお取りください」

と、フェリクス の箱を床に置く。

高桐、窓の外にある堀井の家を見る。

高桐「あの家、あんな潰れて」

伴「堀井さんちだ。全壊だよ」

高桐「え？ 堀井さんは？」

伴「無事だよ」

高桐「そうですか。ご家族は？」

伴「奥さんとは別れてるし、子ども達は東京行ってるから、よかったけど」

ヒルダ「あそこにいるの、堀井さんじゃ」

ヒルダ、堀井の家の方を指さす。

○倒壊した堀井の家

堀井、雨に打たれながら瓦礫の中に立ち、家具を漁っている。

すぐ傍に川。

ヘリが付近の平地に着陸。

高桐、ヒルダ、伴、傘をさしつつ、ヘリを降りる。

伴「堀井さん、危ないぞ。こっち来い」

堀井、泥の中からアルバムを拾う。

堀井「あった」

と、アルバムを開く。

堀井が別れた妻、幼い子ども達と縁楠湖にピクニックした時の写真が並んでいる。

堀井「よかった。あった」

高桐、遠くからアルバムの写真を見る。

伴「堀井さん、早くあがって来い」

堀井、歩き出すと、泥にはまって転ぶ。

堀井、川に流される。

伴「堀井さん！」

伴、川に飛び込もうとするが、高桐に体を抑え込まれる。

伴「何すんだ、止めるな！」

高桐「私に任せて」

高桐、傘を投げ出し、川に飛び込む。

ヒルダ「高桐さん、無茶です！」

高桐、濁流を泳ぎ、堀井の体を掴む。

高桐「大丈夫ですか？」

堀井のアルバム、堀井の手を離れる。

堀井「アルバムが！」

高桐、手を伸ばしアルバムを掴み取る。

○縁楠村公民館・外観

○同・多目的ホール

『第4回公聴会』の立札。

檀上に高桐とヒルダ。傍聴席に堀井、伴他住民。

高桐「縁楠湖工場の操業停止を決定しました」

堀井「停止？ どうして？」

高桐「操業再開は困難と判断しました」

伴「やっとうちらの願いが叶ったわけだ」

堀井「ちょっと待ってください。考え直してもらえませんか？」

高桐「え？」

堀井「工場の操業再開を検討して頂きたい」

伴「何言ってんだ堀井さん」

堀井「工場がなくなったら職にあぶれる人が出てくる。村に必要な産業だ」

伴「堀井さんあんた、家潰されたのに」

堀井「他の地域でもうちらよりひどい土砂災害はあった。彼らのせいじゃないさ」

高桐「不安でしたら、土砂災害と水の汲み上げの影響を調査しましょう」

堀井「お願いがあります。湖に柵は張らないで欲しい。水には触れないようにするから」

高桐「注意の看板は立てさせてください」

堀井「みんな、どうだろう？」

伴、腕を組んで黙っている。

堀井、周囲を見回した後、高桐を見てうなづく。

高桐「わかりました。再開を検討しましょう」

傍聴席、ざわつく。

ヒルダ「（小声）復旧コスト高すぎますよ」

高桐「フェリクスは彼らにも必要なんだ」

ヒルダ「慈善事業じゃないんですよ。本社にどう説明するんですか？」

高桐「利益は出るよう俺がコントロールする」

高桐、堀井と握手する。（了）

「九尾の狐とディープフリーズ日本列島」人物表

九尾工登(きゅうび こうと) (39) 九尾環境技研・所長

新部香南(にいべ かなん) (28) 科学ジャーナリスト

郷戸朔太郎(ごうど さくたろう) (42) 環境改変技術研究者

栗田持彦(くりた もちひこ) (27) 九尾の部下

中丸聰一(なかまる そういち) (65) 内閣官房長官

司会者

音声

○シンポジウム会場・中

檀上のスクリーンに砂漠の映像。

砂漠には豪雨が降っている。

九尾工人（39）、檀上に立っている。

新部香南（28）、観客席最前列にいる。

郷戸朔太郎（42）、最後尾の席にいる。

九尾「今ご覧になった雨は、イオナイザーと呼ばれる電磁装置が発生させたものです」

スクリーンの映像、砂漠に並ぶ金属製の十字架型装置に替わる。

九尾「イオナイザーはマイナスの電気を帯びた雲を作り出し、大気中の水分を集めます。科学は砂漠に雨を降らすところまで来た」

世界各国の自然災害の映像に変わる。

九尾「現在の地球は、気候の変動期にあります。気候をコントロールする技術は、国家に繁栄をもたらすでしょう」

スクリーンに九尾の狐のロゴ。

九尾「我々が開発した環境改変装置ナイン・テイルド・フォックスは、日本政府の公式認可を得て、実用化へ踏み出しました」

日照り、干ばつの映像に切り替わる。

九尾「日照りの大地には人工の雨を降らせる」

大雪の映像に切り替わる。

九尾「寒冷化には気圧の操作で天気を変える」

香南「ちょっと待ってください」

香南、立ち上がる。

香南「気候変動や異常気象は、科学技術が生み出したものじゃないんですか？」

司会者「質問は後で受けつけますので」

九尾、司会者を制する。

九尾「技術に罪はありません。我々人間が技術を正しく用いれば、地球環境をよりよい状態に導くことができます」

香南、マイクを持って、

香南「科学者の傲慢じゃないんですか？ 気候をコントロールするなんて」

九尾「異常気象や自然災害で困っている人はたくさんいる。社会に必要な技術です」

香南「研究が軍事目的に利用される可能性は？」

九尾「国際条約によって、気象改変技術の軍事利用は禁止されていますよ」

香南「建前だけでしょう？ ベトナム戦争では米軍が人口の雨を降らせたし、最近でも」

九尾「気象兵器ですか。そういうのは、陰謀だってもっぱらの噂ですが」

九尾、失笑。香南、悔し気な表情。

○同・会場出入口

郷戸、腕時計を見ている。

九尾が出てくる。郷戸、手を振る。

○九尾環境技研・全景

50メートル超の金属製の十字架が9本そびえ立っている。

周辺に百基以上、小型の十字架。

その傍に研究所がある。

○研究所・中央管理室

栗田持彦（27）他職員達、電子機器の前でキーボードを操作している。

ドアが開き九尾と郷戸、入ってくる。

郷戸「悪いね、無理言っちゃって」

九尾「尊敬する郷戸博士の依頼ですから」

郷戸、窓に広がる9本の十字架を見る。

郷戸「壮観だな。神様でも降りてきそうだ」

九尾「技術的には郷戸さんが開発した装置の方が上だと、私は今でも思っていますよ」

郷戸、九尾のデスクに置かれた英数字の並ぶメモ用紙をちらと見る。

郷戸「技術的には、だろ。私には九尾君のように、金や政治家の支援を集める才能がなかった。九尾君の勝ちだよ」

郷戸、腕時計を見る。

九尾「この後、予定でも？」

郷戸「いや大丈夫。針の調子が悪くて」

栗田「所長、ちょっといいですか？」

九尾「すみません、ちょっと失礼」

九尾、栗田の方に向かう。

郷戸、九尾のデスクに置かれたメモの方を向きつつ、腕時計のボタンを押す。

○ナイン・テイルド・フォックス・外観（夜）

9本の十字架から光が渦を巻いて発生。

○研究所・中央管理室（夜）

メーターが異常値に上昇。警告音。

九尾と栗田達、キーボードを連打。

九尾「だめだ、きかない。遠隔操作されてる」

○ナイン・テイルド・フォックス・外観（夜）

電気の光が9本の十字架を結んでいく。

光はどんどん膨らみ、大きな渦になる。

○研究所・中央管理室（夜）

九尾と栗田、キーを叩いている。

九尾「仕方ない。強制終了作動」

栗田「強制終了したら、もう研究続行は……」

九尾「それしか方法ないだろ！」

九尾、ハンマーを手に取り、レバーを覆うガラスのカバーを叩き割る。

○ナイン・テイルド・フォックス・外観（夜）

9本の十字架を包む光、1つに凝縮。

轟音と共に天上に駆け上がる。

○研究所・中央管理室（夜）

窓の外で発光。栗田、目を覆う。

九尾「強制終了、作動！」

と、大きなレバーを力いっぱい引く。

○ナイン・テイルド・フォックス・外観（夜）

9本の十字架、音を立てて崩れ落ちる。

上空では、黒い雲が渦を巻いている。

○研究所・中央管理室（夜）

九尾と栗田、床に座りこむ。

栗田「所長、さっきの、やばいんじゃ」

九尾「くそ、何故こんなことに」

栗田「研究データ、侵入者に全部盗られたかも」

九尾「何だと？ 一体誰がこんな仕業……」

栗田「所長、もしかしたら、郷戸博士じゃ」

九尾「郷戸さんが？ まさか」

栗田「外部の人で今日の分のパスワード知ることができるの、ここに来た彼だけですよ」

九尾、デスク上のメモ用紙を見る。

○東京スカイツリー・付近の街並全景

暴風と大雪が街を包んでいる。

○外資系ホテル・付近の道路

九尾、吹雪の中、ホテルに向けて歩く。

防寒着を着込み、顔は毛糸で覆っている。

歩行者はみな同じ格好である。

道端に停車中の車は雪に包まれており、車は走っていない。

道路の脇にある川の表面は凍っている。

ビルの電光掲示板に天気予報の地図。

東京の本日の気温、マイナス30度。

○同・会議室

中丸聡一（65）、窓際に立っている。

九尾が入ってくる。

九尾「官房長官、ご迷惑をおかけしました」

中丸「九尾の狐がディープフリーズを起こしたって、海外メディアもうるさいよ」

九尾「申し訳ありません」

中丸「制御システム乗っ取られたと聞いたが」

九尾「私の落ち度です」

中丸「後はこちらで対処する。君もういいよ」

九尾、頭を下げ、退室しようとする、

中丸「今回の大寒波は、北極海周辺の急激な気候変動が原因だと公表する。君の施設で起きた事故は大寒波と無関係だ。いいね？」

九尾「……かしこまりました」

○九尾環境技研・解体作業現場

雪の中、倒壊したニン・テイルド・フォックスの解体作業が行われている。

九尾、携帯で郷戸の番号に電話する。

音声「お客様のおかけになった電話番号は」

九尾、電話を切ってその場に座り込む。

香南、栗田を振り切って、歩いてくる。

栗田「立入禁止です。マスコミは帰って」

香南「九尾博士、一度お話を！」

九尾「あなたは確か、事故が起きた日に」

香南「科学ジャーナリストの新品と申します」

○研究所・中央管理室

段ボール箱が積まれた室内。

九尾と香南の他にスタッフはいない。

香南「ナイン・テイルド・フォックスが崩壊する前、強烈な光が出たという証言があります。ネットの動画、ご覧になりました？」

九尾「動画？ CG加工じゃないんですか」

香南「真相聞かせてください。あの装置が暴走したから、こんな天気になったんじゃない」

九尾「ごめんなさい。私は科学者です。政府の公式見解を覆すわけにはいきません」

香南「それが真理を追求する科学者の姿ですか？ 一体誰のための科学なんですか？」

九尾「新品さん、私は異常気象から社会を守るために研究を続けてきました。けれど、私の研究がもたらしたものは……」

香南「誰だって間違えること、ありますよ」

九尾「私の間違いは、大きすぎました」

香南「その間違い、あなたの胸に抱え込んだままでいいんですか？」

九尾、窓を見る。ナイン・テイルド・フォックスの残骸に雪が降っている。

九尾「忘れていましたよ、科学者の仕事は世界の謎を解明し、皆に伝えることだと」

○総理大臣官邸・外観

○同・内閣官房長官執務室

中丸、『大寒波の原因は環境改変装置の暴走』と書かれた雑誌を読んでいる。

九尾の顔写真つきである。

中丸、溜息とともに首をふり、雑誌を机に放り投げる。（了）

「ホームレスのライフノート」人物表

人 物

稲見千秋（23）福祉事務所職員

大友淳史(あつし)（34）同・係長

脇坂邦夫(くにお)（69）ホームレス

脇坂 修(おさむ)（39）邦夫の息子・和菓子屋

○栗の木公園・園内

都会の公園。中央に栗の木がある。

脇坂邦夫（69）、木の下にあるダンボール箱に座っている。

髪と髭は伸び放題。両手で腹を押さえ、背中を丸めている。

傍には多数の汚れた鞆、ビニール袋、古本、20冊以上ノートが積まれている。

歩行者達、脇坂を無視して歩く。

強い横風。落ち葉が宙を舞う。

稲見千秋（23）と大友淳史（34）、風に身を震わせつつ、歩いてくる。

千秋、脇坂を見つけて、

千秋「係長、いました。あそこ」

大友、脇坂の傍に寄り、しゃがみこむ。

千秋、やや離れて立ち、震えている。

大友「すみません、区役所の者ですけど、お体、大丈夫ですか？」

脇坂、腹をおさえ、苦しげな顔。

大友「稲見さん、救急車呼ぼうか？」

千明、スマホを取り出し電話。

大友「すぐ救急車来ますからね。あったかいところで診てもらいましょうね」

脇坂、黙っている。

千秋、電話を終え、

千秋「係長、ちょっと」

千秋、大友の袖を引く。

千秋「（小声で）仮病じゃないんですか？ 病院行ったらご飯食べれるし」

大友「あの人、もう長くないよ」

千秋「熱くらいはかった方がいいんじゃないか……」

大友「稲見さん、写真撮っというて」

千秋「……わかりました」

千秋、脇坂にスマホを向ける。

大友「ちゃんとデジカメで。あるでしょ」

遠くで救急車の音。

千秋「はや。もう来ましたよ」

千秋、スマホで脇坂を撮影する。

○中野区福祉事務所・外観（夕）

○同・会議室（夕）

机の上に脇坂の持ち物が載っている。

千秋、手袋をして脇坂のノートを読む。ノートは文字で埋め尽くされている。

大友、部屋に入ってくる。

大友「検査中に亡くなったって」

千秋「係長の予感、当たりましたね」

大友「名前か住所わかるのあった？」

千秋「まだです。こんないっぱいでもん」

大友「探すか」

大友、脇坂の鞆を開く。ごみやがらくたが出てくる。

大友、鼻をつまむ。

千秋「係長これ、名前じゃないですか？」

と、大友にノートを見せる。

脇坂邦夫という文字が百個以上並んでいる。

大友「それだけで本人の名前と言うのは」

千秋「ほら、ここだけじゃなく何頁も」

千秋、頁をめくると脇坂の名前だらけ。

千秋「読んでて気持ち悪くなってきました」

大友「そんな書いて恨んでる相手かもなあ」

千秋「もう。自分で探してくださいよ」

千秋、ビニール袋を探る。ごみに紛れて、折れ曲がった免許証が出てくる。

千秋「あった、免許証。ほら名前一緒」

大友「あのじいさん、脇坂邦夫だったのか」

大友、免許証を持って部屋を出る。

千秋、背を伸ばして大あくび。

突然ドアが開き、大友が顔を出す。

千秋「ノックくらいしてくださいよ」

大友「あのさ、葬式出た時ある？」

千秋「子どもの頃、1、2回だったら」

大友「もしね、もしだよ。親族に引取り拒否されたら、稲見さんに葬儀の準備頼むから」

千秋「え？ 私がですか？」

大友「火葬だけ。簡単だよ。とりあえず火葬場あいてるか、確認しといて」

大友、部屋を出る。

千秋、不満げな顔。

○火葬場・外観

○同・火葬炉前

室内に千秋、大友、僧侶、職員の4名。

僧侶、お経を唱えている。

喪服姿の千秋と大友、数珠を持ち黙禱。

職員、棺を火葬炉に入れ、点火する。

○同・待合室

喪服を着たお年寄りや子連れの家族がソファーに座っている。

千明と大友、部屋の隅に立っている。

千秋「親族の誰もいない葬式なんて嫌だな」

大友「一人暮らしで身寄りのない人なんて、これからどんどん増えてくよ。彼らの最後看取るのも、うちの仕事だから」

千秋「もう出たくないな、こういうの」

千秋、溜息をつき、子連れ家族を見る。

○中野区福祉事務所・外観

○同・事務所内

千秋、PCに向かい仕事をしている。

大友がやってくる。

大友「先週亡くなったホームレスの」

千秋「えーと、確かワッキー……」

大友「脇坂さん。息子さんいらっしゃったよ」

千秋「息子さんて、引取り拒否でしたよね？」

脇坂修（39）、受付に立っている。

大友「話だけでも聞きたいって」

○同・応接室

テーブルに脇坂のノートの束。

修、菓子折りを千秋と大友に差し出す。

修「和菓子屋やってまして。皆さんで召し上がって下さい」

大友「お気持ちだけで。公務員ですから」

大友、修に菓子折りを返す。

大友、修に脇坂の写真を差し出して、

大友「最後の日の写真です。お受取り下さい」

千秋「栗の木公園。すぐ近くなんですよ」

修、写真を胸ポケットにしまいつつ、

修「もう20年以上会ってないですから。これが親父と言われても、夢みたいです」

大友「お父様の遺骨、こちらでお預かりしていますが」

修、首をふり、

修「お任せします。母も再婚してますし、うちではもう親父の話、できないんですよ」

千秋、ノートを数冊、脇坂の前に置く。

千秋「お父様の遺品です。ご覧になりますか？」

修、ノートを開く。びっしり書かれた文字を見て、啞然とする。

修「これが、親父の書いたノートですか」

修、頁をゆっくり手繰っていく。

修「汚い字で、こんなに書いて」

大友「遺骨は5年間お預かりします。その間はいつでも引き取り可能ですので」

修、他のノートを手にとって見る。

千秋「係長、係長」

大友「何？」

千秋「5年経ったらどうなるんですか？」

大友「5年を過ぎたら、遺骨は共同墓地の無縁塚に撒きます」

千秋「撒く？」

大友「ああ。骨壺から出して、墓地の隅にある無縁塚にさーって撒いてくんだよ」

千秋「そんな他の人の骨と混ざって、もう誰だかわかんなくなっちゃうじゃないすか」

修、涙を流している。

千秋「ああ、ごめんなさい。大友が失礼なこと言っちゃって、大変失礼しました」

修「親父だ。やっぱりこれ、うちの親父が書いたノートですよ」

千秋「え？」

修、ノートを広げて見せる。古い住宅の居間の絵が、克明に描かれている。

修「子どもの頃住んでた家です」

修、頁をめくる。色あせたページには、台所、庭の絵が描かれている。

修「うちの台所です。庭です、こっちは、親父の会社の事務所か。懐かしいな」

大友「他のノートと雰囲気違いますね」

修「ここ、日付見てください」

修、ノート右上の年月日を指さす。

修「1975年。僕が生まれた年です」

千秋「その頃描かれたノートなんですね」

修、頁をめくりつつ、

修「親父、絵描くのが好きでね、栗羊羹食いながら、よく描いてたんですよ」

修、ノートを持つ手が震えている。

修「親父のやつ……」

千秋、涙をこぼす。

千秋「お父さん、そのノート、最後の最後まで大事に持ってたんですね」

修、ノートを閉じて、立ち上がり、礼。

修「色々と、お世話になりました」

千秋と大友、立ち上がり、深々と礼。

修、立ち去ろうとすると、

千秋「ちょっと待ってください！」

千秋、絵の描かれたノートを手に取り、修に駆け寄る。

千秋「お父さんの思い出ですよ？ これ持って帰ってください！」

修、ノートを受け取り、胸に抱える。

○栗の木公園・園内（夜）

千秋と大友、栗の木の前で足を止める。

脇坂がいた場所には、花と栗羊羹が置いてある。

千秋と大友、目を見合わせ、うなづく。

二人、手を合わせて、黙禱を捧げる。（了）

「シンデレラは嘘をつきすぎてる」人物表

人 物

庄司怜奈(れいな) (30) 新婦・派遣社員

南条晴斗(はると) (30) 新郎・メーカー社員

庄司穰一 (55) 怜奈の父・庄司硝子社長

庄司雪絵 (55) 怜奈の母・庄司硝子専務

「シンデレラは嘘をつきすぎてる」本文

○『日本ハウス』本社ビル・表

社名看板がある巨大なオフィスビル。
入口に『本日株主総会』の看板がある。

○同・屋上

庄司穰一（55）、靴を脱いで揃える。
庄司、靴の横に書置きメモを置く。庄司、柵に両手をかける。

○レストラン・店内（夕）

庄司怜奈（30）と南条晴斗（30）がディナーを食べている。
怜奈、スマホを鞆から取り出す。

南条「どうした？」

怜奈「お母さんから着信。何度も」

南条「何だろね？ 結婚式のことかな？」

怜奈「電話かけてもつながらないわ」

怜奈、スマホを鞆にしまう。

南条「怜奈、大丈夫？」

怜奈「何が？」

南条「突然やっぱ結婚辞めたとか言わない？」

怜奈「言うわけないじゃん」

南条「怜奈そういうこと言いそうじゃん」

怜奈「何それ。結婚やめとく？」

南条「貯金と宝くじの賞金全額つぎ込んでテーマパークウェディングにしたんだから、ドタキャンだけは辞めてよ。予算7千万だよ」

怜奈「わかったってもう」

怜奈、南条にキスする。

○庄司硝子・表（夜）

古く小さな町工場である。庄司家の住宅と一体になっている。

○庄司家・居間（夜）

庄司雪絵、テーブルに突っ伏している。

テーブルにはガラスのハイヒールが置かれている。

怜奈、ワインボトルを持って現れる。

怜奈「お母さんお土産。お父さんの好きなもの」

雪絵「怜奈、どこ行ってたの？」

雪絵、怜奈に抱きつく。

○同・廊下（夜）

居間からワインボトルの落ちる音。

○テーマパーク・全景（朝）

中央にシンデレラ城が見える。

○シンデレラ城・表（朝）

ウェディングドレスを着た怜奈、オープンカーに乗って城に向かう。

怜奈は以降始終、沈んだ顔をしている。

南条、王子様の恰好で城門前に立っている。南条、怜奈に笑顔で手を振る。

○同・ホール（朝）

大きなシャンデリアのあるホール。

壁際には貴族の恰好をしたスタッフ。

新婦側の出席者は雪絵とごく少数。

ガラスのハイヒールを履いている怜奈と南条、指輪を交換する。

南条、怜奈の顔のベールを開けて、怜奈にキス。雪絵は涙を流している。

○同・表

怜奈と南条、オープンカーに乗ってシンデレラ城を出発する。

車の後ろでは鼓笛隊が行進している。

南条「お父さん、急に欠席って何があったの？」

怜奈「わかんない」

南条「あんな楽しみにしてたのに。強化ガラスのハイヒールまで作ってさ」

○テーマパーク付近のリゾートホテル・表

マスコットキャラ達が手を振って、怜奈と南条の乗った車を出迎える。

○同・宴会場

シンデレラのドレスに着替えた怜奈と南条、シンデレラ城の形をしたウェディングケーキに入刀。

雪絵、親族席に一人座り、泣いている。

怜奈、ケーキを南条に食べさせる。

南条「お母さん、ずっと泣いてるけど」

怜奈「嬉し泣きじゃない？」

南条「怜奈もほら、ケーキ」

怜奈「ごめん。私、いい」

怜奈、新婦席に戻る。

○同・同・会場入口

南条と怜奈、見送りの挨拶をしている。

列の最後で雪絵がやってくる。

雪絵「南条さん、今日はこんな楽しい結婚式開いてくれてありがとう」

南条「お母さん、お父さんにもよろしくお伝えください。今日楽しみにしてたのに」

雪絵「ええ、来なかったのが本当ばかみたい」

雪絵、涙を流す。

南条「お母さんせっかくだから、テーマパーク遊んでってくださいよ」

雪絵「ごめんなさい。私、先に帰るから」

怜奈「お母さん、私も」

雪絵「怜奈は南条さんと。あなたはもう南条家の人なのよ。ね？」

雪絵、怜奈の手を握り締め、立ち去る。

○メリーゴーラウンド

怜奈と南条、馬の乗り物に乗っている。

南条「怜奈さ、さっきからずっと気分悪い？」

怜奈「大丈夫だよ」

南条「みんなも心配してたよ。何があったの？」

怜奈、顔を背ける。

○移動中のジェットコースター

怜奈と南条、先頭車両に乗車している。

南条「何か俺、まずいことやらかした？」

怜奈「やってないよ。晴斗は悪くないよ」

南条「え？ 何？ 聞こえないけど」

ジェットコースター、加速する。

○蒸気船・船上（夕）

怜奈と南条、蒸気船に乗っている。

南条「怜奈、やっぱり嘘ついてるんじゃない？」

怜奈「嘘？ 何のこと？」

南条「ここで結婚式あげるの喜んでたの嘘？」

怜奈「嘘じゃないよ」

南条「俺と結婚したいって言ったの、嘘？」

怜奈「何言ってるの。嘘なわけないでしょ」

南条「じゃあどうして今、私の人生終わりましたみたいな顔してんだよ」

怜奈「パレードが終わったら、言うから」

怜奈のはいているガラスのハイヒールに水飛沫がかかる。

○シンデレラ城・表（夜）

怜奈と南条、座っている。

正面の通りでは、マスコット達が光る乗り物に乗ってパレードをしている。

南条「みんなで見た方が楽しかったかな？」

怜奈「そうだね。見せてあげたかったな」

怜奈、涙をこらえている。

パレードが終わり、他の客は帰る。

南条「怜奈、教えてくれる？ 何があったか？」

怜奈「晴斗、怒らないで聞いてくれる？」

南条「ああ。何聞いても怒らないから」

怜奈「お父さんね、一週間前に亡くなったの」

南条「え？」

怜奈「取引先の住宅会社の屋上から飛び降り自殺。即死で顔もわからなかったって」

南条、啞然とする。

南条「どうしてそんな大事なこと、今まで黙ってたんだよ。結婚式どころじゃ」

怜奈「ごめんね。お父さんの遺言だったの」

怜奈、南条に庄司の遺言状を見せる。

怜奈「『怜奈、結婚式に参加できずごめんなさい。結婚式は開いてください』って」

南条「いくらお父さんの遺言でも、結婚式は」

怜奈「お金すごいにかかっているし、日程だって変えられないじゃない」

南条「お金の問題じゃないよ。何で相談して」

怜奈「晴斗のご両親には相談したよ。晴斗、こんなこと知ったら、絶対結婚式辞めようって言うでしょ」

南条「そりゃそうだけど……お父さん、こんな時に」

怜奈「飛び降りたの、向こうの株主総会の日だったって。値下げ要求断って、取引停止にされて。下請けいじめへの復讐だったのかな」

南条「命を張って、抗議したのか」

怜奈「お父さん、不器用なんだよね。ガラスのハイヒール作れるのに。私に話もしないで、死んじゃうなんて」

怜奈、涙を流す。

南条、怜奈の肩を抱き寄せる。

南条「怜奈、力になれなくてごめんな。辛かっただろ、今まで」

怜奈「……結婚式、辞めるべきだったのかな」

怜奈、南条に体を預ける。

南条「ここにいる場合じゃないな。お母さんのところ行こう」

怜奈「え？」

南条「今はお母さんのそばにいてあげなきゃ」

怜奈「晴斗……」

南条「怜奈のお母さんってことは、もう俺のお母さんでもある。二人でそばにいてあげよう」

テーマパーク内に花火が上がる。

怜奈、久々に微笑み、立ち上がる。

怜奈、ドレスの裾を上げて、階段を駆け下りる。

南条「待てよ。俺も行くから」

怜奈、階段の途中で転ぶ。

怜奈、慌てて立ち上がり、走り出す。

ガラスのハイヒールが片方落ちている。

南条、ハイヒールを拾って、

南条「待って。ハイヒール、落ちてるって」

怜奈、走る。南条、追いかける。（了）

「18歳以上閲覧できません」人物表

人 物

入江信乃(しの) (36) スーパーのパート

入江 純 (9) 信乃の息子

鷺尾 翼 (9) 純の同級生

西 琴美 (40) 信乃のパート仲間

桐生大悟 (28) 小学校教師

友人1

友人2

○入江家・居間（夕）

テーブルに誕生日ケーキの残り、『純くん誕生日おめでとう』のカードがある。

入江純（9）、鷺尾翼（9）と友人1、2に囲まれている。

鷺尾「純、ほら、さっさと脱げよ」

純、泣きそうな顔で下着姿になる。

鷺尾「よし、誕生日記念に撮るぞー」

鷺尾、携帯ゲーム機を純の方に向けて、ボタンを押す。フラッシュが光る。

○スーパー・売り場（夕）

制服姿の入江信乃（36）、控室に走る。

○同・従業員控室（夕）

信乃、制服を脱ぎ、私服に着替えている。西琴美（40）が来て、

琴美「信乃ちゃん今日早いね、もうあがり？」

信乃「すみません、今日、純の誕生日で」

信乃、私服を着こむ。

○入江家・居間（夕）

鷺尾と友人1、2、純を囲んでいる。

鷺尾「写真送るぞー」

鷺尾が携帯ゲーム機のボタンを押す。

友人1、2が持つ携帯ゲーム機の画面に純の下着姿の写真が表示される。

友人1「きた。今日の一番きれいに撮れたね」

友人2「わっしー、他の奴にも送ろうよ」

鷺尾「ナイスアイデア。記念なるしいいな？」

純「やめてよ、やだよ」

純、泣き出す。鷺尾達、笑う。

鷺尾「みんなに見られたくなかったら、パンツも脱げよ」

純「……やだ」

鷺尾「脱がなかったら今まで撮った写真全部、静香とか女子にも送信するぞ」

純、震えている。

友人1「俺、静香のコード知ってるよ」

鷺尾「純、静香と結構仲よかったよねえ」

純、パンツに手をかける。

○住宅街（夕）

信乃、自転車で進む。

○入江家・居間（夕）

床に純のパンツがある。

鷺尾、友人1、2、純を囲んで撮影。

鷺尾「いいねえ。ほら、にっこり笑えよ」

純、泣き叫び、鷺尾に体当たりする。

鷺尾達、純を床に押さえつけて殴る。

○同・表（夕）

信乃、自転車を停めている途中、リビングを見る。

純、鷺尾達に体を押さえられつつ、パンツをはかされている。

信乃、その様子を見る。

○同・居間（夕）

服を着た純、部屋の隅に座り、膝を抱えている。

鷺尾、友人1、2、部屋に入って来た信乃とすれ違う。

鷺尾達「お邪魔しましたー」

信乃「ちょっと待って」

鷺尾「すいません、塾があるんで」

鷺尾達、足早に立ち去る。

信乃「純君、さっき外からちらっと見たけど、鷺尾君達に嫌なことされてた？」

純、立ち上がり、2階に駆け上がる。

○純の部屋（夜）

純、真っ暗な部屋で、携帯ゲームで遊んでいる。

ゲーム機から受信音。純の下半身裸、上着で股間を隠す写真が表示される。

写真の下には『イーグル：静香にも送ったよ』と表示されている。

ドアをノックする音。

信乃の声「寝てる？ 入るよ」

純、携帯ゲーム機を布団の中に隠す。

信乃の声「ちょっといいかな？」

信乃、部屋に入ってくる。

信乃「純君、いじめがあったらお母さんに言ってよ」

純「ないよ、そんなの」

信乃、純を見つめる。純、目をそらす。

○喫茶店・外観（朝）

○喫茶店・店内（朝）

信乃、琴美とコーヒーを飲んでいる。

琴美「信乃ちゃん、考え過ぎよそれ。遊びの延長だって」

信乃「そうですかねえ？」

琴美「一人っ子で心配な気持ちはわかるけど」

信乃「旦那はずっと海外勤務だし、こういう時どう接すればいいかわかんなくて」

琴美「ま、お誕生日会でけんかとかあってもおかしくないじゃない？ 子どもなんだし」

琴美、笑う。信乃は真顔である。

○飯島小学校（夕）

○同・3年3組教室（夕）

『みんな大好き』、『夢を信じて』等書かれた習字が壁に貼られている。

信乃、桐生大悟（28）と面会している。

桐生「お母さん何を証拠におっしゃってるんですか？ うちのクラスでいじめなんて」

信乃「証拠はないですけど、見たんですよ」

桐生「純君はいじめられてないって言ってるんでしょ」

桐生、壁の習字を手で指し示す。

桐生「見てくださいよこれ。明るく元気な子ども達ばかりですよ」

信乃「こういうの、書けて言われたら、別に本気で思ってなくても書けますよね？」

桐生「子ども達は本気ですよ。ポエムの発表会もやっていますから」

桐生、黒板の上にある賞状を指さす。

桐生「学級委員の鷺尾君、校内ポエム大会で去年校長賞獲ったんです」

信乃「へえ。鷺尾君が」

桐生「大会の日は、彼のポエムで僕も泣きましたね。みんないい子達ばかりですよ」

信乃「先生には子ども達の本当の姿、見えてるんですか？」

桐生「我が校は携帯電話の利用禁止してますしね。子ども達が大人の見えないところで悪さするなんて、悪い想像しすぎですよ」

信乃「でもですね、先生」

桐生「証拠が見つかったら相談に乗ります」

桐生、立ち上がる。

桐生「純君、ポエム一度も書いてないんですよ。ちゃんと書くようにお母さんから言ってくださいね」

信乃「すみませんでした」

桐生「純君の前向きな詩、期待してますから」

桐生、信乃の腰に手を触れ退室を促す。

鷺尾、後ろのドアから様子を見ている。

○同・児童玄関

鷺尾、下駄箱に向かうと信乃がいる。

信乃「鷺尾君、この前は誕生日会、来てくれてありがとね」

鷺尾「ケーキおいしかったです」

信乃「純さ、最近様子おかしんだけど、いじめとかないよね？」

鷺尾「いじめ？ そんなのされてたら、純君いじめた奴、僕がやっつけてやりますよ」

信乃、首をかしげて鷺尾の後ろ姿を見送る。

鷺尾、眉間に皺をよせて去る。

○スーパー・従業員控室（夕）

信乃、制服に着替えている。

琴美、携帯ゲーム機で遊んでいる。

信乃「またゲームですか」

琴美「つついはまっちゃうんだよね」

信乃「確か静香ちゃんのですよねそれ。もう自分専用の買った方がいいんじゃないですか？」

琴美「うわ、何これ？　こんなどこから？」

信乃「何々？　何ですか？」

琴美「ああ信乃ちゃん見ない方がいいよ」

信乃「そんなこと言われると余計見たくなっちゃうじゃないですか」

琴美「だめだめ」

信乃、琴美から携帯ゲーム機を奪う。下半身裸の純の写真が映っている。

信乃、ゲーム機を持つ手が震える。

琴美「信乃ちゃん、気落とさないでね」

信乃「ちょっとこれ、お借りしていいですか？」

信乃、ロッカーに向かう。

○入江家・純の部屋（夕）

純、携帯ゲームで遊んでいる。メッセージ受信音。

『イーグル：お前んとこのババア学校来たぞ。チクったら裸で土下座させるからな』と表示。

ノックの音。

信乃、携帯ゲーム機を持って現れる。

信乃「純君、この写真」

信乃、純の写真が映る画面を見せる。

信乃「静香ちゃんちのお母さんから借りたの。送信者のイーグルって、鷲尾君のことかな？」

純、押し黙っている。

信乃「純君、いじめられてる？」

純「いじめじゃないよ。遊びだよ遊び」

信乃「仕返しされるの怖い？　何があってもお母さん絶対守るよ」

純「本当に？」

信乃「味方してくれる大人いっぱい見つけて、みんなで守るから。お母さん本気だよ」

純「（涙を流し）無理矢理脱がされた。これって、いじめでいいの？」

信乃「よく話してくれたね。純が受けたことはね、いじめじゃないよ。ただの犯罪だよ」

純「僕が弱いからやられたの？」

信乃「純は強いよ。よく一人で耐えたね」

信乃、純の頬の涙を指で拭く。（了）

「ミイラ男は焼肉の秘密を知っている」人物表

人 物

坂巻 潮(さかまき うしお) (29) ホスト

坂巻 権造(さかまき ごんぞう) (65) 潮の父・『俺の焼肉』社長

坂巻 汪汰(さかまき おうた) (35) 潮の兄・『俺の焼肉』専務

ライカ (24) フィリピンパブ嬢

「ミイラ男は焼肉の秘密を知っている」本文

○坂巻潮の家（回想）（夜）

民家が燃えている。坂巻潮（29）、民家から火だるまになって出てくる。

○ホストクラブ『キング』・外観（夜）

店前にホストの写真が飾ってある。

潮、金属バットやゴルフクラブを持ったホスト達を連れて、店から出てくる。

潮の顔や手は包帯に包まれている。

○『俺の焼肉』武蔵野店・表（夜）

人通りなく、店は閉まっている。

潮、あごで促す。ホストが自動ドアを金属バットで叩き割る。

○同・店内（夜）

無人の店内に潮とホスト達が入ってくる。

潮、防犯カメラを破壊する。

潮「それじゃ、始めっか」

ホスト達、服を脱ぎ始める。

○同・調理場（夜）

潮、調理場に飾ってある社長の坂巻権造（65）の大型写真を破りはがす。

○同・店内（夜）

ホスト達、裸で座り、肉を焼いている。

潮、入口でスマホを構えている。

潮「みんなこっち見てー。撮るぞー」

ホスト達、焼肉を食べつつ、ピースサイン。スマホのカメラ撮影音。

○『俺の焼肉』本社ビル・外観

○同・社長室

坂巻権造、椅子に座り、モリーナ（25）と潮（1）の写真を見ている。

坂巻汪汰（35）、タブレットを持って、部屋に入ってくる。

汪汰「社長、失礼します」

坂巻、モリーナと潮の写真をしまう。

坂巻「どうした専務？ そんなに慌てて」

汪汰「ネットに変な写真が出回っています」

汪汰、タブレットを見せる。ホストが裸で焼肉を食べている写真である。

坂巻「悪戯か？」

汪汰「ホスト達がやったそうなんです、うちへの批判的意見も飛び交ってしまして」

坂巻「なめやがって。名誉棄損で裁判だ」

汪汰「武蔵野店は現在営業停止にしています」

坂巻「あの店、確か3か月連続で赤字だったな。店しめるぞ」

汪汰「しめる？ 閉店ということですか？」

坂巻「裁判の賠償金を店の撤退資金にする」

汪汰「ただでは倒れない。さすが『俺の焼肉』の社長ですね」

坂巻「こいつらからたんまりぶんどってやる」

汪汰「けれど父さん」

坂巻「会社で父さんと呼ぶなっつってんだろ」

汪汰「すみません、社長、防犯カメラの記録が少しだけ残っていたんですが」

汪汰、タブレットをタッチする。

包帯を巻いた潮の写真に切り替わる。

坂巻「こいつ、潮か？」

汪汰「薄暗いからはっきりとは言えませんが」

坂巻「あいつ、あの火事の中で生きてたのか」

汪汰「潮だけ死体が見つかってませんからね」

坂巻「うちら家族へのあてつけか？」

汪汰「潮が私達の家族？ 笑わせないで下さい。父さんが遊んだ女の息子でしょう」

坂巻「次期社長候補のお前とは違うってか？」

汪汰「当たり前です」

坂巻「汪汰、何度も言ってるが、次の社長はお前じゃない」

汪汰「約束が違うじゃないですか？」

坂巻「専務も荷が重すぎたな」

汪汰「これだけ店舗を広げたの、誰のおかげだと思ってるんですか？」

坂巻「調子乗るなよ」

坂巻、『俺の焼肉、遂にマニラ出店』のピラを取り出す。

坂巻「今度出すフィリピンの店、お前に任せる。店長やってみろ」

汪汰「フィリピン？」

坂巻「店の経営、最初からちゃんとやれ」

坂巻、立ち上がる。そのはずみで、モリーナと潮の写真が床に落ちる。

坂巻「毎朝店を掃除するのもいいもんだぞ」

坂巻、部屋を出る。汪汰、写真を見て、

汪汰「まだ忘れられないのか、あの女の子のこと」

汪汰、モリーナの写真を踏む。

○フィリピンパブ『OZ』（夜）（外観）

○同・店内（夜）

包帯を巻いた潮、ライカ（24）の隣に座り、裁判訴訟状を見ている。

ライカ「金目当てだったのに、お金よこせって言われちゃったね」

潮「金目当てじゃねえ」

潮、訴訟状を握りしめる。

潮「あの会社をつぶす」

○歩道（夜）

潮、深夜の歩道を西部劇のガンマン姿で歩いている。顔には包帯。

○『俺の焼肉』本社・表（朝）

太陽も出ていない早朝である。

坂巻、掃除をしている。

汪汰、ナイフを忍ばせ、物陰にいる。

潮が歩いてくる。

汪汰、物陰に身を潜める。

潮「オヤジ、久しぶりだな」

坂巻「お前、潮、潮なのか？」

潮、包帯をはがして不敵に笑う。

顔に大きな火傷の跡がある。

坂巻「モリーナ、いや、お前の母さんが亡くなったのは、本当になんというか」

潮「全部オヤジがやったんだろ？」

坂巻「バカ言うな」

潮、拳銃を取り出す。

坂巻「潮、おい、お前、まさか俺を？」

潮「何で殺す必要があった？ 一族の汚れを知られたくなかったのか？」

坂巻「違う、俺じゃない。俺は指示してない」

潮「じゃあ誰だよ？ 汪汰か？」

坂巻「俺も止めたんだ。そこまでやる必要はないって。早まるな？ な？」

潮「母さんの死に顔見たいかよ？ 俺はな、母さんが焼けてく姿、この目で見たんだぞ」

潮、拳銃を撃つ。

坂巻、脚を抱えて倒れ込む。

坂巻「早まるな、潮。うちで働きたいか？ 汪汰より偉いポスト用意するぞ」

潮「いらねえよ、そんなもん」

坂巻「金か？ 金ならいくらでもやる。な？」

坂巻、財布から一万円札の束を取り出し、潮に投げ渡す。

潮、札束を撃つ。

紙幣を貫通した弾が坂巻の腕に当たる。

潮「やる気うせたわ」

潮、歩道に歩いていく。

坂巻、うめいている。

汪汰、ビルの物陰から現れる。

坂巻「汪汰、潮が、潮が」

汪汰「父さん、悪運だけは強いんですね」

汪汰、坂巻を蹴る。

汪汰「父さんの会社は僕がもらいますよ」

汪汰、坂巻の頭に足を乗せる。

汪汰「金だけ崇めて生きて来た呪いですよ。その呪いは僕が引き受けますから」

坂巻「汪汰……お前と潮は、同じ母親から生まれた兄弟だ」

汪汰「何言ってんだよ？」

坂巻「お前の母さんはな、モリーナ……」

汪汰「言うな！」

汪汰、坂巻を蹴る。坂巻、絶命する。

汪汰、スマホを取り出す。

汪汰「すみません、救急車すぐお願いします！」

救急車の音。

○フィリピンパブ『OZ』外観（夜）

○同・店内（夜）

潮、隣に座るライカを抱いて酒を飲みながら、テレビを見ている。

テレビニュースには、汪汰が映っている。『俺の焼肉社長射殺』のテロップ。

汪汰（テレビ）「信じられません。人に恨まれることなんてない人だったんですが」

ライカ「あれ、潮のお兄ちゃんなんでしょ」

潮「ばか言うなよ。あいつのこと、兄貴って思ったことなんて一度もねえよ」

ライカ「潮が殺ったの？」

潮「俺は殺ってない」

ライカ「じゃあ、誰かな？」

潮、酒のボトルをテレビに投げつける。

テレビ画面が壊れる。

潮「あいつだよ、あいつしかいない」

汪汰、店内に入ってくる。

汪汰「やっぱりここにいたか」

潮「何しに来た？」

汪汰、小切手を潮に渡す。

汪汰「それやるから日本から消えろ。身内から殺人犯は出したくないんだ」

潮「ふざけんなよ」

潮、立ち上がり、汪汰の胸倉をつかむ。

○交番（夜）

ライカが走ってくる。

ライカ「おまわりさん、来て、けんか！」

○フィリピンパブ『OZ』・店内（夜）

ライカ、警察官と一緒に店に入る。

潮と汪汰の姿はない。

○国道（夜）

潮、息を荒げ、脚を引きずりながら、国道沿いの狭い歩道を歩いている。（了）

「アフター・ネグレクト」人物表

人 物

辻野渚（30）元準看護師

香坂恭介（38）NPO職員・弁護士

辻野隆二（35）渚の夫・スナック店主

辻野杏里（3）渚の娘

刑務官

「アフター・ネグレクト」本文

○マンション『ネクロス荒川』・外観

住宅地にある古びたマンションである。

○同・401号室・居間

部屋の中にごみ袋、洗濯物、洗っていない食器やごみくずが散乱している。

辻野渚（30）、ドラマを見ながら赤ワインをボトルごと飲んでいる。

辻野杏里（3）体より小さいTシャツにおむつ姿で、床に寝そべっている。

杏里の体には傷やあざが多数ある。

杏里「お母さん」

渚、テレビのベッドシーンを見ている。

杏里「お母さん」

渚「うるさい」

杏里「おなか、すいた」

渚、床のごみの中からスナック菓子の袋を取り出し、杏里に投げる。

渚「昼飯ね」

杏里、スナック菓子を食べる。

玄関のチャイムが鳴る。

渚、ワインを飲む。

玄関のチャイムが鳴る。

渚「どうせまたあいつだよ」

渚、杏里の体をつかみ、ごみ袋の山の方へ引っ張る。

杏里「嫌だ！」

渚「しばらく隠れんぼね。だまってるよ」

渚、ごみ袋の山の中に杏里を押し込む。

○同・401号室前

香坂恭介（38）、玄関前に立ち、チャイムを押している。

扉が少し開き、渚が顔だけ出す。

渚「ちょっと、うるさいんですけど」

香坂「どうも。育児ネグレクト防止ネットワークの香坂です」

渚「あのね、うちには子どもいないって何度も言ってるでしょ」

香坂「ご近所から子どもの泣き声がしたって、昨日も通報がありました」

渚「は？ 誰？ どの部屋？」

香坂「一旦部屋に入らせてもらえませんか？」

渚「しつこいな。だいたいあんた部屋に入る権利ないでしょ、帰ってよ」

香坂「娘さんに何かあってからじゃ遅いんです。部屋見させて下さい」

渚「今度来たら警察呼ぶから」

渚、ドアを閉める。

○同・401号室・居間

渚、ごみ袋の山の中から、杏里を引き抜く。

渚「くさー、杏里臭いね本当。そのおむつ、かえた方がいいんじゃない？」

杏里、泣きだしそうな顔。

渚「泣くなよ」

杏里「杏里も臭いのやだ」

渚、杏里の身体に抱きつく。

渚「臭いから」

渚、杏里の体を払い飛ばす。

杏里、壁に頭をぶつけ、泣き始める。

渚「ごめん、痛かった？ 痛かったの？」

渚、泣いている杏里の体を抱きしめ、自分も泣き始める。

渚「ごめん、本当ごめんね。こんなことするつもりなかったのに」

杏里「お母さん、杏里も臭いのやだ」

渚「そんなこと言われても、もうおむつもないし、どうすればいいかわかんないよ」

杏里「やだ」

渚「お母さんもやだよ」

バーテン服姿の辻野隆二（35）、ビニール袋を持って部屋に入ってくる。

辻野「おい、めし」

渚「ないよ」

辻野、ビニール袋を渚に投げつける。

渚「痛！」

辻野「それで作れよ」

渚「作れるかよ」

辻野、渚と杏里の前に仁王立ち。

辻野「おい、そいつ、くさ。すげえ匂うぞ」

渚「臭いって、私と隆二の子どもでしょ」

辻野「くさ」

辻野、怯える杏里の体をつまみあげる。

辻野、ベランダのドアを開け、杏里をベランダに出す。

渚「ちょっと、何する気？」

辻野、ベランダのドアを閉める。

辻野「臭いものにふたをしてみました」

渚「やばいって。外で泣かれたら、近所にばれちゃうでしょ」

辻野「そっか。うるさいのは困るよな」

辻野、ガムテープを持って、ベランダに向かう。

○同・同・ベランダ

辻野、怯える杏里の口をガムテープでふさぐ。

○同・同・居間

辻野、ベランダから戻り、渚に向けて、

辻野「これで問題ないだろ」

渚「本気で言ってんの？」

辻野「文句あんのかよ」

辻野、ワインボトルをつかみ、赤ワインを渚の頭にかける。

渚「ひどい！ 何すんの！」

辻野「俺の言うこと聞いてりゃいんだよ」

辻野、ワインボトルを床で叩き割る。渚、バスルームに向かう。

○同・同・ベランダ（夜）

雨である。杏里、体を震わせている。

○同・同・居間（夜）

辻野、スマホをいじっている。

渚、ベランダの杏里を見て、

渚「部屋入れてやろうよ」

辻野、カーテンを乱暴に引く。

渚「杏里のこと殺すつもり？」

辻野「お前、あいつ育てる気あんの？」

渚、押し黙る。

辻野、渚を押し倒す。

渚「やめてよ」

辻野、渚の洋服を破りはがす。

○同・同・ベランダ（朝）

杏里、目をつむって横たわっている。

カーテンと戸が開く。

下着姿の渚、ベランダに出てくる。

渚、杏里の身体を抱えて、

渚「杏里、起きて」

渚、杏里の頬を軽く叩く。

杏里、反応しない。

渚「どうしよう？ 救急車？ 救急車！」

渚、杏里の体を抱えて部屋へ。

○同・表（朝）

救急車とパトカーがマンション前に停まっている。

辻野と杏里、警察官に連行されパトカーへ。香坂、その様子を見つめ、

香坂「また間に合わなかった」

○東京拘置所・表

スーツ姿の香坂、歩いてくる。

○同・面会室

渚と香坂が防護ガラスを隔てて座っている。奥に刑務官。

渚の目、泣きはらしたかのように真っ赤に腫れている。

渚「杏里のこと可愛いとは思ってた。でも」

香坂「もっと早く助けを求めてくれれば、こんなことにはならなかったのに」

渚「杏里、もう焼かれて、骨になったって」

渚、涙を滲ませる。

渚「弁護士だったんですね」

香坂「NPOスタッフと兼業です」

渚「私、裁判なんか出たくない」

香坂「渚さん、前職は准看護師ですよ。専門職なのに杏里ちゃんの衰弱に気づかなかったのは、裁判ではかなり悪印象ですよ」

渚「杏里ね、一度風邪をひいて、それからあまり食事しなくなって」

香坂「どうしてもっと早く病院に連れてかなかったんですか？」

渚「どこも行きたくなかった。私自身、夫に部屋に閉じ込められている気がして」

香坂「旦那さんから、暴力を？」

渚「何であんな男と結婚したのか。お父さんと似てるせいかな。私、小さい頃からずっとお父さんのこと嫌いだったのに」

香坂「マスコミはひどいですよ。あなたのことを鬼だ魔女だって」

渚「私、杏里のお母さんになれなかった。なり方がわからなかった」

香坂「自分を責めないで下さい」

渚「あんな邪見にしたのに、どうして私の味方なんかしてくれるの？」

香坂「僕も育児放棄の被害者だったんです」

渚「それじゃ私なんかと話したくないんじゃない？」

香坂「杏里ちゃんも、渚さんも、旦那さんもみんな被害者だった。さしのべる手立てがなかったと感じています」

刑務官「そろそろ時間です」

香坂、礼をして、立ち上がる。

渚「待って。拘留所に娘の遺骨があるんです。お墓ができるまで、信頼できる人に遺骨を預かって欲しいんです」

香坂「わかりました。知り合いに住職さんがいます。話を聞いてみますよ」

渚「ごめんなさい、こんなこと言えるの、あなたしかいなくて」

香坂「渚さん、頼っていいですよ」

刑務官「時間です！」

渚「また、話聞いてもらえる？」

香坂「何度でも足を運びますよ。渚さんの供述は次の犠牲を止める助けになりますから」

香坂、部屋を出る。（了）

「お父さんもう来ないで」人物表

人 物

氷堂レイ (30) 刑事

氷堂甚太郎 (57) 殺人犯

多門海 (40) レイの上司

入江洋介 (28) レイの後輩

「お父さんもう来ないで」本文

○西都小学校・外観（夜）

木造3階建ての古い廃校。

雨が降っている。

何台ものパトカーのサイレンが鳴っている。

校舎入口に『西都小学校』。

入口近くにパトカーが停車している。

○同・1階廊下（夜）

氷堂レイ（30）が拳銃を構えて、廊下の壁際に立っている。

レイの胸元の無線機から、多門海（40）の声が鳴る。

多門の声「犯人は現在逃走中。発見した者はただちに連絡せよ」

レイ、忍び足で教室の入り口に近づく。

レイ、扉を蹴破り、教室内に突入する。

○同・教室（夜）

レイ、暗い教室内を見回す。

人影は見えない。

レイ、銃を構えつつ、教壇前をゆっくり進む。

教室の奥で物音。

レイ、動きを止めて、音のした方に銃を向ける。

雷が鳴る。

稲光に照らされて、銃口の先に氷堂甚太郎（57）の姿があらわになる。

氷堂は天狗のお面をかぶっており、全身黒づくめの服装である。

手に持つ銃はレイに向けられている。

レイ「動くな！」

レイ、銃を構え直す。

レイ、銃を構えつつ、ゆっくり氷堂に歩み寄る。

大きな雷が鳴り、教室内が光に照らされる。

氷堂の銃を持つ手が震え始める。

レイ「何人も人を殺したくせに、怖気づいたか？」

氷堂「……お前一人か？」

レイ「逃がさないぞ！ 銃をおろすんだ」

氷堂、銃を持つ手がさらに震える。

レイ「おろせ！」

氷堂、銃をおろす。

レイ、氷堂に駆け寄る。

氷堂、再び銃を構える。

レイ、動きを止める。

レイ「何のつもりだ？」

氷堂、レイに銃口を向けたまま、天狗のお面をはがす。

近くに雷が落ちる音。

氷堂の顔が雷光ではっきりと見える。

レイ「え？ お父さん？」

氷堂「……レイ」

レイ、銃を床に落とす。雨音が強まる。

レイ「お父さんなの？ 嘘でしょ」

氷堂「レイ……ごめんな」

レイ「お父さんが……全部やったの？」

氷堂「レイ、助けてくれ」

氷堂、レイに駆け寄ろうとする。

レイ「動くな！」

レイ、銃を拾い、氷堂に銃口を向け直す。

氷堂、銃を床に放り投げる。

氷堂「やりたければやればいい。俺を殺すことがお前の仕事なんだから」

レイ「うるさい！」

レイの無線が鳴る。

多門の声「レイ！ 犯人の居場所がわかったぞ！ 今から突入する！ お前も来い」

レイ「了解」

多門の声「場所は西都小学校。廃校だ！」

レイ「至急向かいます」

レイ、無線を閉じる。

レイ「お父さん、逃げて」

氷堂「そんなことしたら、お前まで」

レイ「早く！」

パトカーのサイレン音が大きくなる。

氷堂「すまん」

氷堂、教室の窓を開けて外に出ると、右方向に走り出す。

レイ、氷堂の銃を拾い、自分の左腕に銃口を向ける。

○同・一階廊下（夜）

多門が入江洋介（28）と部下数名を連れて廊下を歩いている。

発砲の音。

多門「急ぐぞ！」

多門と入江達、駆け出す。

○同・教室（夜）

レイ、かがみこんで、左腕をおさえている。左腕からは血が出ている。

人が走ってくる音がする。

レイ、氷堂の銃を胸元に押し込んで隠す。

多門と入江達が教室に入ってくる。

多門「レイか！ 犯人はどこだ！」

レイ「逃がしました。こっちです！」

レイ、窓の左を指さす。

多門「よし！ 追いかける」

部下達が窓の左側に走り出す。

多門「ああ待て、入江は東の方探せ」

多門が右を指さす。

入江、右に向けて走り出す。

多門「顔は見たのか？」

レイ「いえ」

多門「いえって、お前、お面落ちてるじゃないか」

多門、ライトで床に落ちている天狗の面を照らす。

レイ「すいません、撃たれて動揺して」

多門「見たんだな？」

レイ、押し黙る。

○住宅街・歩道（夜）

古びた住宅が並ぶ山沿いの住宅街。

雨に打たれながら氷堂が走っている。パトカーのサイレン音が聞こえる。

氷堂、トンネルに向けて走り出す。

○西都小学校・教室（夜）

多門がレイの傷の応急手当をしている。

多門「何で見てないなんて嘘ついた？」

レイ「本当に見てないんです。顔見る前に撃たれて」

多門「お前ほどの女が撃たれるなんてな」

多門の無線が鳴る。

入江「多門長官、犯人確保！」

多門「よし！ どこだ？」

入江「東通り沿いのトンネルです」

レイ、つばを飲み込む。

多門「すぐ向かう！」

多門、走って教室を出る。

途中、多門の脚が天狗のお面を踏みつぶす。天狗の鼻が折れる。

レイ、多門を追いかけて走り出す。

○住宅街・トンネル入り口（夜）

トンネルの入り口にパトカーと警官が集まっている。

雨しずくを拭いている入江の顔には、殴られた跡がある。

多門とレイが人ごみをかき分けて、入江の前に現れる。

多門「犯人は？」

入江「ここです」

トンネルの中に男が横になっている。

男の顔には白い布がかけられている。男は黒づくめの服装である。

レイ「射殺したの？」

入江「やってないって随分抵抗したんで」

レイ「顔わかんないだろ！」

入江「何人も殺したやつですよ」

多門「正当防衛ならしょうがないさ」

入江「撃たれるかと思って先に撃ったんすけど、やつ、銃持ってなかったんすよね」

多門、男の前にかがみこむ。

多門「レイ、確認しろ」

レイ「私……ですか？」

多門「お前がやれ」

レイ、男の顔にかけられた布に手をかける。

多門「見てるんだろ。確認しろ」

レイ、ゆっくり布を持ち上げる。

氷堂とは別人である。

多門「どうだ？ 天狗野郎と同一人物か？」

レイ「……はい」

多門「レイ、本当なんだな？」

レイ「……はい」

多門「署に運べ」

警官たちが死体を持ち上げる。

○レイの自宅マンション・外観（夜）

高層マンション。明け方近い。

雨の中、タクシーがやってくる。

○同・玄関前（夜）

レイがマンション玄関の鍵を開けようとする、柱の陰から氷堂が現れる。

レイ「お父さん」

氷堂「ニュースで犯人捕まったって。嘘だろ」

レイ「もう私のところに二度と来ないで！」

氷堂「俺、無実でいいのか？」

レイ、首を振る。

レイ「遠くに逃げて。逃げ続けて！」

氷堂「レイ、俺は」

レイ「早く！」

氷堂、雨道を走り出す。

○同・レイの部屋（夜）

部屋に入ってきたレイが電気をつける。

レイ、洋服を脱ぐ。

ブラジャーに挟まっていた氷堂の銃があらわになる。

レイ、包帯の巻かれた左腕で銃をつかみ、テーブルの上に置く。（了）

「紙袋の女」人物表

人 物

倉橋ネネ (25) フリーター

町村静雄 (30) 会社員

真島清治 (35) 結婚相談所職員

工藤美香 (25) 町村の部下

「紙袋の女」本文

○歩道

倉橋ネネ（25）の脚が見える。
黒のハイヒールでゆっくり歩いている。

○居酒屋綱吉本社・面接室

町村静雄（30）が奥のテーブルに座っている。手前の椅子は無人である。
町村は、氏名欄に『倉橋ネネ』と書かれた履歴書を見ている。
履歴書の写真欄には、写真が貼られていない。

町村「おかしいな、はがれたのかな？」

町村、書類をめくって写真を探す。

○同・エントランスホール

ネネがホールを歩いてエレベーターに向かう。下半身までしか見えない。

○同・面接室

町村、腕時計を見て、

町村「次の方どうぞ」

ノックの音。

ネネの声「失礼します」

ドアが開き、ネネが入ってくる。

ネネは、頭に紙袋をかぶっており、顔が見えない。

目のところに穴があいていて、目だけが見える。

ネネが歩く姿を凝視する町村。

ネネ、椅子の横に立つ。

町村「君、紙袋って」

ネネ、礼をする。

ネネ「はじめまして、倉橋ネネと申します」

町村「いや、だから紙袋」

ネネ「座ってよろしいでしょうか」

町村「紙袋取ってからでしょ」

ネネ「は？ 紙袋？」

町村「紙袋、あなた今してるよね。とってそれ」

ネネ「とれません」

町村「なんでよ？」

ネネ「ちょっと事情がありまして」

町村「何事情って？ 怪我？」

ネネ、首をふる。

紙袋がごそごそ音を出す。

町村「怪我じゃなきゃ何？ 恥ずかしいとか？」

と笑顔で尋ねる。

ネネ、首を振る。

町村、真顔になって、

町村「じゃあ何？」

ネネ、無言で座っている。

町村、ネネをにらむ。

ネネ、紙袋の位置を直す。

町村「ここね、芸人の面接してるわけじゃないから。ふつうの企業の面接。わかる？」

ネネ「わかります」

町村「何か事情あるんだろうけど、面接の評価に響くよ。それでもいいの」

ネネ、うなづく。紙袋がずれたので、また元の位置に戻す。

町村「一応聞くけど、志望動機は何ですか」

ネネ「特にありません」

町村「特にありませんって、あなたね。おちよくってるの」

ネネ、首を振る。がさごそ音がする。

町村「こっちも忙しいの。仕事なの」

ネネ「仕事、忙しいんですね」

町村「はあ、じゃ特技とかありますか？」

ネネ「笑顔には自信があります」

町村「あれかな、今笑ってるのかな？」

ネネ「真顔です」

町村「そうですか、顔が見たいなあ」

ネネ「ちょっと、近くまで行っていいですか？」

町村「何？ 顔見せてくれるの？」

ネネ「ちょっとだけです」

ネネ、立ち上がって、町村の近くによる。

かがんで紙袋をしたまま、町村の顔に自分の顔を近づける。

町村の顔に紙袋が当たる。

目の前にある町村の顔を凝視するネネ。

町村「何？ 何かついてる？」

ネネ、腰をあげて、溜息をつく。

○同・表

紙袋をかぶったままのネネがビルから出てくる。

しばらく歩いた後、ネネが紙袋を外す。

歩道にセダンが止められている。

ネネ、助手席に乗り込む。

○同・オフィス

パソコンとデスクが並ぶオフィス。

工藤美香（25）が結婚相談所のパンフレットを見ている。

町村が部屋に入ってくる。

町村、工藤の隣の席に書類の束をおく。

工藤「面接終わりました？」

町村「うーん、一人変なのが入った」

工藤「変なのって？」

町村「紙袋かぶって面接受けに来たの」

工藤笑う。

工藤「何それ？ 本気ですか」

町村「とろっかなあれ。スタイルいんだよね」

工藤「町村課長、こんなのやってるんですか」

工藤、結婚相談所のパンフレットをひらひらさせる。

町村「勝手にデスクあさらないでよ」

町村、パンフレットを奪い返す。

町村「ちょっと休憩もらおうわ」

町村、廊下に向けて歩き出す。

○自動車の車内

運転席に真島清治（35）。助手席にネネ。停車中である。

真島「どうやった？」

ネネ「なかなかイケメンでした」

真島「次も会いたいかな？」

ネネ「うーん、まあ」

真島「30歳で課長やで。ええ条件やろ」

ネネ、紙袋をつかみあげて、

ネネ「けどこれいいんですか？ 絶対あやしくないですか？」

真島「いいって」

ネネ「だってほら、向こうもすごい気にしてたし」

真島「気にすんなって。紙袋かぶっとるやろ。相手が油断するやろ。こういうのが大事なんやて。もうネネちゃんのこと忘れへんて」

ネネ「普通の結婚相談所に頼むんだったなあ」

真島「出会いが肝心なんやて。次会って顔見せたら、するするいくわ」

ネネ「もうかぶりませんからね、これ」

真島「ネネちゃん！ 来た！ 町村さん！」

歩道に町村が歩いている。

真島「ほれ、はよ紙袋かぶって」

ネネ「ええ？」

真島、ネネから紙袋を奪い、ネネの頭にかぶせようとする。

真島「ここで見つかったらあかんて！」

ネネ「いやいや、紙袋かぶってる方が絶対あやしいでしょ」

真島「じっとして！」

ネネ、紙袋をかぶる。

町村、ネネに気付いてあゆみをとめる。

ネネ、手を振りながら、

ネネ「最悪」

町村、手を振り、通り過ぎる。

真島「ほ一、あぶな」

ネネ、紙袋を外し、髪型を整える。

ネネ「もう、これかぶりたくないな」

真島「町村さんと会う時は、しばらくかぶっとくか」

ネネ「いやいや、もうかぶる必要ないでしょ」

真島「会社で会う時はかぶった方がええんちゃう？ 採用されたら毎日会うことになるんだし」

ネネ「採用されるわけないですよ」

真島「一旦事務所戻るか。次の作戦考えよ」

真島、アクセルを踏む。（了）

「はしるかける」人物表

人 物

神宮翔（29）陸上選手

神宮瀬奈（9）神宮の姪

神宮明美（34）神宮の義姉

アナウンサー

司会進行

ママさん1

ママさん2

スターター

「はしるかける」本文

人 物

神宮翔（かける）（29）陸上選手

神宮瀬奈（9）神宮の姪

神宮明美（34）神宮の義姉

アナウンサー

司会進行

ママさん1

ママさん2

スターター

○陸上競技場

トラックのスタート地点に並ぶ選手の中に神宮翔（29）がいる。
スタンドに満員の客。
テレビクルーがカメラを構えている。
鉄砲の発射音。
選手達が一斉に駆け出す。

○神宮家・リビング（朝）

大画面のテレビに先程の競技映像。
体操着を着た神宮瀬奈（9）が、朝食を食べつつテレビを見ている。
神宮明美（34）は奥のキッチンで弁当を準備している。

アナウンサー「神宮選手、コーナーで抜いた！」

瀬奈「おじさん行けー！」

テレビに映る神宮がゴールする。

アナウンサー「一位は神宮翔です！」

瀬奈「やったー！」

瀬奈が部屋を走り回る。

明美「瀬奈、もう何回同じ映像見てんの！」

瀬奈「イメトレだよイメトレ！」

○住宅街・道路（朝）

ジャージ姿の神宮が歩道を全力で走っている。

○神宮家・リビング（朝）

瀬奈、神宮の競技映像を見ている。

明美、水筒に麦茶を入れている。

明美「翔君、遅いなー」

玄関のチャイム音。

瀬奈「来た！」

瀬奈、扉を開けて、廊下に走り出す。

明美「走らないで！」

廊下から二人の走る足音。

神宮「おはようございます！」

神宮と瀬奈が走ってリビングに入る。

明美「もう！ 走らないでって言ってんのに」

瀬奈「おじさん！ さっきもおじさんが走ってるの見て、イメトレしてたの」

尊「よし、瀬奈ちゃん、準備体操するぞ」

瀬奈と神宮が部屋の中で体操を始める。

明美「翔君悪いね、明日大会なんでしょ？」

神宮「いいですよ、兄貴いないんだし、僕走るために生きてるようなもんですから。姉さん気にしないでください」

瀬奈が壁の時計を見る。8時である。

瀬奈「おじさん、もうこんな時間」

神宮「おし！ スタート！」

神宮と瀬奈が走り出す。

○富士見小学校・校門（朝）

校舎に『富士見小学校運動会』の横断幕が貼ってある。

児童と父兄が登校している。道路の向こうから神宮と瀬奈が走って来る。

明美は二人を追いかけている。

明美「始まる前にそんな走ってどうすんの？」

瀬奈のやや後ろを神宮が走っている。

神宮「瀬奈ちゃん、短距離走はコーナーがポイントだよ」

瀬奈「コーナー？」

神宮「曲がるところで一気に抜くんだ、ほら」

神宮、曲がりながら瀬奈を抜いて、校門を通過する。

○同・グラウンド・父兄観覧席

運動会の競技が行われている。

明美は父兄観覧席に座って見ている。

その後ろで神宮が走り回っている。

明美「小学生より子どもっぽいんだから」

司会進行の声「次の競技は、3年生親子リレーです。参加されるお父さんは、グラウンドの集合場所に集まってください」

神宮、ジャージを脱ぎ、ランニングシャツに短パン姿になる。

ママさん1「気合入ってるねあの人」

ママさん2「あれ、陸上選手じゃない？ ほら、前オリンピックとか出た」

神宮、走ってグラウンドに向かう。

○同・競技トラック

瀬奈がバトンを持って、スタート地点に立っている。

コーナーの先に並ぶ中年男性の中に神宮がいる。

笑顔で手を振る神宮。

大きく手を振り返す瀬奈。

スターター「位置について一、よーい……」

笑顔で構える瀬奈。

スターターが鉄砲を発射する。

瀬奈を含めた小学生が走り始める。

声援の中、笑顔で先頭集団を走る瀬奈。

コーナーで他の選手と接触、瀬奈が転倒する。

バトンが転がる。

神宮「瀬奈ちゃん！」

瀬奈、立てない。

神宮の周囲では、子どもからバトンをもらった父親達が走り始めている。

明美の声「瀬奈！ ファイト！」

瀬奈、立ち上がり、苦しげな顔でバトンを拾う。

ゆっくり走り始める瀬奈。

神宮、走り出す姿勢で構える。

片方の手を後ろに伸ばし、瀬奈の到着を待つ。

他の選手が全員ゴールする。

瀬奈、よろけながら走り、神宮に近づく。

瀬奈「おじさん、ごめん」

神宮「任せとけ！」

瀬奈からバトンをもらった神宮が必死の形相で走り出す。

瀬奈、その場に倒れる。

無人のコースを全力疾走する神宮。

観客席から声援。

神宮がゴール。観客席から拍手。

倒れたままの瀬奈。

神宮、走って瀬奈のもとに向かう。

○富士見病院・廊下

神宮と明美がベンチに座っている。

明美「明日、大会じゃないの？」

神宮「気にしないでください」

瀬奈が診察室から出てくる。

ひざにガーゼを巻いている。

神宮と明美が立ち上がる。

明美「どうだった？」

瀬奈「骨は異常ないって」

明美「心配させて」

神宮「瀬奈ちゃんごめん。俺が、コーナーが勝負だなんて言ったせいで」

瀬奈「おじさんのせいじゃないよ」

神宮「ごめん」

神宮、深々とおじぎする。

瀬奈「おじさんみたいにうまくいかなかったね。絶対一位取れるって思ってたのに」

神宮「明日の大会で絶対一位取るよ」

瀬奈が笑顔で駆け出す。

明美「こら！ 走っちゃだめでしょ！」

神宮、走って瀬奈を追いかける。（了）

ショートドラマ・シナリオ作品集

<http://p.booklog.jp/book/81963>

著者：野尻有希

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/feltmail/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/81963>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/81963>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ